

山 嶽 寮

甲南山岳会通信 第79号 2025年10月



甲南山岳部創部 100 周年記念

2025 KONAN ALPINE CLUB 100th ANNIVERSARY

甲南山岳部・甲南山岳会



甲南高等學校
山岳部報告

創刊號

1927

(甲南山岳部 報告 創刊号 表紙)

山嶽寮 甲南山岳部創部100周年記念号

山岳会通信第79号

2025年10月

<u>ご挨拶 100年を迎えて</u>	渋谷一正	…… 2
<u>甲南中、高、山岳部の思い出</u>	北方竜一	…… 3
<u>北アルプスの生い立ちと上高地の形成</u>	川村静治	…… 9
<u>岳友達</u>	鈴木頼正	……11
<u>甲南山岳部100周年に思う</u>	越田 和男	……13
<u>100周年に寄せて</u>	柏 敏明	……16
<u>アメさんの存在、私達の時代</u>	石原浩二	……19
<u>山への思い</u>	赤田正和	……24
<u>甲南山岳部創立100周年に寄せて</u>	南里章二	……27
<u>創立100周年を迎えて 山仲間と山紀行</u>	村田信一	……30
<u>新入部員諸君へ</u>	中澤章浩	……38
<u>祝甲南山岳部100周年</u>	松本好博	……40
<u>100周年に寄せて</u>	松成 健	……41
<u>山岳部番外編つれづれ日記</u>	高橋けい子	……44
<u>部室前の長椅子</u>	鷹巣久美子	……46
<u>人生の再起動ボタンは「山」だった</u>	大柳香代子	……47
<u>最近の山歩き</u>	鳥井陽子	……52
<u>マメちゃんの近況報告</u>	豆田隆志	……54
<u>川野幸彦・現役時代を振り返る</u>	川野幸彦	……55
<u>一人で山に行くということ</u>	山本恵昭	……60
<u>氷ノ山と阪神淡路震災の思い出</u>	吉川 寛	……62
<u>甲南山岳会以外の交流を振り返って</u>	阿部康彦	……64
<u>甲南バットレス再整備</u>	阿部康彦/川口豊	……67
<u>現役 私の100周年—山岳部再建の記録—</u>	松田優作	……70
<u>現役活動報告</u>	出口維吹	……72
<u>追悼 松山弘和さんを偲ぶ</u>	西名俊英・宮崎哲・田中一也	……76
<u>会員短信・報告2024 年秋の集会案内から</u>	西村清（編）	……79
<u>会員短信・報告2025 総会慰霊祭から</u>	西村清（編）	……83
<u>HP 掲示板ダイジェスト</u>	大柳香代子（編）	……86
<u>山嶽寮総目録（57号から78号まで）</u>	川口豊（編）	……96
<u>編集後記</u>	渋谷一正	… 108

山嶽寮記念号発刊のご挨拶

本年、甲南山岳部は創部百周年の節目を迎えることとなりました。

日本の山々の中で六甲山ほど明るく開けた風貌をもつ山は稀でありましょう。白く乾いた花崗岩の土壌は阪神平野の陽光を照り返し、大阪湾は湖のように静かに光を湛えています。甲南の地は、こうした風景それ自体にひとつの完結性を備えているかのように思われます。

甲南の山登りとは、この六甲の風景を青春の心象画として分かち合ってきた人々の学びの場であり、戦前・戦後を問わず、幾世代にもわたる私たちが、言葉を交わさずとも理解し合える「心の仲間」としての登山でありましょう。探検的というよりも、自然と対話し、風景とともに楽しむ山登りこそが、甲南の山登りの基底にあると感じております。

甲南山岳部の起源は、大正十二年（1923）、旧制甲南高等学校の開設と同じ年に遡ります。尋常科の生徒であった香月慶太先輩の提案により「遠足部」として発足し、これが私たちの原点となりました。その後、大正十四年に「山岳部」と改称し、日本の近代登山史に幾多の足跡を残してまいりました。太平洋戦争中は学校方針により「剛健旅行班」への名称変更を余儀なくされましたが、部室前には「KONAN ALPINE CLUB」の看板を掲げ、戦後は甲南大学山岳部、新制甲南高等学校・中学校山岳部へと伝統を受け継ぎ、今日まで百年の歴史を紡いでまいりました。創部わずか五年後にはOB組織「甲南山岳会」が結成され、学制改革を経て高・中・大それぞれのOBが一体となり、旧制以来の精神と伝統を大切に守り続けています。本会には正式な会則はなく、「甲南 SPIRIT」という不文の理念こそが、その運営の礎であり、世代を超えて私たちを結びつけ、卒業後の私たちの未来への道しるべとなっております。この記念すべき節目を迎えることができたのは、創設以来、部を支えてくださった多くの先輩方や関係者の深いご尽力、温かいご支援の賜物にほかなりません。ここに深甚なる謝意を表し、次の百年に向けて伝統と誇りを胸に、なお一層の歩みを続けることをお誓いいたします。

令和七年（2025年）

甲南山岳会 会長 渋谷 一正

私が甲南高等学校山岳部に入部したのは昭和24年5月です。

4月、御影の付属小学校より中学校に入学早々、5月に春の一般募集キャンプがあるとの校内掲示に、同じクラスの市田壮一君(甲南小学校出身)と参加しようと、当時中庭の相撲土俵前にあった山岳部の部室を訪問しました、隣は確か剣道部であったと思います。戦後は、柔剣道その他武道関係はGHQによって禁止されましたので、賑やかな山岳部に比べ、何時もひっそりとしていました。5月に苦楽園の大谷別荘の近く、池のほとりにテントを張りました。当時の参加メンバーはあまり覚えていませんが、15名近かったと思います。

あくる日は池で泳ぐことになっており、我々はあらかじめ持参した海パンでしたが阿部先輩は日本伝統の褌で、かなり使い込んだ物でしたから、傷みがひどく部分的にカットすると長さが不足し、形を整えるのに苦労がありました。全員見ていましたので、大爆笑でした。

記憶では、宮本侑、阿部公義、丸山ハルシゲ、田辺潤、木全実、麻島重彦、ほかの先輩です。

結局一般募集の参加者は私と市田君の2人でした。

山岳部では全員あだな呼びとは知りませんでしたが、旧制の河崎厚二オタマ先輩が当時新聞の連載小説になっていた獅子文六の“自由学校”に出てくる“五百助”に似ているから、北方は今後“イヨスケ”と呼ぼうと発言、全員一致で決まりました。

米山バブさんは、後日家内ずれで、フランクフルトで食事をごちそうになったとき、盛んにイヨスケ、イヨスケと言われたので家内はビックリしていました。年配になってからは、子供ずれで何度かスキーでご一緒し、ドイツから家内にボアのミトン手袋などが届き大喜びでした。河崎オタマさんは、その後、日暮れ時にも拘らず、自宅まで入部勧誘に来られました。旧制高校の3年生ですから21才で、中一(12才)の私にとってはまさにオッサンです。断ることもできず。承諾しました。7月の夏山合宿は恒例の湊沢です、私は少々体格が良かったので、迷惑をかけることもなく無事に終えたのですが、当時の一年生は、小学校低学年でも戦時中の教練を受けており、かなり体力がありました。後日大学で新入部員の体力のなさに驚き、まず体力作りから始めなければなりませんでした。

夏山合宿では、河崎オタマさん、阿部ペーさん、宮本ミヤナイさん、田辺ガチャさん、丸山コボーズさん、木全ガイさん、門屋ポッポさん他大勢でした。まだ物資不足の戦後経済で、装束は、旧陸軍や米軍の放出品に頼り、足元は地下足袋といういで立ちでした。

奥穂、ジャンダルム、前穂の1,2,3峰、北穂と登りましたが、ジャンダルムのやせ尾根ではかなり恐怖を感じました。雪渓でのピッケルの使い方訓練など、私も叔父よりプレゼントされた昭和初期のミズノ製ピッケルを持参し、大変珍しがられましたが、シャフトが長く、使用に不便で、帰宅後ヒッコリーシャフトをかなり切り縮めました。札幌の門田、仙台の山之内などがあり、山之内は国宝級の感がありました。その後、ロックガーデン、道場の百丈岩、六甲の堡塁岩(この岩場の頂上には、後日友人に設計を依頼して某社の立派な山荘を新築しました。

これに関しては、兵庫県の山岳連盟より苦情が一言ありましたが、私有地につきやむをえませんでした。)などで、主に田辺ガチャさんにしごかれました。山靴に関しては東京の高橋、松本の竹内、大阪の吉田などが有名でしたが、すべて手造りのため、可成り高価で、高橋などは注文後入手まで約1年を要しました。

私は宮本ミヤナイさんの紹介で、好日山荘の島田慎之助シマシンさんより戦前の米日貿易製中古品を入手しました。

これは後日底皮を張り替えて、全面にトルコニー8番を打ち込み、ロッククライミング用に改造しました。



ザイルに関しては東京製綱製品のみで、

まだナイロン製は信頼度が低く、戦前の英国製アーサーヴィールの30メートルが2本ありましたが練習用には使用禁止でした。

これらのお蔭で、私のロッククライミング技術もかなり向上し、大学で丸山コボーズさんと、“鳥も通はぬ”と言われた、滝谷の第4、第5を始め、最後は有名な第1に挑戦しようと計画し、その日は、第3を登攀して、北穂沢をグリセードで降り始めたのですが、急にガスり、全く視界がなくなりました。小屋で休憩してい

た時に、ほかに7~8名のグループがいたのですが、我々よりも先に出発したにもかかわらず視界が悪いため、小屋のすぐ下で追いつきました。我々も立ち止まってコースの順番を待っていると、一人の女性がスリップしてピッケルを手放し、急斜面を落下してゆきました。我々は前日に新入部員の雪上訓練で、グリセーディング中にピッケルを手放した場合の処置について、徹底的に訓練し、私も故意に手放して、スリップしながら手繰り寄せるデモ中に、雪面ではねたピッケルが顔面を打ち、少々けがをしていました。女性は悲鳴を上げて滑ってゆきましたが、グループの連中は誰も救助に飛び出そうとしません。リーダーをはじめ全員グリセードに不慣れな様子でした、最も当時北穂小屋直下の雪渓は急傾斜で私も少なからず躊躇したほどでした。私は大声で“俺が行く”と叫び、咄嗟に飛び出して女性の後を追いましたが、ガスが深くなり視界もゼロに近く、雨も激しく、かなり滑っても視認できません、傾斜が多少緩やかになった地点で、やっと前方にまだスリップしていく人影を確認しました。スピードアップしましたが前方に露出した岩があり、女性は激突して乗り越え、やっとスピードが落ちました。飛びついたのですが、こちらピッケルから両手を離すことは出来ません、しばらく一体となって滑ってゆきました。

冬の雪と異なって半氷のような状態ですからピッケルが使えないと、止めようがありません。やっと停止したのですが、グリセードの訓練を全く受けて居ないと見えて、最後まで頭から滑っていたものですから、岩場で頭部を負傷し、出血がひどく目が見えないとのことでした。手足の骨折が無いか、手を引張ったり、靴底の裏を叩いたりして調べ、私のサブリュックより汗だらけのタオルを取り出して頭に巻き付けました。雨がひどく、寒い寒いというので、雪のな

いところに寝かせ、頭部を持ち上げて、覆いかぶさるように抱いていました。解るか！と言ったところ、北穂小屋でお会いした方ですねと言ひ、意識も戻りました。丸山君も到着し、グループメンバーもやってきましたので、リーダーと思しき男性に、骨折はなさそうだが、岩に頭部を打ち付けたので精密検査するように、と引き継いで、急ぎ涸沢のベースキャンプに戻りました。日没になり、他のメンバーは、滝谷で転落したのではないかと思い始めていたところでした。東京の社会人山岳会だったようで、彼女はかなり知られた登山家と後程聞きました。その後礼状に続いて、何度か手紙をもらいましたが、なんでも山好きの男性と結婚し、彼は営林署に務めて、全国の営林事務所を転々として、今は尾瀬の第2長蔵小屋で生活しているなどと、転勤の度毎に“一度お越してください”と便りをもらいましたが、こちらの勝手に、ついに伺えませんでした。

3度目の夏山合宿の時、平井吉夫君のお母さんが大阪駅まで見送りに来られました、“くれぐれもよろしく願ひします”と丁重に言はれ、田辺ガチャさんと、時代も変わったなーと痛感していました。毎年夏は涸沢合宿ですが、各校のテント場はほぼ決まっております、立教大学は甲南より何時も上部でした。立教の巨大な圧力釜は有名で、朝晩、涸沢中に響く減圧蒸気の汽笛は有名でした。高度の関係で100度C以下で沸騰するものですから、米飯の味は今一つでしたので、皆慈望のまなこでした。しかし鑄鉄製の釜は荷揚げが大変で、我々には不可能でした。



1952年12月の冬山合宿は神城部落の下川又寛邸を基地にして厳冬の五竜岳登山と鹿島槍偵察を目指したのですが、連日の降雪で、遠見小屋に至る夏道も肩までのラッセルとなり、



1日目はいくらも登れず途中で荷をデポし、目印を立てておいたのですが、降雪やまず、二日目も昨日のラッセルは跡形もなく、一からのやり直しで、荷揚げには4日を要しました。遠見小屋を経て小遠見にテントを張りました、しかし連日の吹雪で何日も沈殿が続き、燃料のガソリンが少量となりました。何日目かにやっと晴天となり、五竜岳登頂はあきらめ、全員で大遠見まで行きました。

鹿島槍と五竜岳を目の当たりにして、食料も乏しくなり今回は断念することになりました。今回のメンバーは、河崎オタマさん、田辺ガチャさん、米山バブさん、三木ゴミセンさん、私に、なぜか甲南生ではない、成瀬さん、森さん、(奈良医大生と聞いた)の6名であったと思います。この時の大降雪はその後も経験がありません。



1955年3月、春山では南又合宿で中部電力南又発電所の無人小屋を借りてスキーなどの練習をし、猿倉小屋日帰りなどをやりました。参加者は私、田辺ガチャさん、牧野ドングリさん、平井センキチさん、柏木カシブーさんに顧問の藤岡先生です。このころより合宿は顧問同伴が義務づけられました。連日の降雪も落ち着き、天候も回復したのでシールを装着して山スキー練習に出かけました。急斜面で小さな表層雪崩が発生し、何名かが流されました、田辺ガチャさんの指示で柏木カシブーさんを救助に斜面を降りていくと、森林帯の立ち木で停止し倒れていました、当然スキーははずれて在りません、怪我もないので引き起こして、さらに下って立ち木に引っかかっているソリを見つけました。驚いたことに左右とも靴が外

れずにソリについたままです。夜間、靴が凍結するので、必ず抱いて寝るように指導していたのですが、そうはせず放置していたと見えて、凍結し、早朝の出発時に靴紐がまともに結べなかったようです。このようなズボラ行為は冬山では一命にかかわります、大声で怒鳴り付けました。あくる日は猿倉小屋まで往復しましたが新入部員の訓練は大変です。柏木カシブーさんのお父さんは柏木建設の創業社長で相楽園のハンター邸移築工事なども施工し、私も大学卒業後、建設業協会などで同業者としてお世話になりました。お姉さんは神戸女学院で家内と同級生と後ほど知りました。



この年は8月に合宿後、塩田エンタさんと二人で針ノ木峠から平、五色平、立山、剣、池の平、阿曾原、宇奈月と、トレッキングしました。まだ黒四ダムは工事半ばで、平小屋では河原の温泉で疲れをいやしました。大学は家業の都合で大阪工大の建築科に進みましたが、丸山コボーズさんとの出会い、ともにハンドボール部に入部しました。高校時代には二人とも山岳部とかけ持ちを

していましたが、当時、高校のハンドボール部は珍しく、兵庫県では県立工業高校が強豪でした。驚いたことに其の時の連中がそっくり揃っていました、阪大との2部入れ替え戦で敗退し、先行きに見切りをつけました。大工大の山岳部は当時同好会でしたので二股も認められたのですが、この年部に昇格しました。前身の旧制摂南工業高専の山岳部はかなり有名で、わたしもその名声は耳にしたことがありました、しかし現在では装備もメンバーもお粗末で、都島工業高校出身者がリーダーで、その他は夕陽丘高校卒の大倉（後ノエビアの創業社長）以下の素人集団でした。丸山コボーズさんと二人で入部し、これを引っ張っていくことになりました、私はまず摂南高専時代の有力な先輩を2人さがしました。何しろ経済的には余裕のない地方出身者が多く装備が揃いません、将に遠足クラブでした。見つかった先輩は、大阪で最も古く、その筋では有名な写真材料会社の専務取締役。もう一人は、山好きのあまり信州大学を卒業し

て大町高校の教員を務め、地元の女性（中学生）と結婚して、現在は大日本印刷に務めているという強者です。

梅田の山の店の岡さんとも親しく、二人が保証人となってメンバー全員、卒業までの長期の分割払いで必要道具をそろえました、ザイル、テント、ザック等も寄付してもらい、厳しい練習も可能になりました。ある年、積雪期の合宿を終えて帰宅し装備品を乾燥してしまいこんだところに、福永オオブクさんの小窓谷滑落遭難の知らせが入り、田辺ガチャさんよりメンバー不足のため、大至急来てくれとのことで、また装備を引き出して、現地入りしました。ベースキャンプに入りましたが、丸七日吹雪かれ、やっと回復したのですが、雪崩のため昼間は、寄り付けません深夜 12 時に田辺ガチャさんと出発して小窓谷に 4 時ごろ到着し、搜索するのですが、デブリがひどくゾンメルでも思うようにゆきません、6 時に 1 番目の雪崩が発生し搜索どころではありません、2 重遭難を恐れてほうほうのていで、撤収しました。トランシーバーもない時代でしたので、翌日、私が、一人報告のため下山しました。確か牧野ドングリさんより弁当を用意していないので、蓬沢部落で餅を売っていから、それを買ってくださいと言われて出発しました。シール張りのゾンメルをはいているのですがスキー場と違い山中の一人行動は慣れているとはいえ大変不安です、昼に蓬沢部落に到着しましたが、出発時財布など一切を福永オオブクさんのお父さんが待機しておられる駅前旅館に置いてきたものですから、無一文です。やむを得ず川に降りて水をたらふく飲んで空腹を癒しました。釈泉寺よりのバスにも乗れず、最後まで歩きました、旅館に到着した時にはものをいう元気もなく唯座り込んでしまいました。福永オオブクさんのお父さんは、目ざとく察して、とりあえず“うどん”を 2 人前段取りしてくださいました。私はこれを平上げてやっと声も出るようになり、雪崩で現地調査は全く不可能な旨を報告しました。大まかな位置も確定できず、ゾンデイーデンもできないと説明しました。福永オオブクさんを知る私としては大変残念でした。数年経過しても、結局遺体は発見できず、サブザックだけが見つかり、カメラにのこっていたフィルムの剣岳遠望を、立派なブロンズのレリーフにして、搜索に参加したメンバーが頂戴し、今も時折、懐かしんでいます。初めてのスキーは中 3 の 3 学期です。阿部ベーさんをリーダーに、確か木全ガイさん、部員ではない中村センサー（テニス部で後ゴルフはシングルとなり、西宮カントゥリーの理事キャプテン）他でした。この時も豪雪で島々発のバスも稲核までで、道路はいたるところ底雪崩で寸断です。実に 10 時間を要して鈴蘭小屋に到着しました。あくる日は鳥居峠で阿部ベーさんに初めてのスキーを習いました。翌日、夏道を位ヶ原山荘に向けて出発、シールを張れば初心者でもなんとかついて行けました。何しろ豪雪で鳥居に腰かけて休憩が可能でしたが、山荘は 10 メートルの積雪に埋まり、2 階からの出入りです。甲南ルームの蚕棚は快適でしたが薪ストーブのため最上段は煙害で時折交代していました。天候に恵まれ、肩の小屋から東大のコロナ観測所まで足を延ばしました。悪天候の時は観測所のメンバーでもルートを誤って遭難するとのことでした。卒業式に出席するため中村センサーと二人で下山しましたが、道路事情は変りなく、稲核まで歩きました。宮本ミヤナイさんとは自宅が近く山以外でも趣味のお付き合いがありました。オリンピックで優勝したエリクセン使用と、同じ裏溝無しの、7 尺のスキーをもらい、折損した片方

を修理して現在もリビングに飾っています。又水害で錆付いた、イタリア製の超小型で自転車取り付け用のクレモナと言うバイクモーターも頂戴し、分解して復元したのですが、フライホ



イールのマグネットが弱く、専門工場で電力による強化処置を施しても、点火が弱く、かかりにくかったです。又戦後のモデルで、ジミーという 98cc 3 段変速で当時のダットサン乗用車と同じサイズのタイヤを装着した化け物のようなバイクも譲ってもらい、全面修理して乗り回していました。

阿部ペーさんとはその後もスキーやゴルフで家族ぐるみのお付き合いがありました。ペーさんは兵庫カントリー、私は広野GCでしたが、ゴルフの腕も可成りのもので、すべてのスポーツでかないませんでした。柳沢正リュウさん、鳥居威男トシさんとは平成 17 年、私が毎年ボランティアで訪問していた、ミャンマーのカウヌッシンピーク (3,056m 英名 Mt ヴィクトリア) にトレッキングし、私が設計して現地の業者に建てさせた素晴らしいゲストハウスにも宿泊してもらいました。塩田都造エンタさんとは車の趣味も合い、彼は経済力にもものを言わせて日本では見たことのないスポーツタイプの車、オースチンの A90 とか A70 とかを乗り回していました。3 ヘッドライトの特異な形態で、今でも懐かしいです。

海星病院に見舞った折に行方を聞くと、維持費が大変で、その負担が可能な知り合いに無償で譲ったとのことでした。雨宮宏光アメさんとは、私が経済界、マスコミ関係と親しかった台湾、アメさんの知り合いの多い韓国を訪問したことがありました。小川アヒルさんは理事長として震災直後グラントにいち早く仮設校舎を建設しその実力を発揮されました。鈴蘭小屋か木曽福島での集会の折 J R で居眠りしておられたのを、声をかけて、感謝されました。

初代会長の香月慶太さんは、夙川で大手前女子大の東隣にお住まいでした甲南女子卒のお嬢さんの案内でリタイヤホームに訪問した時にはかなり記憶が曖昧でした。

私も 89 歳です、記憶のみを頼りに纏めました、"亀の甲より年の功"と、言いますが、記憶違いも多いと思います。御容赦ください。殆どの先輩が故人になられています、ご冥福をお祈りいたします。創立 100 周年、改めて"おめでとうございます"



六甲山ゴルフ場 15,16 ホール中間の山荘にて

(左よりミヤナイさん、リュウさん、イヨスケ、オニさん、家内、竹中さん)

北アルプスの生い立ちと上高地の形成

川村静治（新高 S40）

2020 年に NHK のジオ・ジャパン という番組で北アルプスの生い立ちについて取り上げていました。そこでそのもとになった信州大学の原山先生、追川先生の研究成果を調べてみました。

- ◇ 300 万年前には今の槍穂高のあたりは何もなかった。
- ◇ 220 万年前、火山活動により大きなカルデラになった。
- ◇ 160 万年前あたり、東西方向の圧力をうけて、火山岩層とマグマだまり計 10km がクルリと 90 度回転して 1 万メートルくらいの山ができた。爺が岳に縦に 90 度曲げられた地層があるのがその証拠。
- ◇ その後の浸食で 3000 メートル級の山になった。

日本にエベレストを超える山があったかかも知れないという古の山岳ロマンです。少なくとも槍穂高がかつての大カルデラのなごりであるようです。花崗岩は地中深くのマグマに由来するもので地上に出てくるには下から突き上げ、横から屈曲させる大きな力がある事になります。GPS の精密測量で標高が今でも年間 4mm ほど上昇している北アルプスの観測点があり、今でも造山活動が続いているようです。

標高 1 万メートルもあれば浸食に氷河が大きな役割を果たしたはずですが。氷河の削ったカールはいくつありますが、氷河の現存はかつて確認されていませんでした。探索技術の進化で現在では、御前沢、内蔵助、三ノ窓、小窓、池ノ谷、カクネ里、唐松沢の 7 か所に氷河が現存することが確認されています。雪渓と氷河の違いは、下流に向けて移動する大きな氷のかたまりがあるかどうかということだそうです。

先日上高地を訪れた時渋谷さんから上高地の成り立ちの話を初めて伺いました。上高地は V 字型溪谷が多い北アルプスでは特異な平坦な地形です。この形成についても原山先生の研究報告があります。ウェストン碑近くを深さ 300m までボーリングして調べたそうです。

- ◇ もともと梓川は焼岳の南を飛騨側の高原川（神通川の支流）に流れていた（古梓川）。つまり、分水嶺は現在の槍穂高のラインではなく、六白山、霞沢岳、安房山のライ

ンだった。

☆1万2千年前に焼岳火山群の白谷山、アカンダナ山が大噴火して古梓川の流路を塞いでしまった。その結果長さ12 km、幅2 kmの湖となった。これを古上高地湖と呼び深さはおよそ400mになった。

☆古上高地湖は5000年以上にわたって梓川の土砂を堆積した。

☆5000年前、梓川に沿って伸びる境峠断層が地震を引き起こし、古上高地湖は信州側に決壊し大量の砂礫が波田付近まで流れ込んだ。その結果現在の上高地の地形になり、梓川の流路となった。

上高地は江戸時代まできこりが出入りするのみだったが、明治になって夏の間牧場として使われ始めた。明治10年(1877)英国人ウイリアム・ガウランドが槍ヶ岳登頂。Japan Alpsの名称が初めて使われる。これが日本におけるアルピニズムの始まりと思われる。明治24年(1891)あたりから北アルプスでウエストンと上條嘉門次らの活動はじまる。大正4年(1915)焼岳の噴火によって梓川がせき止められて大正池ができた。このあたりで現在の上高地の風景が出来上がった。昭和8年(1933)釜トンネルを通過してバスが運行開始されるまで、徳本峠がメインルートであったことはご存じのとおりです。



●小川守正さん（元甲南学園理事長）との出会い

現役のころ田辺潤君と夕方、小川さんの自宅にお邪魔して山の話をや遅くまで聞かせて頂きました。卒業後、5月の連休に一人で、小淵沢から赤岳に登りました。山小屋で朝起きるとシラフザックの足もとに雪が積もっていました。午後に下山して途中の山小屋に一泊した時、小屋の主人が暫くぶりに家に帰りたいので留守番をしてくれと頼まれました。小屋に泊まる客からは料金を取らなくて良いとのことで引き受けました。その日の午後、小川先輩が小屋の入口で両手をついて頭を深々と下げ、今夜泊めて下さいと挨拶されました。そして奥の私の顔をみて‘鈴木じゃないかい’と吃驚されました。

又日本経営合理化協会主催の勉強会に出席した時（自主責任、部門経営のやり方）の講義があり、講師は小川守正先生でした。見付からないようにしていましたが、途中で“鈴木じゃないかい”と言われ、他の聴講生の手前もあって“俺は喋られへん”とおっしゃいましたが、講義は丁寧に詳しく続けられました。講義は詳しく、大変勉強になりました。

●河崎厚二さん

アメリカのニューヨークに行った時、河崎先輩に連絡すると、アメリカ人は5時に帰るが、日本人は7時まで勤務しているとのこと、河崎先輩は8時前にホテルで逢いました。ハイボールをオーダーしましたが通じなく、ウイスキーソーダーでやっと理解してくれました。

日本人は日本人ばかりで日本食を楽しんでいました。夕方ホテルからスナックに飲みに行こうとすると夜の外出は危ないと言われてたので入口のガードマンにチップを渡し、案内してもらいました。帰りも連絡して迎えに来て頂きました。

近くに植物園がありましたが、そこを通り抜けると身ぐるみ剥がされるとのことで非常に怖い街でした。ホテル近くに卵焼き屋さんがあり、卵4つでお願いしますと、かなり年配の女性が卵6個の卵焼きを食べているので“お前も卵6個以上の卵焼きを注文せよ”と言われました、やはりアメリカ人はよく食べるなーと思いました。

●柳沢正さん

彼が兼松江商のアメリカ在中の時、サンフランシスコで逢い、家までフリーウェイを通り案内して頂きました。森の中にポツン、ポツンと家が建っていました。彼が帰国後一泊の山岳会に出席しましたが、彼は酒が好きで、甲南三島会の席上でもすぐグタグタに酔いつぶれることが多かった。

●小原耕治さん

彼は島津さんと同じく姫路出身で言葉が大阪、神戸よりきつく聞こえ、顔の割に気の優しい人でしたがニックームは鬼で恐れられていました。

●田辺潤君（ガチャー）

ガチャガチャとよく喋る人でしたが、賢くて人に親切でした。彼は JR 千里丘の近くに住み、茨木に住む私と帰りが一緒でした。ある日阪急の OS ミュージックのラインダンスを見に行きました。

●竹中寛君

同級生に竹中寛君が居ました。大阪生野区の出身で高津高校出身。家業はガラス工芸。そこのお盆は貴重なもので、小生も一個頂き大切に残しています。

●前田進君

非常におとなしく、品の良いお坊ちゃんでした。事情があって芦屋浜の叔父さんの大きな屋敷に住んでいました。よく私の兄と奥神鍋や氷ノ山にスキーに通いました。卒業後中津川の実家に帰ったと聞きましたが、音信不明です。



前列左から柳沢、北方、鈴木 後列左から小原、竹中寛 各氏

甲南山岳部100周年に想う

越田和男（大S36理）

昭和100年に当たる本年に、創部100周年を迎え、長らく部員不在で休部状態にあった大学体育会山岳部が新入部員を得て復活できたことは誠に慶賀すべきことであります。

小生は旧制7年制高校ファン、就中旧制甲南高校ファン、就中旧制甲南高校山岳部ファンでした。甲南山岳部100年のうち、旧制甲南高校山岳部は、初期25年間存続して、北アルプスを中心に無雪期、積雪期に幾多の記録を残して、昭和25年に学制改革により消滅しました。私の甲南入学の一年前のことです。昭和26年に甲南大学設立開校、そして大学山岳部の発足まで、若干のブランクはあり、その間、新制高校山岳部が引き継いだ時期もありました。

旧制高校出身の山岳部OBが既に全員が他界された今日、その直後の会員（それも新制OBの長老たちも既に無く）として、今や希少絶滅危惧種扱い一員になっている小生としては、旧制高校時代のことで、これまできちんとした記事にはなっていなかったことを中心に、見聞きしていたことを書き残すべく、誠に僭越ながら筆を執った次第です。

旧制甲南高校の教育の特徴は、その一貫した少人数エリート教育にあり、一学年文科、理科それぞれ35名の70名、7年制7学年合わせて500人という超小規模教育を守り続けました（校歌に五百（いほつ）の健児集いては・・・という一節があります）。その間多くの優れた科学者と経営者を輩出。驚くべきは山岳部員の多さです。全校生500人のうち、多い年にはなんと50人もが在籍したというから、実に、生徒の一割が山岳部員であったという年もあったそうです。

なぜ北アルプスという登山の活躍の場から遠く離れた神戸で、かくも多数の高校山岳部員が相集ったのでしょうか。我が国のロッククライミング発祥の地、藤木九三や水野祥太郎らが第一次RCCを興したのが神戸。そして彼らがトレーニングの場として選んだのが芦屋のロックガーデン。その影響がなんといっても大きかったのでしょうか。ロックガーデンはキャンパスの至近距離内にありました。

旧制甲南高校山岳部メモ

詳しくは、甲南山岳部のホームページで「甲南山岳部の歴史」をクリックのこと

- 1 創部 大正4年（1925年）～ 戦後の学制改革まで25年間活動。
- 2 ロッククライミングと積雪期登山で日本の登山史に残る数々の記録を残す。
（自らの機関誌や関西学生山岳連盟の報告に登攀報告や山域紹介記事を発表）。
- 3 活躍の舞台は主として北アルプスで、穂高 剣 鹿島槍 不帰 杓子・鍵東面のヴァリエーション・ルートの初登攀が多い。
- 4 「甲南ルート」の呼称で今も残るものとして
 - ・前穂高北尾根第4峰甲南ルート
 - ・不帰岳第2峰甲南ルート。

5 7 学年全校生 500 人足らずの内、山岳部員数は一時 50 人を数えた。

ハイカーからトップレベルのクライマーまでの幅の広さがうかがえる。

6 日本のロッククライミングの発祥の地とされる芦屋のロックガーデンがキャンパスの至近距離にあり、部員は週末ごとに足しげく通って練習に励んだ。

7 戦後の国家的事業であったマナスル登山隊に OB の田口二郎（旧制昭和 8 年卒）が参加。

8 学制改革後は、大学山岳部と新制高校山岳部にその伝統が引き継がれた。

9 OB 団体である「甲南山岳会」は昭和 6 年の発足以来現在に至る。

エピソード

1 山岳部の機関誌：昭和 2 年（1927 年）「山岳部報告」を創刊、定価をつけて店頭でも販売され、人気を呼んだ。その後部会報は「部報」「部内雑誌」「時報」「山嶽寮」と名を変え、100 冊を優に超え、現在も継続出版中。

2 白亜城事件：山岳部の主要部員 8 名が、左翼活動の科で治安維持法のもと検挙拘留された（昭和 9 年）。以来、山岳部は左翼の巣窟として戦時中は学校当局からは、新入生に山岳部には近寄るなどのお達しあり。

3 戦時下の山岳部：学校当局より「剛健旅行班」への改名を申し渡されるも、部員達は部室のドアに「Konan Alpine Club」と大書して抵抗し、時の配属将校にも黙認させた。

4 山岳部の部歌：今も歌い継がれる「山の歌」は昭和 4 年当時の高校生（伊藤愿 旧制昭 4 年卒）の作詞。

5 かつての部員の幅の広さを表現した小川守正（元学園理事長 旧制昭 17 年卒）の言い回しが面白い。いわく「右から左まで、ジェントルマンからアウトロウまで。色んな方が居られましたけどね。喧嘩にもならず仲が良かったですね」

兄弟部員

兄弟部員が実に多く、他校山岳部には例をみない。仲の良さのベースだったかも。

- ・田口一郎—二郎—三郎—六郎
- ・伊藤新一—収二—文三—五介
- ・喜多又太郎—豊治
- ・山口省太郎—良夫—雅也
- ・関集三—暢四
- ・国府雄次郎—三郎
- ・福井實—享
- ・塩野良之助—池田（旧姓塩野）喜久夫

新制初期にも二人兄弟の例はあった。

- ・柏秀樹—敏明
- ・伊丹弘忠—徳行
- ・福永隆—健治
- ・竹原佑爾—洋爾

・乾卯太彦一卯兵衛

戦没者

しかし、青春を謳歌されていたその同じ時代に戦禍の暗雲は容赦なくおそいかかり、大戦中に次の8名の会員が戦死されました。

卒業年度	氏名	没年月日	戦没地	資料
・昭6理	楠木義明	1945.7.	インパール	楠木正夫「追悼・楠木義明父子のこと」『山嶽寮』32(1976)
・昭6理	湯川孝夫	1945.8	広島で被爆	伊藤収二「追悼・湯川孝夫氏のこと」『山嶽寮』35(1977) 同じ号に書簡「湯川みつ子様から」
・昭17理	村上正一郎	1942	南支那海	伊藤収二「旧17理・卒村上正一郎氏を偲ぶ追悼集のこと」『山嶽寮』45(1988)
・昭8文	喜多又太郎		支那事变	平成3年乗鞍集会での福島清毅氏挨拶 山嶽寮46(1991) 近況報告 喜多豊治に「兄・又太郎(戦死)との記載」『山嶽寮』47(1992)
・昭8理	多田潤也		赤松二郎	「若き日の思い出」『時報・甲南山岳部創立40周年記念号』(1964)
・昭8文	富士澤浩	1944	北支	「物故会員銘板内見会」での未亡人邦子様の発言及びお便り『山嶽寮』47(1992)
・昭8文	加藤弘三		レイテ島	喜多豊治「回想・穂高山麓最近の旅にて寄せて」『山嶽寮』(1975)
・昭14文	田口六郎	1944.8	西部ニューギニアヌンボル島	田口三郎「伊藤愿・田口六郎のこと」『甲窓』11号・甲南学園創立50周年記念号(1969) 芦屋ロックガーデンの甲南レリーフ

戦後間もなく、物資不足のなか、物故会員の慰霊の記念碑を作る話が、香月慶太氏や福田泰次氏を中心に持ち上がり、「追憶」レリーフが作成され、芦屋ロックガーデンの誠に適切な安住の場所に1952年に設置された。よほど場所選びがよかったのであろう。阪神淡路大震災にも、その後の何度かの豪雨にも持ちこたえて、現在に至っています。

甲南レリーフの今後

周囲の風化の状況からして、毎年の慰霊祭をこの場所でいつまで続けられるのか。現地での補強が可能なのか、キャンパスのどこかに移転が可能なのか、大きな課題ですが、是非議論を始めてもらいたく、自分では最早何もできぬ立場の小生が申し上げるのは、申し訳ないのですが、誠にお願いしたいところです。

横浜にて2025年8月

柏 敏明(大S41経)

甲南山岳部創部100年、おめでとうございます。

早いもので、小生が入部したのが、昭和36年4月だったので、今年で在64年になります。北、南、中央アルプス、知床、利尻、ニセコと国内の山々やスキーを経験、ヒマラヤのヤラピークにも登頂することが出来ました。すべて山岳部、山岳会員と共に経験した登山です。多くの山岳部員、山岳会員の中で、山で遭難されたのは、山岳部の福永隆一様、山岳会の藪内昭博様のお二人です。ここに改めてお二人のご冥福をお祈りする次第です。小生が共に行動した多くの部員、山岳会員の中で、山で遭難した人はいませんが、部員、会員以外では、お二人の方が山で遭難されています。創部100周年の記念号には相応しくない題材かも知れませんが、皆様もご存じの方もいらっしゃると思いますの、ご報告をかねてお二人を偲ばせて頂きます。

山本薫様から、毎年頂く年賀状が今年は届かず、どうされたのかなと思っている矢先に、奥様から、寒中見舞いの形で山本様の不慮の事故の報告が届いたのです。2024年7月24日付の当時のヤフーニュースによると、7月22日大台ヶ原を単独で登山中、牛石ヶ原付近の崖から滑落死されたとの事でした。山本様には本当にお世話になりました。1999年の北岳から始まり、木曽駒、槍、奥穂、二股～仙人の池～阿曾原、蓼科、妙高・・・、スキーでは安比、ニセコ、乗鞍・・・など、竹中統一会員を中心とする山行やスキーの立案、調整、山小屋等の予約等、全てを山本様が手配され、登山中は体力不足の我々を前後してフォロー、下山後はアルバムまで作ってお送りして頂きました。毎年、今年はどこそこの山や、スキーに行きませんかとお声が掛かるのが楽しみでした。山岳会員の中には、一緒に行動された方も沢山いらっしゃると思います。白馬の雪見会にも何回か参加され、豪快な山スキーや華麗なグレンデスキーを披露され、雪見会の御礼を山岳寮61号、62号の掲示板書き込みダイジェストに投稿されていたので、記憶に残っておられる会員も多いことと思います。小生はコロナ以降、体力、気力の低下を感じ、登山やスキーから離れておりますが、山本様は属されていた大阪ポッポ会で、先鋭的な登山やスキーを経験され、単独行やパリエーションルートに相変わらずチャレンジしていると年賀状で報告されていました。

もう一人は、皆さんもよくご存じの、関西学院大学山岳部出身の中島健郎さんです。2007年に森本さん、塩崎さん、浪川さんと、関学山岳部OBの青木さん、小西さん達と、ヒマラヤのヤラピーク(5520m)に登頂出来たのは良かったのですが、ええ年をしているのに、夜中に湿った靴下の交換を怠り、右足の指5本の第2関節から先をすべて失ってしまいました。回復に丸2年余り掛かりましたが、二年目辺りから、靴を履いておけば、歩くのに支障も無くなり、又、ヒマラヤ病が再燃しだしたのでした。丁度、その時、関学山岳部OBの小西さんから、

初登頂したデンジュンリ（6196m）のベースキャンプに、又、行きたいと言ってる後輩がいるけど付き合えんかとの声がかかりました。彼はウェクトレックに入社、我々のこのトレッキングが、初めてのツアーリーダーだったのです。渡りに船とばかりに、デンジュンリのBC訪問とゴーキョピーク（4790m）を目指すことになった次第です、中島健郎さん（25）が、初のガイドとなって、関学OBの田中外治（76）さん、小西啓右さん（67）、甲南OB浪川純吉さん（65）、そして、小生（67）の5名のメンバーでした。ウェクトレックもこの高齢の隊を初めての社員に任せるのを心配したのか、登山者検診ネットワークの京都の専門医の受診を条件にした位でした。

初めてのガイドに中島さんは張りきって、シェルパや、ポーター達を上手くコントロールし、年寄り組の我々には本当に心の籠ったフォローをしてくれたのでした。ゴーキョピークを下山の折、右足が痛くなり、シェルパのペンパが付き添って下山していた時、中島さんは心配して、わざわざ、登りなおして迎えに来てくれたほどでした。初めてのツアーリーダーを務める彼は、老人部隊を本当によく世話をしてくれました。起床後と宿泊地到着時には、彼持参のバルスメーターで全員の血中酸素飽和度を測り、一人一人に体調を聞き、便の状態までも心配してくれていました。また、皆の体調を考えて、計画を柔軟に変えて対応したり、日本食の材料を沢山日本から持参したり、細かい所まで気を使ってくれました。彼にも高度に少し弱い弱点もありましたが、トレーニング不足で体調不良の老人部隊に、最後まで、明るく、笑いの絶えない楽しいトレッキングを味あわせてくれたのです。彼は初めてとは思えない素晴らしいツアーリーダーでした、残念ながら、デンジュンリのBC訪問と無名峰（5566m）の初登頂はかなわなかったですが、元気な浪川さんと中島さんは、チョーオーユーを真近に見えるビューポイントまで足を延ばしていました。レンジョパスを無事に越え、ゴーキョピークの頂上からのエベレスト、ローツエを間近に堪能して、チューレ、ゴーキョトレッキングは無事に終わりました。

カトマンズ空港で次のチベットでのT/Cに向かう、中島ツアーリーダーの見送りを受けて、空路日本へと向かいました。詳しくは、山岳寮 甲南山岳会通信 65号（2010年10月）、又、関西学院大学山岳会トピックス デンジュンリBC&ゴーキョピークトレッキングをご参照ください。関学の資料は、甲南山岳会掲示板のリンク集から、KGAC 関西学院大学山岳会のホームページのトピックス、デンジュンリのBC&ゴーキョピーク（中島健郎）で出てきます。

その後、彼とは山には一緒に行かず、年賀状のみのやり取りとなりました。テレビ番組の世界の果てまでイッテQで、井本アヤコをヨーロッパアルプスや、ヒマラヤ、アンデスに案内をしたり、NHKの十字峡登攀やシスパーレの記録、地球トラベラー グレートトレイルシリーズ等の番組で、楽しませてくれていました。もともと上手だったカメラワークにドローンの技術を加え、ユーモアあふれるコメントが魅力でした。一方では、平出和也氏と組んで、ヒマラヤの難壁に数多く挑戦し、幾つもピオレドール賞を受賞する等、素晴らしい活躍をされていました。ただ、小西さんや浪川さんとは、無理をしないほうがいいのになあとの心配の話をしてい

ました。トレイルシリーズの時などは、何か生き生きしたもの感じていましたが、平出氏と組んだ時は、緊迫感を感じて見ていたものです。厳しい登攀ですので当然ですが、それ以外に何か切迫感みたいなものがあり、余裕というものを感ぜられなかったのは小生だけだったのでしょうか。平出氏とアタックする前に涙を流すシーンは本当に辛かったです。去年の7月のK2西壁での、テレビ、新聞報道にただ茫然とするだけでした。今は数多くの彼のビデオを折に触れて見ては、その番組を通して、彼を思い出し、偲んでいます。

山本薫様、中島健郎様、お二人とは、もう思い出話は出来ません。只、現代故のビデオやVD。又、各大学の山岳部部報等で、共にした山行を振り返ることが出来、彼達の足跡を辿ることが出来るのは、幸せな事だと思います。80歳半ばになろうとするこの年になって、もう、山で死ぬことも無いでしょうし。共に山に登った岳友も、山で死ぬことはないでしょう。ここに末尾ながら、共に山に登って、山で亡くなられた山本薫様と中島健郎様のご冥福をお祈り申し上げます。 合掌



私が入部した時のメンバーは、柏、鈴木、塩崎、横山、八島、浪川、上本、國分、頼富、森岡、佐崎諸先輩方々でした。岸田、森、赤田、石原が入部して、最初の合宿は 5 月連休、笠ヶ岳穴毛谷でした。天候が悪く、雨が多かったが、我々新人は雪上訓練の毎日で、悪天候もあり、結局、稜線には登る機会は無かった。朝食はマルタイラーメン、ニンニク入で、廃墟のような施設跡で上本さんの指導で作っていました。大人数作るので、コテコテの団子状になり、不味いラーメンの印象がのこりました。マルタイラーメンを見ると、上本さんを思い出します。マルタイラーメンも少人数分作ると、コシもあり、美味しいので、今は、インスタントラーメンの中で一番お気に入りです。BC 付近は雨だったが、稜線は真冬並みの猛吹雪になり、遭難で沢山の方が亡くなった一週間でした。

夏合宿は劔二股 BC で各登攀後、室堂から五色、平の渡し、黒部源流を経て高天原、三叉蓮華、槍、北穂、奥穂、西穂、上高地まで五日間の長い縦走でした。当初、二股から撤収し室堂で一泊の予定でテントを張っていたら、警備の方が飛んできて、こんなところにテントを張ってもらったら困ります、とのことで、急遽、五色まで暗い中を歩きました。

この縦走で大キレットも奥穂から西穂までの難関も、怖かった記憶が無いので、当時は平気だったのでしょう。上高地の人の多さには驚きました。バスを長時間待つことが嫌になり、以降、冬以外、上高地に降りることは無かった。

秋は冬の偵察を兼ねて新穂高から入山、槍、横尾を経て涸沢 BC で各登攀。冬は秋と同じ新穂高温泉より入山、槍の肩で穂高パーティと別れて私達は槍沢から上高地へ下山。穂高パーティは滝谷登攀後、涸沢、上高地でした。これが最初の冬の槍で、その後も冬の槍の機会が多く学生時代 2 回、卒業してからカンサンさん浪川さんと登っています。この 1 年は高校山岳部で大山、石鎚山、氷ノ山しか知らなかった山行と、全く別の山登りでした。

翌年 5 月是不歸出会 BC、学生 12 人 OB12 人の合宿でした。今思えば、良く来てくれて感謝、なのですが、当時はなんで我々が倍の装備、食料を持っていかなあかんの、とケンケンガクガクでした。

夏は矢張り、劔で合宿でした。多彩なルート要求すると、夏は劔しかないのかも知れません。秋は涸沢 BC で初めて屏風岩に挑戦しました。下山時、徳本峠越えを歩きました。

冬は南アルプス北沢峠 BC で甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳、アサヨ峰でした。好天に恵まれ早々と行程が終わり、下山。食料が余ったので、浪川、國分、北川、糸園、石原で中央アルプス、木曽駒を越えて木曽側に下りる事にしました。降雪の中、入山。宝剣山荘横にテント設営、翌日下山のつもりが猛吹雪なので沈黙、夜快晴、月明かりで、宝剣も木曽駒も良く見えた。朝になると、またもや猛吹雪で気温も低い。天候を待っても仕方ないので、下りることになった。テント内

張りがバリバリに凍って、畳めない。氷の巻き寿司状のテントをキスリングに縦に入れたので、グラグラ揺れながら上松に向かって下山。5 合目あたりでテントを開いて、雪、氷を除去したら、綺麗に畳めたので、以降快適でした。

翌年 5 月北岳合宿。好天に恵まれ、全尾根登攀。塩崎パーティはバットレスを登攀。沈黙なしの合宿でした。

夏は矢張り剣でした。同じルートの入山は面白くないので、樺平から阿曾原、仙人、二股にしました。黒部水平道は中々味のあるルートでした。合宿前、山本先生から学生を立山に連れていきたいので、サポートして欲しい、の依頼がありました。日程を調整して、森にリーダーをお願いして、室堂で学生と合流。予定の室堂、一ノ越、五色ヶ原、平の渡し、黒四のコースでした。國分さんと私は蔵之助平経由で黒四に行き、ダムのベンチで夜を明かし、学生隊を待ちました。翌日昼ごろ学生隊が黒四に下りてきました。学生は帰神、私達は二股に帰りました。剣が終わり、仙人より下山。阿曾原の露天風呂に入っていると、小屋の方が来て、仙人の直ぐ下辺りで、学生が雪渓に落ちたので行って欲しいと頼まれました。

翌朝 4 時ごろ阿曾原を出発、空身なので、走るように登りました。現地につくと頭部を少し打った程度ようで、大事には至りませんでした。丁度、東京の医師が下山して来たので応急手当してもらい、一緒に阿曾原まで下りました。小屋の方が迷惑をかけたからと、気を使って、関電業務用トロッコに乗れるように手配してくれました。水平道部はトロッコ 20 分位で終点。200m 位エレベータで下りると、樺平でした。今、このトロッコは一般の人も抽選で、樺平から黒四まで乗れるようです。

秋は冬の偵察を兼ねて新穂高から入山、鏡平、三叉蓮華、鷲羽、野口五郎、烏帽子、ブナ立尾根下山。冬、ブナ立尾根から入山、いわゆる裏銀座、烏帽子、野口五郎、三俣蓮華で 4 日沈黙。三俣蓮華から槍ヶ岳は意外と時間がかかり、肩の小屋についた頃は真っ暗でした。槍の穂先登攀後、上高地へ下山。冬の上高地から沢渡までのトレッキングは中々快適です。

3 月、笠ヶ岳山荘 BC、硫黄岳。新穂高出発時、中崎山荘の犬が付いて来ました。わさび平まではまだ良かったのですが、鏡平まで付いてきたので、仕方なく、テントの中で寝かせていました。このまま笠ヶ岳山荘まで連れて行くか、新穂高まで連れて帰るかでしたが、幸いなことに大阪府立大の方が下山で、新穂高まで連れて帰る事をお願いしました。硫黄岳は 6 時出発、休憩なしで歩き、昼過ぎ頂上。帰路、日が暮れて、西鎌尾根手前でビバーク。北川と二人ツエルトにくるまって、寒い中、一晩明かしました。夜が明けて薄暗い中、行動開始。西鎌稜線に出ると強風で立てない。風の息が止まれば歩き、吹けば伏せて待つ、を繰り返し、BC に帰りました。達成感のあった良い思い出です。

翌年、5 月岳沢。夏、剣でした。秋、塩崎さんと前穂東面 D フェイス登攀後、アメさんと新穂

高で合流予定だったので、赤田と奥又白池出発、前穂、吊尾根、奥穂を経て、白出沢を下りました。入山前、白出なんて直ぐや、とガチャさんが言っていましたが、長かった。翌朝、アメさんと合流して、鏡平まで登り、夕焼けの槍、穂高を満喫しました。初めてアメさんとの山行でした。鏡平からの、後日登った常念、蝶からの、槍、穂高の眺望は裏表どちらも、高度があるので、絶景です。下から見上げた、槍、穂高とは別物です。アメさんは早くペタペタ歩く印象でした。

冬合宿は中崎尾根末端から又、槍ヶ岳でした。槍から下山後、松本駅ベンチで寝て翌朝、アメさん、國分さんと合流。北川と4人で爺ヶ岳東尾根から鹿島槍ヶ岳の予定で、降雪の中入山。森林限界手前で、テント設営、翌日の好天を期待しました。夜半も降雪が激しく、何度もテント周りの雪かきをしました。降雪の中出発、ジャンクションから右に登るも、雪風で全く視界なし。爺の頂上付近はなだらかなので、どこが頂上かわからない。少し下り初めたので、アメさんが頂上過ぎたやろ、鹿島槍は無理、とのことで、引き返し、テントも撤収、下山し、鹿島のオババの宿で泊まりました。槍から下山時も雪、爺の入山、下山時も雪、帰神時も雪、名神が雪で閉鎖していて、国道を國分さんが長々と運転してくれました。この悪天候で北アルプス他、遭難が多発し、亡くなられた方もおられました。帰ってきて、アメさん宅で泊めて頂きました。いくら食べても、満腹しないので、次々食べ、家にあった食材を完食してしまいました。年が明け、奥様が帰って来られて、何も無いので、驚かれたそうです。

最後の年2月、杓子岳、双子岩BCでした。入山時はまだ天気は良くて、杓子の頂上まで行きました。翌日から10日間ほど吹雪で全く動けず、卒業もあるので、仕方なく、雪が止むのを見て、伊藤と下山して、松本駅からのチクマに乗るべく、白馬駅（当時は信濃四ツ谷）から電車に乗りました。車窓から北アルプスの峰々をみながら、これが最後か、と思うとたまらない気持ちになって、大町を過ぎた信濃常盤で一人下車、白馬に引き返しました。翌朝、アメさんが来ることを知っていたので、細野で待って、アメさんと合流して、双子岩に向かいました。猿倉台地からは膝上くらいのラッセルでした。途中で早稲田の方二人がご一緒させて下さい、と言われ4人で、まず双子岩、出来れば杓子と歩きました。私は体力もあったので、ラッセルは一人行い、双子岩に着いて上を見上げると、山岳部のパーティが杓子を目指して登っていました。大声をかけ、手を振ると、彼らも手を振ってくれました、早稲田の方と別れて、アメさんと下ることにしました。長走沢向かいの小高い所で休憩中、丁度12:30頃、右稜線の上に白馬大雪渓が見えていて、遠目で雪煙が見えた瞬間、眼の前の長走沢で雪崩が発生。亀裂が入り、ゆっくり動き出し、流れ、猿倉台地が半分埋まりました。雪崩が止まった後、雪煙をかぶりしました。全てのシーンを、特等席から見た感じでした。

こんな雪崩にあったら逃げようが無いと思いました。杓子を見上げると、山岳部のパーティは雪崩により上に居て、早稲田の二人も合流していました。

こちらからは見えないが、杓子沢も落ちたそうです。彼らは夕方気温が下がるまで、そこに留まったと、後で聞きました。呆然として少し時間が経ち、アメさん行きましようか、と声をか

け、歩き始めようとしたら、足が前に出ない。初めての経験でした。自分に右足、左足と声をかける感じで歩き、台地に下りると半分埋まった右側を、必死で歩くというより走りました。ワカンを履いていたので、右足が沈みきらないうちに左足が前に出ていました。猿倉山荘まで来て、アメさんとすごかったなーと話をした時、私が音はしなかった、と言ったら、アメさんが轟音やった、と言ったので、やはり、気が動転していたのだと、痛感しました。猿倉山荘から二股への帰路、ヒザ下くらいのラッセルでした。何も食べてないので、力が入らない。通路横にたれている氷柱をかじりながら歩き、アメさんがチーズを持っている、と言っていたのを思い出し、アメさんと声をかけたら、遙か後ろをトボトボ歩いていたので、仕方なくそのまま二股まで歩きました。二股でチーズの話をしたら猿倉山荘に置いてきた、と言っていました。二股発電所の方に何か食べるものを分けて下さいとお願いしたら。インスタントラーメンを作ってくれ、最高のラーメンでした。お金を受け取ってくれないので、アメさんがラーメン鉢の下にお金を入れて、お礼を言って、細野に向いました。歩いていると、何故か横山さんと出会い、アメさんが横山なにか食べるものないか、と話すところチョコレートを出してくれました。学生最後の山は終わりました。

翌年5月越田さん達と、新穂高で待合せ、槍平で1泊して槍ヶ岳に登り、高校時代山岳部の友人の慰霊を行いました。

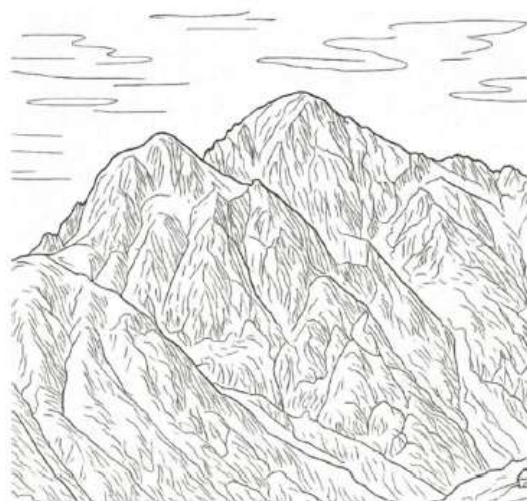
年末、北川、南野と3人で、今年の爺ヶ岳東尾根に入山。昨年と同じあたりにテント設営、今回は快晴で、爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳往復。この時、昨年、アメさんと爺の頂上まで行った事が、確認出来ました。冬の鹿島槍ヶ岳から黒部を挟んだ剣岳の景観は格別です。鹿島槍往復後、その日のうちに、テント撤収、下山して、中房温泉へ向かいました。翌朝、アメさんと待合せ、していましたが、出会わないので、先に出発したのかとも思い、燕に登りました。頂上でも見当たらない。少し待ったが、仕方無く、下りる事にしました。合戦小屋付近でアメさんパーティが上がってきました。鈴木、井上、山本さん達でした。再度燕に登り返し、時間があつたので、大天井往復して下山しました。それから山と無縁になり15年くらい過ぎた秋、アメさん、村上さんから山行のお誘いがありました。折立から入山、太郎平まで歩きました。夕方、小屋前ベンチで、薬師を見ながらビールを呑んでいると、北アルプスに今いることが、無性に嬉しかった。翌日から台風接近で雨。予定を黒部五郎から雲の平に変えて、雨の中、三俣蓮華小屋で1泊して、新穂高に下山しました。以降、アメさんから誘われて、越百山、白山、荒島岳、蝶ヶ岳等登りました。

ある時から、関学立山小屋のインフラに仕事で関わるようになり、小屋開け、小屋終、に立山に行くようになりました。

立山室堂から黒部平のトレッキングは、登り一ノ越までで、あとはゆっくり景色を見ながら1300mの下り。人に出会わない、お気に入りコースになりました。村上さんとも、カンサン、國分夫妻とも、井上さんとも、一人でも何度も歩きました。

スキーは全くしなかったが、誘われて、後日、飯田さん主催の杵池雪見会に参加しました。ゴンドラ、リフトで最上部、杵の森に着いたら、目の前にあの長走沢がはっきり見えました。あの時の強烈な記憶が蘇り、思い出の時間が流れました。

アメさんとは楽しい山登りを、ご一緒させて頂きました。アメさんは旧制の方から、アメさん時代、下級生の方達、私達、山岳部最後時代の方々、全てに大きく関わっていました。こんな人は他に居ません。山岳部の集まりの中で、中核となる大きな存在でした。越田さんと雨宮山荘でアメさんが亡くなったら、山岳会の集まりも無くなるかも知れませんね、と話したこともありました。少なくとも私が知っている方は全て、アメさん子です。今般、山岳部が復活した嬉しいニュースは、アメさんが一番喜んでいるかも知れません。嘗て、松川花火大会で雨宮山荘に泊めてもらった時、買い物に行く車中で、私の人生で、アメさんに出会えたことが、最大の幸運です、と言った事があります。今もその気持は変わりません。生前に、感謝の気持ちを伝えられて、良かったと思っています。渋谷さんから原稿依頼があり、拙い文章を書いていると、当時の思い出、気持ちが蘇ります。短い山岳部の在籍が、それからの時間の中で、如何に大きな存在だったかを、再認識しているところです。



学生時代から社会人となっても「やま」との縁は愚生にとって何にもかえ難いおおきな存在であります。「やま」との最初の出会いは高校の部活でした。初めての北アルプス、針ノ木雪溪から針ノ木岳へ、当時は黒部ダムはなく平の渡しのつり橋で対岸に渡って五色が原、立山、室堂へ抜ける山行であった。その後、サッカー部に移籍、又大学入学前にボート部マネージャーが自宅まで来てボート部に強引に勧誘された。当時は公害問題山積の時代、合宿所は神崎川の護岸にあり川に入ってボートを降ろすわけだが足が真っ黒になるドブ川でいろんなものが浮いていた。腹筋千回、タイヤを引きずってのダッシュなど練習に明け暮れいい思い出はなく「やま」とは全く疎遠になってしまっていた。しかし突然ボート部は廃部になった。助かったと思った半面、気が抜けてこのままでいいのかと自問自答の日々だった。しかし神は見捨てなかった。授業中、たまたま前に座っていた学生が授業そっちのけで熱心に地図に見入っている。その学生が同期の石原であった。つい声をかけ山岳部に入部することになった。「やま」との縁、復活である。遅れを取り戻すべく日々の練習に励み保久良山、神戸大 仏舍利 王子公園などへのランニングでは同期の森静也（列車事故で死去）と競い合ったことを思い出す。

合宿での思い出は数え切れない。北岳 剣 三の窓雪溪 八峰 チンネ 池の平 二股テント 樺平から阿曾原への水平歩道 仙人池では負傷者を救出そのお陰で阿曾原から関電の工事用トロッコで下山したこともあった。

穂高では雪上訓練で転がってピッケルで太腿を突いたことがあった。運よく玉玉??・・・と血管に損傷なく自力で帰阪した。すぐ医者に行くも縫合は出来ずそのまま自然治癒、未だに2cmほどの傷跡を眺めては思っている。唐松岳への長い登り、途中の大黒銅山跡を経て稜線へ、不帰の剣 五竜岳までの往復、白馬岳、雪倉から下山、バスに乗ったら周りの乗客が離れていったほど迷惑な姿だったのだろう。厳冬期の合宿では新穂高から中崎尾根を経て槍ヶ岳 上高地下山がある。ここでは未だもって最高の写真が残りいつも携帯している。

先輩とのご縁はその後の人生と比較して代えがたいものがあります。雨宮田辺三田柏横山村上浪川国分さん達諸先輩は列挙するときりが無い。皆さんとても面倒見がいい。先輩方とのご縁は偉大です。

学生時代の山行に関しては会員諸氏の投稿があふれると推察しますし部活での記憶は定かではありませんので社会人になってから「やま」とのかかわりを話したいと思います。就職先は越井木材工業という木材会社を選びました。

創業当初は電柱（木柱）枕木を生産していた会社でその関係で社有林を所有していました。その社有林の担当責任者になりました。

最近万博木造リングで注目を浴びていますが「木の時代」と言われ久しいものがあります。木材の持つ特長を白書ではこう述べている。

①再生産可能で環境に対する負荷が小さい。

②健康で快適な癒しの空間を提供する。

③意匠性のある空間を提供する。

④特色のある地域の社会造りに貢献する。

日本の国土に占める森林面積の割合は70%にもなります。木材の利用を広げていくことは現在日本の様々な問題解決につながると思っています後期高齢者になっていますが未だ仕事を続けています。

社有林の概要ですが国内に15ヶ所あります。

①前津江山（大分県）67ha②矢部山（福岡県）16ha③日田山（大分県）11ha④耶馬溪山（大分県）34ha

⑤明実山（三重県）43ha⑥丹波山（兵庫県）74ha⑦高野山（和歌山県）8ha⑧太曽根山（和歌山県）61ha

⑨大野山（和歌山県）13ha⑩千早山（大阪府）4ha⑪新太曽根山（和歌山県）10ha⑫大郷山（三重県）250ha

⑬小松原山（三重県）150ha⑭上野田山（大分県）44ha⑮横尾山（大阪府）5ha 合計791ha

樹種はほとんど杉檜です。標高は200mから1000mぐらいまでで山林経営を主体にしている企業に比べると当社は面積もそう多くはない。海外の山林に比較すると日本の山林は相当急峻です。各地で森林組合と提携して補助金を活用しながら間伐、皆伐、植林を繰り返しています。丸太を伐採搬出するためには作業道、路網が必須です。これも大変な労力が必要です。一昔前は架線やヘリコプターも有効な時代がありました。しかし外材が輸入されるようになって現在は材価が低値し合いません。現状道作りが重要なポイントになっています。

初めて社有林に行ったときに大失敗しました。こちらは慣れた山靴で行ったのですが急傾斜の道のないやまで山靴は歯がたたず遅れをとりました。その後は地下足袋に切り替えました。やはり林業では地下足袋はとっても有効でした。

海外の植林にも関わりました。マレーシアのボルネオで植林面積は3000ha（東京都の半分）樹種はアカシアです。国内では伐採まで60年以上かかりますがマレーシアではおよそ半分の30年で成長します。これは冬がないという理由が大きいです。このように学生時代の山歩きが社会人になってから仕事としてこれほど縁があり役立つとは思ってもいなかったです。大変感謝しています。

付記

社会人になってからの山行は富士山には3回行きました。一回目は失敗しました。ツアーで参加したのですがペースが遅いので先に行ったら高山病で8合目でダウンしました。2回目3回目は単独行で完登、一般登山道は混むので登りにブルドーザー路を使い、砂地なので歩きづらでしたがうまくいきました。出張の合間に登った特に大好きな山があります。霧島連峰の「新燃岳」です。火口湖のエメラルド色はいつも魅了させるものでした。残念ながら数年前の噴火

で火口は埋まってしまい二度と見ることはできません。

高千穂峰、韓国岳との縦走もすばらしく、又山麓の新燃温泉は日本一の温泉だと思っています。思いつくままで筆を進めまとまりのない文章になり申しわけありません。最後になりましたが

同期の石原には学生時代とても迷惑をかけたと思います。



剣二股近藤岩



二股テント場 横山さんがいます



猿倉付近



仙人池からハツ峰(木村品川伊藤赤田森糸園)



千丈沢乗越付近



新燃岳



西鎌尾根



仙人池（糸園赤田伊藤森品川石原北川木村）



猿倉付近

甲南山岳部が創立 100 数年を迎えた。といっても私自身が生涯を通して山岳部、山岳会を盛り立てようと尽力し、そのおかげで皆様共々無事百周年を迎えたということでは全くない。むしろ数々のご負担やご迷惑をおかけして、そのつど諸先輩、同輩、後輩諸兄が後始末をお引受けくださり、言葉に尽くせないほどのお世話になってしまったという時の流れが否応なく身に迫ってくるというのが実感である。思えば今から 65 年前の 1960 年、甲南中学入学直後に山岳部に入部し、2025 年現在に至るまで 100 年間のほぼ 3 分の 2 にわたって、山岳部、山岳会に所属させていただいた。私が生徒として、学生として、教員として、さらに退職後も甲南とかかわりを持ち続けた年数に重なり合う。

中学 1 年生で初めて経験した夏山合宿。夜行列車、ケーブル、バスを乗り継ぎ、弥陀ヶ原から雷鳥沢まで重荷を背負いながら徒歩で向かう途中、立ち込めたガスの合間に見え隠れする大日岳斜面の大きな何本もの雪渓。生まれて初めて見る光景に胸が打ち震えるほどの感激を覚えた。この瞬間以後私は山の虜になってしまった。しかし中学 3 年終了時、なぜか山岳部の部員がいなくなってしまう途方に暮れた。高校 1 年時、新しい仲間が加わり私がリーダーとなり、何とか夏山、烏帽子～三俣蓮華縦走合宿を終えた後、部再建のノウハウを教えてもらおうと大学山岳部に依頼した。故森本さんや武田さんが足繁く、高校まで通い詰めてくださった。岩登りの訓練にも連れて行っていただき、大学生の指導を受けた。その時大学部員にのみ配られた一人一個のビスケットを、柏さんや塩崎さんが半分に割って、我々中高生にくださった。山仲間とはこんな感じなのかと思いとても嬉しかった。その後夏の縦走合宿、春の五竜遠見尾根、白馬岳をこなした。高三時の夏山合宿、後立山縦走には大学から鈴木さんが付き添ってくださった。下級生の部員も増え、部活動は波に乗った。この頃山行を共にした同級生の大村、佐野、下級生の坂田、滝原、山本（千）、上田、多田、福田、藤原諸兄とは卒業後 50 数年にわたって欠かすことなく毎年正月、我が家でいまだに酒盛りを繰り返している。

大学入学前、浪川リーダー率いる大学の春山合宿に参加し奥大日岳頂上に登らせていただいた。大学部員としての意気洋洋とした出発点だった。しかし秋山合宿のあと、何度も繰り返す合宿形式の山行に疑問が生じてしまった。その頃、故田辺さんや柏さん、八島さんが私の青臭い話を親身になって聞いて下さり暖かいアドバイスをくださった。「いつでも帰ってこい。好きなようにやれ。」ということだったと思う。一時的に山岳部の第一線から離れて、この頃夢中になっていた演劇や音楽活動に勤しんだ。その間、単独で夏の北アルプス、中央アルプス連続縦走に続いて冬の西穂高、富士山頂をめざした。無事登頂に成功したものの当時の山岳部諸兄には全く内緒だった。若気の至り、著しい自己過信であったのだろう。

やがて大学院を修了し、母校の世界史担当の教員となり、高校山岳部の顧問となった。指導する立場に立った私は現役の頃と同じスタイルでの合宿を繰り返していた。高校 OB や当時の大

学山岳部員も積極的に協力してくれた。春夏の合宿には付き添ってくれて責任上どうしても安全登山を優先しなければならない私を強力に支えてくれた。ところが生徒の中には私に内緒で単独で春の杓子尾根に登ったり、2名で冬の八ヶ岳全山縦走に成功し事後報告する生徒迄現れた。私は自分がそうであったので一切叱ることは出来なかった。顧問となって送り出した卒業生には印象深い人物もいた。石塚直也君は夏山合宿の出発時、個装、団装が詰め込まれた彼のキスリングを大阪駅に積み残し、10日間着の身着のまま合宿をこなしたり、高校の授業をさぼって大学の合宿に参加したりした豪傑であった。今どうしているのだろうか。また彼の一年下の山本恵昭君も逸材であった。ご承知の通り彼は現在の甲南山岳会のエース的存在である。教職について2年目の夏休み、45日間のヨーロッパ個人旅行に出発した。授業で教える世界の現場に立たなければ生きて授業は出来ないと考えてのことだった。積み上げた登山の経験が支えとなったのか、旅の苦勞が喜びとなり、翌年には中東、インドを、3年目にはアフリカ、さらにアメリカ、東南アジアへと拡がってしまった。当時丁寧に山嶽寮を編集されていた越田さんが私の拙い原稿を何度も好意的に掲載してくださった。ご承知のように旧制高校以来の甲南山岳部の歴史を日本山岳界の歴史と重ね合わせて詳細に把握されておられるのはこの方において他にはいないであろう。

しばらくして、山岳会の集まりに参加したところ、いきなりヒマラヤ登山の隊長に推薦されてしまった。参加可能なメンバーのなかで最年長であったことと度重なる海外経験を買われてのことだったと思う。しかし残念ながら登頂には至らず、山岳会諸兄の多大なご期待に沿うことはできなかった。その2年後、参加メンバーの一人、渋谷一正君を隊長とする二次隊が、一回目の失敗の反省と悔しさをバネに無事登頂に成功した。その時私はアフリカ調査旅行の無理がたたたり、長期の入院生活を余儀なくされていた。渋谷君は帰国直後、現像したばかりの写真を持ってお見舞いに駆けつけてくれた。なかなか退院の見通しが見つからない中で苛立ちが込み上げ、眠れない夜が続いていたがその日は病室でぐっすり眠れたことをよく覚えている。

一次隊の登山終了後、山麓に広がる当時は秘境であったザンスカール地域の調査と踏査を行った。手探りで行った民族学的調査の後、登山隊員の一人、強い意志力と桁外れの体力とを持ち合わせた松本好博君と5000mを超える峠がいくつも連なった日本人未踏のルート(約200km)を10日間かけて歩き通した。この経験が以後の私の人生を方向づけることになった。

調査のフィールドはアフリカ、サハラ砂漠へと移動していった、1986年には学校から一年間の留学の機会をいただき、パリ大学のアフリカ研究センターでしばらく研究の日々を過ごした。

2か月余り過ぎた頃、学校には内緒でパリから抜け出し、残りの9か月、サハラ各地の調査と放浪に明け暮れた。帰国後、数年かけて学術論文を何本か発表すると、或る地方の国立大学からオファーが来た。しかし折悪しく阪神大震災に遭遇し、全壊した学校を見捨てるわけにもいかず甲南高校に残ることを決めた。大学の教職に就くことをあきらめた代わりに思いついたのは当時すでに訪れた海外の国の数が150カ国を越えていたので、190を超える世界全独立国を全て回ってみようということだった。以前に神戸のモスクに通いつめ、イスラーム教徒の資格も取っていたので念願のメッカ巡礼も行うことも出来た。

2003 年、アフリカの最西端カーボベルデを訪れ当時の世界全独立国 192 か国周遊を果たし終えた。公私ともにお世話になっていた故雨宮さんが知り合いの出版社に話をつけて下さり、翌年には拙著の出版にもこぎつけることが出来た。雨宮さんの山関係蔵書は現在甲南高校社会科学研究室に雨宮文庫として保管されている。私はその後も登山と冒険を絡めた海外旅行を続け、訪れた国と地域は 220 を超えるまでになった。

自由奔放、縦横無尽に好き勝手させていただいた私の拙い人生は甲南山岳部、山岳会の先輩、同輩、後輩諸兄の皆様の暖かい支えがなければ全く成り立っていなかったことだろう。



1960 年（昭和 35 年）夏 剣岳
長次郎谷の雪渓をグリセードで
下る当時 12 歳の南里

甲南大学山岳部創立 100 周年を迎えて

村田信一（大 S5 0 経）

山仲間と山紀行

創立 50 周年記念 当時の恩恵を最大に受けたメンバーの一員として寄稿した次第です。現役の記録写真は大半が井上先輩から戴いたものです。お世話になりました。

2 回生の夏にカナディアンロッキー山脈を現役 5 名で幾つか登りました。

これを機に登山に対する思いが変わりました。氷河の不思議さやファミリーでコテージに宿泊してハイキング、カヌーを操り、星を眺めながら仲間と合唱する楽しみなど・・・社会人となっても 2 つの会社で山岳部員に加わり、ボーイスカウト活動でも渡米する機会に恵まれました。それぞれの仲間と共に山の楽しみ方の普及に努めて喜ばれました。同期の早川夫妻とは親しく、カナダ オンタリオ州とスイスに行った記録を載せています。残念ながら同期メンバーはすでに 4 人が故人となってしまう蓬莱峡の集合写真が懐かしいです

71年度 蓬莱峡岩登りトレーニング



71年度 10月11月荷揚げ 徳本峠付近

徳沢付近にて



11月12日徳本峠
に向かう



明神岳を後方に同期メンバー



徳本峠にて



71年度前穂高冬季合宿

C1 付近で1回生全員



入山日



奥又白 BC



71年度 前穂高 北壁



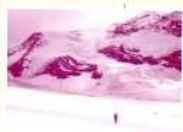
10月14日 前穂高岳 ピーク
右岩稜 A face 井上さん・早川君
北壁 A face 松本さん・朝倉君・村田



72年度 冬季合宿 イブリ山～白馬岳



73年度 カナディアンロッキー登山 MtRobeson 7月14日～30日



8月15日Mt.Assinibine OB参加と共に登頂11870ft



72年度春山合宿 日高山脈



カムイ岳B.Cまでポツカ

B.Cよりエサオマントツタベツ岳



カムイ岳北東尾根 1600m地点 B.C設営 73年3月9日

大阪駅の見送り風景



73年度 春山合宿 十勝岳縦走

1974年3月8日十勝岳・美瑛岳のコル



3月13日コヌマアリ山C4で沈殿5日間を過ごす



3月8日美瑛岳と縦走隊

山の仲間 同期と大阪城梅園2007

白山のオコジョ



個人山行 1995 中1の次男坊と常念岳

白山黒百合



山の仲間 同期と大阪城梅園2007

白山のオコジョ



個人山行 1995 中1の次男坊と常念岳

白山黒百合



個人山行 2019 Matterhorn



アイガートレイル



個人山行2019 シャモニー Mont Blanc 早川夫妻と



この度山岳部に数十年振りに部員が入ってきた。廃部も囁かれていた山岳会の OB 諸氏もおそらく小躍りして喜んだに違いない。私もそのうちの一人である。そんな私は卒業迄の部活動を全うできず在部は二年間のみであった。その後も部のことが忘れられず部室に出入りし時には部員と共に山行していた。そんなこともあってか、山岳会に入会を希望したところ同学年全員の同意が得られ入会が許された。けれども慰霊登山や総会には予定が合わずほとんど参加できていない。しかしそんな中でも顔を出すと旧知のメンバーが温かく迎えてくれる。山への思いも断ちがたく、コロナ前には甲南大学スキー部の監督をしている友人と二人で表銀座に向かい、鳥の声と自分の靴音しか聞こえない稜線歩きを楽しんだり、斜面一面に咲く駒草に驚いたりした。更には小雨の中三人で白馬岳から蓮華温泉へ向った山行では雨と温暖化のせいか白馬の雪渓が溶けており非常に苦労しながら歩いたものである。

現役時代の登山や部での思い出は既に五十年前のことになるが今でも断片的ながら覚えている。しかしその断片の前後関係もあやふやでありそれぞれの思い出がなかなか繋がらない。頭の中に出てくる映像も実際に経験したものと別ものになっているに違いない。肩に食い込むキスリングを揺すり上げながら前に遅れないよう必死に歩いた日のこと。タバコの煙が充満するテントの中で背を丸めて沈殿した日々。雪の斜面でのピッケルワークでは中々満足のいく動作ができなかったこと。営林署員の依頼を受けてスノーボードで運んだオロク。早朝ベースキャンプを出、アタックを終えて帰る頃には雪崩で埋まった谷を乗り越えて進んだこと。ザイルを巻き上げながら狭いテラスで先輩の到着を待つ時間。三ノ窓の雪渓をグリセードで下った時の壮快感。励まし励まされながら辿った山のルート。山の峰々と紺碧の空とのコントラストの素晴らしさ。ベースキャンプ撤収前夜、皆でがなった山の唄。這松の上をブッシュこぎをしながら進んだ時の松の香り。蓬莱峽での関西学連の夜。草つきのトラバース。稜線上に張ったテントで受けた台風。保塁岩のオーバーハングでスリップをした瞬間。酔って三宮の横断歩道を小便をしながら渡った今は亡き先輩の姿。山岳部を辞めてからの学費闘争への参加。ザイルで結ばれた信頼感。岩壁に向かう挑戦心と逸る心。何でしんどい目をして山に登らねばならないかという永遠の問い。様々な思いや場面が頭の中でアトランダムに交錯する。皆今となっては美しい思い出である。

怒りや悲しみ、歓びや驚き、苦しみや虚しさ、そして克己心や憧れ等様々な感情は時間と共に忘れ去られる。しかし山と対峙することによってこれらの感情を味わい心を研ぎ澄まし感じ取る時間を過ごせるのは幸せなことではないだろうか。頭の中に少しばかり残ったこれらの感情は知らず知らずのうちに血や肉となって身についているはずだ。

今や山の道具も日進月歩で改良され、登山の技術も進み、最近では GPS や携帯電話などの機器を持ち込んで登山する人も増えている。我々の時でさえ以前には無かった色々のアイテムが

存在した。例えばエーデルリットのザイルやジュラルミン製のアブミやカラピナ、その他多くの軽量でコンパクトで快適さと安全性を取り入れた山の道具を利用していた。今の便利な品々も電気製品に限って言えば電池が切れれば只の物でしかなくなる。新入部員の諸君には新しいアイテムをうまく利用しつつ、いざという時には五感六感を最大限に活かせるように普段から鍛えながら山に向って貰いたい。山の素晴らしさ厳しさをその身で感じながら二度とない青春を謳歌して欲しい。邪魔くさいという観念を払いのけ今しなければならないことを先ず行い、広い視野と知識とを身につければ事放も無く過ごせるはすである。今流行りの「アップデート」を意識しながら山に向えば素晴らしい青春を送ることができるのではないか。

君達よりも半世紀も年を食った初老の爺さんのボヤキとも説教ともつかぬ話ではあるが、少しでもはなむけの言葉として感じ取って貰えれば幸いである。願わくば軽登山をする際にでも声掛けして貰えれば更に嬉しい。微力ながら OB として応援できればとも思っている。



燕岳より

祝甲南山岳部 100 周年

松本好博（大 S52 法）

偉大なる先輩・同輩・後輩の皆様と共に越えし幾山河。私の山岳部の歩みを振り返りますと多くの山仲間のお力を借りて辿った道のりでした。最初に 1 年上の山本ゲタさん、井上トモさん、森キンさんの 3 人の先輩が思い浮かびます。①海外登山隊に参加する。②世界の辺境の地でバックパッカートレッキングにトライする。入部の時に目標に決めました。3 人の先輩からは合宿・個人山行・アイゼンワーク・ボッカ訓練などを通して多人のご指導を賜り 2 つの目標達成へと導いてくださいました。

次に私の山の恩人ナンバーワン・山のスーパースターは同期の平井幹男前山岳会会長でした。彼は中学・高校と山岳部に在籍していて山の素人の私にとりましては見本・お手本・目標でした。2 回生になった春に平井がネパールへソロで行きました。グレートヒマラヤを自分の目で見たいと強く思うきっかけとなりました。山のことを何でもかんでも知っている彼をどんな時も、いつも、何があっても信用・信頼していました。平井は純情な山ヤ・スペシャル山男でした。

“部活”“先輩・後輩”という一見時代遅れ・古めかしいと聞こえるかも知れませんが、部が持つスピリッツ・技術・技量・歴史・文化などの伝承と部の活動レベルアップを図る日本独特な体制のようで海外ではあまり見聞きできないようです。

日の光・月の光・モルゲンロート・満天の星・オーロラ・北の大地の山々、そしてすさまじい風雪。山と自然には夢と希望が満ち溢れていました。皆様と刻んだ足跡が歴史の 1 ページを作りました。朗らかな山の仲間に恵まれた山の歩みでした。

地球誕生は 46 億年前。ヒマラヤ造山運動は約 4500 万年前。人類の祖先の猿人さんは 700 万年から 600 万年前に西アフリカのサバンナから果てしない旅に出ました。好奇心旺盛な猿人が持っていた未知への憧れがチョモランマ初登頂（1953 年又は 1924 年・正解は謎）アイザー北壁初登攀（1938 年）などアルピニズム・パイオニアワークへと進んでいったのではないのでしょうか。大昔、アフリカ大陸から 2 本の足でテクテクと旅だった猿人と 600 万年の時を経た猛暑の夏に少しウンザリしながら生息している私とは、なんの変わり映えもたい猿人仲間のようにです。

名門オール甲南山岳部の火がこれからも受け継がれていきますことを心から祈念いたしまして山嶽寮 100 周年記念号の寄稿とさせていただきます。

ベルグハイル！

2025 年 8 月



100周年に寄せて

松成 健（大H8文）

100周年おめでとうございます。

最近仕事でも振り返りの重要性を痛感しており、今回私が何故山岳部に入ったか及び、当時の私目線での山岳部の雰囲気について、2点に絞って振り返って書いてみようと思う。

私が甲南大学に入学したのは、1992年で高校時代は1年だけテニス部でその後は帰宅部で山とは全く無関係の高校生活だった。山の中のゴリゴリの男子校出身だったので、反動で女性の多そうな文学部を目指し、派手そうなイメージの大学に入学したからには、練習よりもイベントに熱心なテニスサークルに入ってやろうと息巻いていたにも関わらず、どこにテニサーの店があるのかも分からずオシャレそうなサークルの誰からも声を掛けて貰えず、声を掛けてきたのは新興宗教の勧誘のお姉さんと、男臭そうなクラブのお兄さんばかりであった。そんな中、ホステリングクラブのお姉さんが声を掛けて来て部室に行ってみると、物凄く歓迎され何をしているクラブが全く分からず、時間が経過するうちに、どうもアウトドアをするクラブというのが分かり、アウトドアって面白そうかも、他にアウトドアのクラブがどのようなクラブがあるんだろうと調べてみるとワンダーフォーゲルや探検部等がある事を知った（この時点では申し訳ないが山岳部は範疇外だった）。そして探検部かワンゲルの店で話を聞いていると3年生の阿部さんがやって来て、なぜか西宮北口に当時あった流転屋という怪しげなエスニック居酒屋に連れていかれて4年生の吉川さんも合流されて山岳部の魅力について熱く語って頂いたのを記憶している。それでもまだ迷っていて、それならと蓬莱峡に連れて行かれ体験ロッククライミングをしてみて、これって面白いかもという思いと、阿部さんが山岳部はモテるという今から考えると全くエビデンスの薄い言葉が入部のきっかけであった。当時の山岳部は比較的自由に自主練という形をとっており、私はいつも渦森台やその辺りを走ってばかりいた。また時間があると六甲山の山頂までのランニングコースも開拓していた。

当時の部室は入口に懸垂棒が吊り下がっており、懸垂してから部室に入るようになっていた。比較的自由的な雰囲気です。ワンゲルや探検部、スキー部の先輩が出入りしていてびっくり箱のような雰囲気だった。しょっちゅう陸上部が部室の前にマットを敷いて寝転んでいたのが鬱陶しかったが、それ以外は居心地の良い部室で、途中から冷蔵庫を持ち込んで電気を蛍光灯から引いて、住める部室と化していた。

入部したての当時のメンバーは私が今まで接した事の無いユニークな方ばかりであった。私目線からのメンバーの方々を書いていきたい。かなり偏見の入った文言ですが、ご容赦頂けれ

ばと存じます。

4年生：吉川さん、体力の塊。ランニングしていて記憶を失ったとか、甲南から新大阪まで走ったとか想像を超えた事をよく聞いた。今でも連絡すると飲み連れて行って下さる先輩。木下さん、残念ながら数回しか会った事がない。山岳部の事を話して証券会社の入社試験をパスしたと聞いた。2年生の時にご実家のある名古屋の結婚式に参加させて頂いた。

3年生：阿部さん、当時の主将。阿部さんの結婚式でもメッセージカードにかなり迷惑を掛けられたと書かれていたが、実際はかなり迷惑を掛けたと思う。酒にまつわる迷惑が多く、吞んで記憶を無くして起きたら、吉川さんのご自宅に運ばれたとか、AVKKの会合で吞んで酔って錆び付いたナイフを振りかざしたとか、酒関係の迷惑は他にもあって、他の部だったら退部させられていたかもしれない。山でも1年の春合宿で酷い靴擦れになり歩くごとに激痛が走り、前の人が見えなくなると一番後ろにいた阿部さんに1人でゆっくり行くから置いていって欲しいと懇願したりして困らせた記憶がある。

阿部さんもアフリカ、ヒマラヤから帰ってかなり変わった。いつの間にか喫煙していたし、甲南バットレスからタバコやジュースの缶を投げ捨てているので注意すると、タバコは2年以内、鉄は14年で土に返るから大丈夫とか信じられないと事を言ったり、遅刻すると時計があるから悪い、時計がなければお前もそんな事は言わないと言い出したり、遠征以前も妖怪〇〇の作業だとか言っていたが、それまで以上に訳の分からない主張を仰っていた記憶がある。阿部さんと元ワングルOBの川崎さんを通じてフリークライミングの面白さ、奥深さを経験させて頂いた。阿部さんとは卒業後も何回か会った。ご自宅にクライミングボードを張り付けていて生涯の趣味を見つける事が出来た感じがして羨ましかった。

藤井さん：この人も体力が有ってランニングで追いつくのが必死だった。時間にルーズな山岳部において、待ち合わせ時間に正確で比較的常識人だったように思う。明るい方で留学生からもジャパニーズコメディアンと言われており沈殿の日でも藤井さんのお蔭で明るく過ごせた。

鷹取さん：廚二病がそのまま続いていた人。色んな作家に感化されてその時期その時期で、感化された事を押し付けて来た。でも口下手だから沈殿の時は恰好の的になっていた。私が2年生の時の主将であったが、日本人ならスプーンは匙、フォークは三又、ナイフは刀と呼ぼう、テントは天幕、コッヘルは鍋と呼べと強制されたが、誰も従っていなかった。そんな鷹取さんが何故レストランのサイゼリヤに就職したのか未だに分からない。今では出世されているらしい。

森山さん：一度だけランニングをご一緒させて頂いた事がある。走りながらランニングの方法を教えて頂いたり、コースを教えて頂いたり参考になったがすぐに退部されてしまった。

竹内さん：同期。部室で先輩方と喋っているといきなりやって来て、山岳部に入りたいんですけどやって来て、みんなびっくりさせた。そして次の日から練習していた。動作の思い切りが良く甲南バットレスの小ハングもすぐ登れていたように記憶している。理学部なのに言動に

全く理屈っぽさがなく感情先行にも思え、何故か一緒に文学部の授業にも出ていたり陶芸研究会の幽霊部員もしていたりしていたが、まさか彼が東大理学部大学院に行くとは思わなかった。彼とは3年生の夏の縦走で確か双六小屋で喧嘩した記憶がある。16時か17時頃に双六小屋に到着して、明るいし少し休んで槍ヶ岳山荘まで行って皆で乾杯しようという竹内さんとメンバーが体力的に疲れてて危ないから明日にしようという私と柳瀬さんで口論になった。結局竹内さんが折れる形となったが、同期が複数いると頼りになる反面、難しいなあと思い知らされた。卒業後もたまに会う。結婚したての頃に新居にすきやき肉を持って来てくれたり、山形に仕事があるからと仙台在住の際に一緒に呑んだりとなんだかんだで関係が続いている。

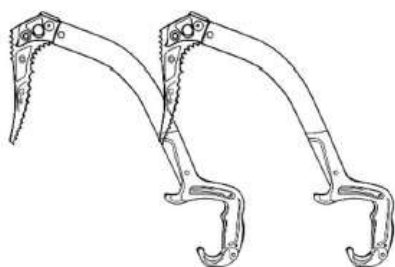
柳瀬さん：同期。1年夏合宿が終わって入部してきた。竹内さんと同じ理学部で授業も真面目に出席しておりノートを貸してくれと良く言われるとっており、その辺りは試験前にノートを持っている人との連絡で忙しい私と正反対であった。竹内さんと正反対で理屈っぽい感じであり、ザ理系という容貌であった。合理的と書くべきか迷うが、3年の夏の合宿はシュラフは重いから要らないとのことでシュラフカバーだけ持ってきたが、寒くて寝れないとぼやいていた。以前釣り部に所属しており、沢登りをしたいからと山岳部に入部してきたが、岩も上手くすぐに抜かされた。実家が天津で終電が早くあまり一緒に飲んだ事はなかったが酒は弱かったと思う。海外に遠征に行ったりと卒業後もアクティブに活動しているのは同期では彼だけだった。

既に卒業されていた、西浜さん、中西さん、私より下の学年の方々とのエピソードも沢山あるが、紙面の関係上、ここで終わらせようと思う。

人生で僅か4年間の短い山岳部だったが、いまだに当時の事を思い出す。

恐らく苦しかった事、成し遂げて嬉しかった事の度合いが桁違いだったからだろうと思う。1年3月に酷い靴擦れになってメンバーの皆さんに迷惑を掛けた事も、5月の合宿で竹内さんと穂高の甲南ルートをノンザイルで最後まで行ってしまっただけでOBから怒られた事も、雪彦山で1ピッチ目のリードで滑落してビレーしていた鷹取さんに止めて頂いてグランドフォールせずに、地上2~3メートルで止まって肝を冷やした事、3年に西浜さんとヒマラヤに挑戦した事も今となっては良い思い出である。

今は北海道に在住しており、ヒグマが怖くてメジャーな山しか行けていないが、いつの日かまた夏の北アルプスの涼しい稜線を歩いたり、アックスを使って冬の八ヶ岳の氷壁を登ったりしてみたい。



・昭和46年、バットレスにて新入生歓迎コンパ

酔っぱらってしまったヒナコと私はシュラフごと空きテントに隔離。ヒナ子「ファイト！」私「あと2ピッチ！」と掛け合いの煩わしさよ

・「お前ら、なにモタモタ切っとるんやー」井上氏の罵声。突如のババーンと見事な包丁さばきに皆、目が点に！

・森氏に徳沢に初めて連れて行っていただいた。大阪駅に見送りに来られたヒナコ家族に皆ビックリ！母上、ヒナコ、妹二人、みーんな同じ顔！

・「大学山岳部冬山を目指して」のテレビ取材を受ける。

その後、喫茶ウィーンにて皆固唾をのみ、TV画面に観いる。「え？これだけ？」

<喫茶ウィーンとは>大学近くの市場内にあり、若い（あの頃は）おぼちゃんと二人の娘さんがアイドル。山岳部、写真部、理学部のたまり場だった。

・昭和47年、憧れの尾瀬に向かうが、大鍋をキスリングにぶら下げ、ひたすら木道を歩く乙女達であった。（井上氏、松本氏、ヒナコ、ポチ、Q、ゴン）

・ロックガーデンにてクライミング練習。「ゴンさんがんばれー」傍らで登っている渋谷君に励まされ、やっとやっと登りきった。しかし、途中のスタンスは彼の手？肩？であったそうなの…

・剣沢合宿、一升瓶と大玉スイカ現れる。赤田氏のご持参？横山氏？伊藤氏？いや浪川氏？

・資金稼ぎに阪神百貨店3階喫茶（横山氏経営）でホールスタッフのバイト。

お客さんから「そこの姉ちゃん」と生まれて初めての呼びかけにびっくり。以来「姉ちゃん」が板につきました。

・昭和48年、折立入山、雨の黒部五郎岳、三俣経由、伊藤新道（山嶽寮に記載）下山。イモコは雨の中「帰りたい」と言い続け、私は吊り橋を前に足がすくみ動けずに涙がでる始末…山本さんやポチ、ご苦労かけました。

その他

・体育祭、山行準備中に部室前で繰り広げられる華やかな競技の数々。我が山岳部も奮い立ち急遽スウェーデンリレー（平井、松本、大野、柴田）に参加。このメンバーは過去の陸上記録保持者の集まりである。見事予選1位通過！決勝戦は、そこらへんにいた部員が代理出場。結果は言わずもがな…

・生田神社御輿担ぎ参加、法被姿も凛々しく練り歩く男子達。振る舞われる上等な酒やおにぎりに、ただただ感謝。村上さんお世話になりました。

・花の文化祭、こちらも資金稼ぎ。村上氏のご支援のもと、ポスターやカセットテープ、クリスマスツリーなどを兎に角売りまくりました。

・次年、バイトの立ち食いそば屋で鍛えた腕をふるい松本氏がうどん屋の店長に。売れるわ！
売れる！忙しや... 美味しかった！

味のある思い出深い4年間でした！

暖かく見守ってくださった皆様、ありがとうございました。



妻たちのつぶやき

「皆様、夫が大変お世話になりありがとうございました！」

・山へ出かける時、若い頃は「いってらっしゃい〜〜♪るんるん（ホッ!）」でしたが、近頃は「どうか怪我なく... 祈」そして戻ってきた時「無事でなにより（ホッ!）」です

・心配で山から帰って来るとほっとする毎日でした。そして娘も山やと結婚しました。

・大学の時登ったカナディアンロッキーに村田夫妻と共に連れていってもらった〜感激！

超こわがりの私を色々な山に案内してくれました〜感謝！

・お世話しましたワ！（松下てっちゃんだけはお世話にもなったわあ〜）

へべれけ吞んで私の出産当日の朝まで我が家で寝ていた輩もいた！

お世話させてもらった分、やぶ（藪内君）が夫を見つめる眼も住友けんちゃんのこととも忘れられない思い出...いっぱい残っているー。

「部室前の長椅子」

鷹巣久美子（大 51 文）

半世紀以上前になってしまった山岳部での思い出と言われて最近心に浮かぶのは、部室の前の長椅子に座ってサウナスーツの代わりにゴミ袋を着て汗を流すアメリカンフットボール部や釣り竿に付いた重りを遠くに投げる練習を繰り返している釣りの部（？）の人達を眺めていた怠惰だけど幸せな時間です。

小さな出来事が起きつつも昨日と同じ明日がずーっと続く事を何も疑って居ませんでした。その後「阪神・淡路大震災」の時は被災後早い時期に自宅のある横浜から岡本に行き道を挟んだ左右で街の様子が全く違うのに驚き、「東日本大震災」では働いていた内幸町の会社から帰宅出来ずにテレビで津波の映像をリアルタイムで観て会社で一晩を過ごし「コロナ禍」の時には日本に入国出来なくなる前日に暮らしていたアメリカから一時帰国のつもりで帰国入国してそのままアメリカには帰らなくなった等の経験しました。

今日と同じ世界が明日も続くとは限らないという事を大人？老人？になってからやっと実感したのに、早くに知ってしまった子供達が沢山いるという事実に思い至り胸が痛くなりました。そんな時代に子供時代を過ごして来た若い人が一度は途切れて、またコロナ禍では考えられなかった狭い空間で寝食を共にするテント生活をしながら行動をする山岳部を復活させて下さった事でもしかしたらもう一度コロナ以前の世界に戻れるのかしらと嬉しい夢を持たせて頂いています。

山の事を殆ど知らないダメ部員で心身共に 70 代のお年頃でダメ OG なのに今も山に行きたい、もう一度テントで眠りたいと思っています。



人生の再起動ボタンは「山」だった！

～山岳部での短く濃い体験が、人生の後半をこんなにも楽しくしてくれるなんて！

大柳香代子（大 S51 法）

結婚して東京へ。気がつけば、山とはすっかりご無沙汰になっていた。でも都会の喧騒と育児の嵐のなかで、私の心と身体はどうやら干からびかけていたようだ。

そんなある日。「幼稚園の代休って、宝じゃない？」とひらめいた私は、背中に下の子を背負い、上の子の手をひき、肩から荷物をぶら下げて、電車を何度も乗り換えながら高尾山へ向かっていた！スマイルが咲き誇る春の高尾山で、山の精気に全身が潤う。

だから、厭わずに何度も高尾山へ出かけた。

あれはきっと、知らず知らずのうちにエネルギーチャージに行っていたんだ！

…よくやっていたなあ、私。ちょっと自分に拍手したい。

子どもが小さい頃は、家族一緒にキャンプに行ったり、唐松岳や燕岳、木曽駒ヶ岳にも登ったり、と楽しい記憶が、今も鮮やかによみ返る。

そして関西へ戻り生活も変化し、震災のドタバタ、介護、普通にいろいろなエピソードを経験…そんなある日、ふと脳内に電流が走った。

…50 歳直前の私、

「私は人生の折り返しをとっくに過ぎてている！これではいけない！」

ついに山への情熱がムラムラ再燃！

気づけば、再起動ボタンを勢いよく「タップ」していたのだ。

あれから 20 年。

夢だった北アルプスの稜線を、毎年のように歩いた。

山岳部時代は岩登りが中心で、稜線縦走の経験は少なかった私。

夫も社会人山岳会出身なので、岩登りオンリー派。

でも彼はサラリーマン、毎日多忙。ならば私がプロデューサーとなって、夏のアルプス大作戦をコーディネートし続けてきた。テントを背負う体力はない、すべての行程が山小屋泊まりだ…なのでお金がかかる！サラリーマン頑張れ！

◆山行メモリー（抜粋）

- 唐松岳～不帰キレット～白馬岳～朝日岳～蓮華温泉
一番の楽しみにしていた五輪尾根の高山植物は豪雨の下山で涙
- 折立～太郎平～黒部五郎岳～三俣蓮華岳～水晶岳～雲の平～薬師沢
ゴールデンコースは全日晴天にめぐまれ、憧れを実現。

- 槍ヶ岳～南岳～大キレット～奥穂～岳沢～上高地
南岳小屋からのゴージャスな景色は忘れ難い。大キレットは一度で充分。
- 五龍岳～八峰キレット～鹿島槍～針ノ木岳～蓮華岳～七倉岳～烏帽子岳～高瀬ダム
右を向けば劔岳がどんどん迫る！黒部湖が灰緑色の水をたたえて、ずっと傍にいた。コマクサが足にからまる勢いの南沢岳！長い日数を無事に終えた。
- 劔岳（別山尾根）往復
30 数年ぶりの劔登頂！結構いけたな。建て替えて間もないシャワー完備の劔山荘に感動した。ソロの女性と話すと「ガイドと源次郎、ハツ峰へ行く」と言う、すごい時代だ。登頂後に一気に室堂へ、最終バスにヨロヨロで駆け込んだ。
- 笠ヶ岳（鏡平から）
槍穂の稜線がずっとお供してくれる贅沢トレイル。下山の笠新道は長かったー。
- 北海道・大雪山縦走 黒岳～旭岳、銀泉台～赤岳～緑岳～大雪高原温泉
神々が遊ぶ庭「カムイミントラ」、圧倒的な大自然に言葉が出ない…。
- スイス／グリンデルワルト 1 週間滞在
アイガー北壁下にあるルート詳細看板にびっくり仰天。「観光立国おそるべし！」夫はミッテルレギ稜をガイドと登頂。その間私はあちらこちらと好きにハイキング。部屋のベランダからアイガー北壁を見上げながら、スーパーで購入したパンとチーズの夕食は贅沢この上なし！！
- ネパール① カリガンタキ上流のロッジ「タサンビレッジ」に泊まりダウラギリ氷河を見上げたい！その一心で計画した年末の旅。
初めてのネパールに大感動。異世界すぎて心震える。
- ネパール② GW にバラボカリ尾根（P29 からの派生尾根）
夫婦 2 人にガイド、キッチンボーイ、ポーター計 7 人！でシャクナゲに埋もれる「殿様トレッキング」。秘密の花園に迎えられた。
- ネパール③ GW に残雪のトロンパス越え（5,400m）アンナプルナサーキット
世界中からトレッカーがやって来る有名なトレッキングコース。私だけ 4800m からヤクに乗って VIP 待遇の雪の峠越え。無事にジョムソンへ到着し、感謝いっぱい 8 日間の冒険。ヤク使いのおじさんは、なんだか小綺麗な服装で周りのネパール人と違った。それもそのはず、この 1 時間半のヤクタクシー代は 2 万円もしたのだから。
- 中国四川省の青いケン探訪
四姑娘山（6250m）を望む谷でブルーポピーとパンダを堪能する。

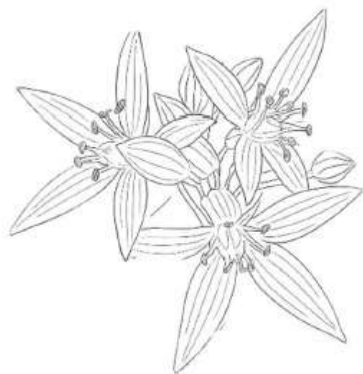
山岳部時代は通過点に過ぎなかった上高地の良さを知り、5月の花の季節、雪の季節と年に2回通い続けている。

六甲山もあらためて歩くと、本当に奥深い。ケーブルカーでスッと行けるし、季節ごとに可憐な山野草が出迎えてくれる。数えると、年間60数回山を歩いているが、その3分の2は六甲山系だ。

昔はあまり足を運ばなかった関西圏の山の魅力にもすっかりハマリ、今はSNSで情報収集しながら、身の丈にあった山歩きを四季折々楽しんでいる。

若い頃は想像もつかなかった「50年後の私」は、こうして自分のペースで、深く静かに山を楽しむ人になっていた。

100年前、甲南山岳部が創設されたときの魂に――ようやく、50年かけて辿り着けたのかもしれない。





2024 年 9 月 立山室堂の雷鳥荘と立山高原ホテルに滞在

快適な山での過ごし方に感激した。久々の雷鳥沢も意外と歩きやすかった。でも剣岳は雲の中、
 気を取り直して別山、真砂岳まで進み大走りを下った。奥大日岳、浄土山などにも足を運び、50
 年前には想像できなかった充実の温泉つき室堂ライフだった。



2025 年 2 月 氷ノ山へつながる赤谷山 (1216m) へ。去年と全く違いすごい雪量だ。ラッセル
 開始したが、1 時間で早々に撤退の決断。高齢登山者は先行者トレース頼み。



2025 年 3 月 西穂山荘の名物ラーメンを目的に新穂高へ遠征。今年はとにかく雪が多い。
 2 度目の雪の福知山 (1671m) は遠かったー。体力おちた！槍穂高は雲の中。



2012 年 8 月 スイス・グリンデルワルト

また行きたいな。家族経営の小さな駅前ホテルに滞在してハイキング三昧。アイガー北壁の真下にも立つことができた。



2013 年 5 月 力強いヤクの背中では意外と乗り心地良し。アンナブルナサーキット、トロンパス 5400m は目前。超らくちん。峠からは乾燥地帯をムクチナートへ、自分の足で元気に下山。



「最近の山歩き」

鳥井陽子（大 S54 文）

大学を卒業して以来、山はあまり登っていなかったのですが、10 年程前からまた山歩きを再開しました。

今は高山に咲く可愛らしい花たちを見るのが本当に楽しみです。

おかげで一步一步がなかなか進みませんが、それも良しでしょう。

昔の山友達とも連絡を取り合い、松本や富山や茅野で待ち合わせて、春夏秋冬山歩きを楽しむようになりました。

山の中に身を置いているだけで嬉しく、花や木や風や鳥のさえずりや・・・いい時間が流れます。



一昨年の夏、友人と新穂高温泉から小池新道を、鏡平山荘で一泊して、へろへろになって双六小屋まで登ってきました。

2 軒とも立派な山小屋になっていてびっくりです、お値段も。

ここが目標でしたが、それでも大満足！



大学 3 年の夏の合宿で立山から前穂高まで縦走したのですが、一ノ越から見た槍ヶ岳があまりにも小さくてため息が出たこと、双六あたりまで来るとその槍ヶ岳が大きくなって嬉しかったこと、当時は珍しくヘルメットをかぶって槍ヶ岳の頂上に川野君と登ったことなど、懐かしく思い出しました。

そして今年の夏、待望のスイスアルプスのハイキングコースへ。訪れた7月初旬はあらゆる花が満開で、4000m級の山々や氷河の眺望に感激しながら優しく彩られた道を歩いてきました。天気を見つつ無理せず、を前提に、これからも山を楽しんでいこうと思っています。



山小屋ランチも美味しい！
(サンモリッツ 山小屋ランチ)



(グリンデルワルト 王道ハイキングコース)



(サンモリッツ セガンティーニ小屋より)



(グリンデルワルト 山上湖バッハアルプゼー)

豆田隆志（大 S54 法）

現役時代の話を書けと言われたのですが、私の体験を書くと、せっかく入ってくれた現役の子供たちが、退部届を提出すると思うので、私の釣りを始めた理由と近況をかきます。20 数年前に 50 肩になり、医者から何か肩と手を動かす運動をしろと指導されて、色々やってみたのですが、全く肩が痛くて無理でした。まあそれで自分の好きな事なら、ぼちぼちつづくのでは無いかと思い立ち、釣りを始めた次第です。

とりあえず道具を取り揃えて、家のすぐ近くの塩屋漁港に行き始めました。それ以来 20 数年に渡り、真冬と雨の日を除いて、週一回釣行しています。只の下手の横好きなんです。

釣り自体は、駅に行くより海に行く方が近いので、子供の頃以来久しぶりに釣りに行くと、港も海も釣れる魚も、変わっていました。昔は多彩な魚種が簡単に釣れたのですが、今はベラ位しか釣れ無くなってしまっています、まあベラも美味しいですが、さすがに飽きてきました。秋には、イワシ、サバ、アジ、がサビキで釣れるのですが、自分の子供頃は、網で掬えるほど、だったですけどね～。今やそんな光景もお目にかからなくなりました。少しでもベラ以外の魚を求めて、須磨、平磯、舞子、大蔵海岸と釣り場を変えて行っは見たものの、大して変り映えもせず、まあ私がへたでしかも同じ釣り方をしているからと思うのですが、相も変わらずベラばかりです。

ここ数年近所の方の船に乗せて頂き、沖での船釣りをしてたのですが、去年の夏から船の故障で出られず、仕方なしに陸から釣ってました。

この 7 月 23 日やっと船が治り沖に出て釣りが出来るようになり喜んでます。

相も変わらず釣れ無かったですが。その日も明石海峡大橋遊覧になりました。来週から毎週船を出して頂けるので、大物が連れましたら、フェイスブックにてお知らせしますので、気長に待っていてください。以上が豆のベラしか釣れない近況報告でした。



川野幸彦（大S56理）

私が甲南大学山岳部に入部したのは昭和52年（1977年）4月です。大学入学と同時にしました。今から48年前です。この度は、半世紀ほど前の山岳部の様子を私の山日記より振り返りたいと思います。なお、「川野幸彦の山日記」は、甲南山岳会ホームページに掲載されています。掲載箇所は“甲南山岳会ホームページ⇒個人投稿集⇒川野幸彦の山日記”です。私が参加した山岳部での4年間の全ての合宿、土日山行、個人山行が記録されています。合宿の報告書は残っていますが、土日山行と個人山行まで記録したものは他にはないと思われます。この山日記がホームページに掲載されたのが20年程前です。（回想）はその時に思い出したこと等が記されています。

また、文字ばかりでルート図は皆無ですが、これらも手元の原本には記録されています。最近、久しぶりに部員が入り山岳部復活も近いです。およそ半世紀前の山岳部はどうだったのか。以下、報告です。

1) 年間の登山日数（山日記より読み取り）

1年：87日 2年：87日 3年：108日 4年：77日

山日記の記録から数えました。改めてこんなに山に行っていたのかと感心しました。合宿は年に5回あり、他の山行を入れればこの位になります。学校には毎日行っていました。授業にも余り出ずに部室にいました。山登りが最優先でした。ある先輩は「君は何学部だ。」と聞かれ「山岳部です。」と答えたいです。今では考えられないことです。当時の体育会の人々は皆同じような感じでした。授業に出ずに部活に熱を入れていました。よって、留年された先輩も多数いらっしゃいました。納富さんは私が1年生の時も4年生。4年生の時も4年生でした。ちなみに私は3年生終了時点で48単位を残し、評価Aは3つ（内訳は体育が2つ。顧問の山本先生からいただきました）。4年で卒業できたのが奇跡でした。

2) 装備

担ぐ荷物は、定着合宿では4年生でも最低で40kg。夏山などは50kg以上ありました。合宿の前にはこの荷物の大きさと重さにうんざりしました。これは1年生から4年生まで同様でした。ザックの重さは2年生が最も重く、1・3・4年生はほぼ同じようだったと思います。テント、スコップ、食料、登攀具など今とは比べ物にならないくらいの重量です。また、当時軽量化は余り考えていなくて体力任せでした。ハードで我慢大会です。部員の多い他大学では、1・2年生に沢山の荷物を持たせ、3・4年生は楽をしていましたが我が部はそんな余裕はなくて、4年生の冬山でも40kg以上ありました。重くて文句を言ったら、2・3年生はさらに10kgほど重かったです。そのため歩くスピード

は亀のように非常に遅かったです。なお、雪山でのラッセルも“全員参加”でした。悪場では1年生以外の上級生が先頭に立ちルートワークしました。行動中に最も楽をしたのは1年生だったのかもしれませんが。

3) 山での食事

食事は1年生が作りました。朝は早めに起きて準備しました。上級生が爆睡の中で作るのは不満だらけでした。しかし、このことは2年生になると忘れました。

・夕食：残雪期から無雪期（5月合宿から11月合宿まで）までは、生米を炊き、おかずはカレーやシチュー、レトルトハンバーグ、レトルト肉団子、麻婆豆腐（豆腐は高野豆腐）、ビーフンなどです。合宿には、じゃがいも、玉ネギ等の野菜類はそのまま鉄製一斗缶に入れて持って行きました。従って一斗缶は一缶10kgほどでかなり重かったです。肉はペーコンを使用しました。夏の土日山行では天ぷらや流しソーメンも作りました。積雪期（冬山合宿と春山合宿）はα米の雑炊で、味は、カレー・ビーフシチュー・ハヤシライスでこれにベミカン（ラードとマーガリンに小切れの鶏肉をいれ固めたものです。部室で作りました。怪しい食べ物です）を入れました。みんな同じようなカレー味で、これが原因で好きだったカレーが嫌いになりました。

・昼食：レーションと呼ばれていました。これは小分けしたビニール袋にクッキー、チーズ、飴、マヨネーズ、ピーナッツ等を適当に入れました。昼食なのですが“3時のおやつ”と勘違いした新人もいたようです。なお、夏山合宿では、朝に多めのご飯を炊き、弁当を持参しました。おかずは昆布の煮付けやふりかけ、桜でんぶ、漬物など質素なものでした。

・朝食：ふりかけご飯に味噌汁、ラーメンなどでした。あまり詳しくは覚えていません。まあ、朝は出発の準備でバタバタしていて忙しかったので調理が簡単なシンプルなものでした。

4) 喫煙率

私は吸いませんが当時の部員の半数以上が吸っていました。今とは違い大学入学と同時にタバコと酒はOKでした。面倒な年齢確認など不要でした。大学生は“大人”とみなされていました。寛容な時代です。今は、タバコや焚火の煙の臭いに対して非常に敏感ですが、当時は嗅覚が麻痺し煙に対して鈍感だったのかもしれませんが。テントの中でも皆さんプカプカ吸っていました。副煙の影響など全く考えませんでした。冬山のテントの中は、調理時の水蒸気も加わり濃いスモッグの中にいる様でした。こんな風なので衣服やシュラフは変な臭いがしていました。何時間干しても消えませんでした。私の母は余りにもシュラフが臭いので香水をかけました。そしたら、寝ている時に香水の匂いで気分が悪くなりました。また、喫煙する方は、合宿中に雨などでタバコが濡れないように何重もビニール袋で包んでいました。休憩時の一服もザックから取り出して吸うまでに時間がかかり大変でした。よく言われたのが“リーダーが喫煙者の場合は休憩時間が長く、非喫煙者の場合は短い。”です。私がリーダーの時は休憩は短めで、途中で吸うのを止めて、残りを次の休憩で吸っていました。後輩の喫煙者は不満を持っていたのかもしれませんが。

5) 移動手段（交通機関）

学割を使い、国鉄（今のJR）の夜行列車を利用していました。北陸方面が急行立山号（富山行）と急行北国号（青森行）の2本。松本方面が急行ちくま1・2・3号（長野行）の3本でした。午後10時頃に大阪駅を出発し早朝の5時頃に富山や松本に着きました。対座の直角座席（現在の快速や新快速の対座座席）で座席の間にキスリングザックを置きL字型に横になって寝ました。熟睡できずに翌朝は睡眠不足で辛かったです。今でこそ高速道路が全国に伸びていますが、当時は、東名と名神が全線で開通しているのみで、北陸道・中央道も部分開通で全線開通に向けて建設中で夜行バスはなかったです。日本国中を国鉄の夜行列車が走っていました。学生が使うのは急行列車の自由席でした。急行券はどこまで乗っても1列車700円でお得感がありました。停車する駅は現在の新快速電車で近いものでしたが、時間調整（一気に目的地まで足ったら夜中に着いてしまう。）のために駅での停車時間が数十分と長かったです。特に京都駅や名古屋駅では30分以上止まっていました。この時間を利用して買い物に出掛けて、乗り遅れてしまった方もいました。乗り遅れた方は翌日の特急列車で追いかけたそうですが、夜行列車は混むために1年生は昼過ぎには場所取りのため、大阪駅の北コンコース（噴水前。今はありません。）の夜行列車乗り場にバカでかいキスリングを置きに行きました。盗難に遭いそうですが、40~50kgのキスリングを盗む泥棒もいませんでした。そして、20時ごろに全員が集合し出発までに王将の餃子などを食べに行き栄養を補給しました。見送りも多い時で十数人いらっしゃいました。OBに残留部員、友人などです。有り難いことです。夜行列車と言えば、要さんのお母様です。新大阪を過ぎた辺りの踏切でいつも手を振っていただきました。我々も窓を開けて大声で「行ってきま〜す。」と応えました。お母様の見送りは、当時はただの見送りにしか思いませんでした。この歳になるとお母様の気持ちが痛いほど分かります。この頃は遭難も多く大変心配されていたのでしょう。

6) 女性の部員・外国人部員

・女性部員：私が、現役時代に関わった方は、2年上の村岸さんと中辻さん（マネージャー）、1年下の美麗（みれい）ちゃん（名字はわすれました。マネージャー）、2年下の柿木さん（マネージャー。ワングルからの転部）の4人です。残念ながら美麗ちゃんと柿木さんは途中で辞めてしまいました。山岳部での女性部員は極めて稀で他大学でも同様でした。これまで日本大学の2名の方を見かけただけです。村岸さんも極めて珍しい存在で他大学からも人気がありました。“ヨーコちゃん”と呼ばれてアイドルの様でした。甲南山岳部でも女性部員は村岸さんと吉松さんのお二人だけだと思います。

・外国人部員：ラルフPプチャルスキー。アメリカ人。私が2年生の冬頃に入ってきました。身長180cm超。テントでは真っ直ぐに横になれなくて“くの字”で寝ていました。また、靴のサイズ33cm。なかなかキングサイズのもが見つからず、買うのに苦労したらしいです。歩幅も大きくて雪山で前の人のステップを外すので、住友さんからよく怒られていました。「ニホンジンノホハバ！チイサイ！」と答えていました。

7) 留年

私より上級生では、毎年必ず留年した方がいらっしやいました。4年で卒業したのは私の一つ上の方からです。納富さんは、私が1年生の時も4年生。4年生の時も4年生でした。大らかな方が多かったのです。大物です。また、納富さんの友人の写真部の日比野さんも7年間在籍され、試験前には自宅に電話があり試験の資料を揃えたりしました。まあ、日比野さんには、学部は違いましたが昼食をよくご馳走になりましたのでできる限り協力しました。留年すると知り合いも減り情報が得難かったのかもしれません。

8) 沈殿（停滞）の日の過ごし方

ラジオを聞いて寝ていました。悪天候による休養日です。トランプ（大貧民・セブンブリッジなど）もしました。結構熱くなりました。合宿後半になると腹が減り食べ物の話ばかりでした。「ラーメン食べたいな。」「俺はかつ井や。」など。また、沈殿食なるものがありました。マルタイラーメンやお汁粉などです。空きっ腹には有難かったです。また、夏山などはアタック食がありました。小さな羊かんが多かったと記憶しています。

9) 装備（服装・登山靴・テント・登攀具）

・服装：赤のウールのシャツ。これは部から支給されました。襟に甲南 AC のバッチを付けました。バッチには通し番号が打たれ、私は4番でした。“4”を嫌う方もいましたが気になりませんでした。ズボンはジャージ。化繊なので濡れても乾くのが早く快適でした。下着ですが夏は丈夫な綿でしたが、雪の時期はウール（俗にいうラクダの下着）の上下でした。これは濡れても冷えませんでした。少しチクチク感があり嫌う人もいましたが。パンツは、私は化繊でしたが、海水パンツを穿く方もいました。雨具はナイロンで裏にゴム打ちされたものなので蒸れました。ゴアテックスはまだ世に出ていません。フードを付けると頭が蒸れるので代わりにヘルメットを被っていました。これで少しは快適でした。

・登山靴：ボックスキン（裏革）でビブラムソールの重登山靴。今とは比べ物にならない位に重かったです。両方で2 kg 以上ありました。当時は 40～50kg の荷物を担いでいたので丈夫な靴でないと駄目でした。今の軽い登山靴では重さに耐えきれずに直ぐにダメになっていたと思います。クライミングもこれで行っていました。小さなスタンスにつま先で立つので、靴底の先が直ぐに減りました。手入れは市販の革靴専用の油脂を塗っていました。私は夏用と冬用の2足を使い分けていました（夏に使った靴は防水効果が低くなるため）。冬は靴の上からオーバーシューズを穿きました。これで凍傷の危険が軽減されました。なお、冬は夜間に靴が凍るのでシュラフの中に入れていました。凍った靴を履くと凍傷になります。

・テント：夏用冬用共に家型のポール式。1本ポールではなくて風には強かったのですが重かったです。軽量のフレーム型の小型テント（ボンボンテント3人用）は発売されたばかりで個人山行に使っていました。

・登攀具：ザイル（現在はロープと言うらしい。）は、ナイロン製の40 mで11 mmと9 mm（現在は、45 mとか50 mが主流ですが。）です。11 mmはシングルで、9 mmはダブル

ルで使いました。私は、ダブルは重いのと取り扱いが複雑なのが難点でしたが、ザイルの流れや撤退時の懸垂下降では長い方が不安を減らすことができるので気に入っていました。40mは短いようですが、岩場ではおよそ40m毎に確保用支点がありました。ザイルの真ん中にはマジックで印を付けて、どれ位登ったのか分かるようにしていました。ただ、ザイルによっては長さが違うものもありました。これは、過去に墜落等で伸びきっていたものです。強度はかなり低下していたと思われます。ランニングビレーはほとんどが残置ハーケンやボルト、樹木で取っていました。この頃の登攀ルートには残置ハーケンが多くて、これによりルートが簡単に読めました。ようやく外国でナッツが出た時期で、フレンズやカムはまだ無かったです。

10) 授業・試験

授業には、1・2年生の時は語学と体育以外はほとんど出ませんでした。諸先輩から「授業には出なくて良い！」と言われ、それを真に受けえらい目に遭いました。3年生終了時点で48単位しか取れませんでした。こんな風なので4年生の時はほぼ毎日授業に出て何とか卒業できました。まあ、授業に出なくて良いとおっしゃった先輩方はほとんど留年されていました。私が愚かでした。なお、4年生の時に他学部~~の~~物も含めて60単位以上取りましたが殆どが評価Aでした。まあ、試験の後には教授の皆さんには単位がもらえるように強くお願いに伺いましたが。

11) 山岳部の1週間の流れ 他

合宿がない時の1週間の流れです。月曜日が部会。火・木・金曜日がトレーニング。水曜日はお休み。土日が岩登りの練習。部会では次の山行の勉強会や装備の点検などです。勉強会では次に登るルートや天候の解説。トレーニングはランニングが中心でした。走るスピードは、喫煙者が多かったのでやたら遅く、私は1年生から4年生までトップでした。なお、トレーニングは余り重視されずにいい加減だったような気がします。それに引き換えワンゲルはハードでした。トレーニングのためのトレーニングをしないといけないほどでした。合宿前後に平尾会というOBも交えたミーティングがありました。次の合宿の検討や報告などを行いました。

以上です。かなりの部分に私の主観が入っており失礼しました。また機会がありましたらこの続きを投稿したいと思います。今後の山岳部の発展を祈念しております。

一人で山に行くということ

山本恵昭（大 S56 理）

ここ数年、周囲と一緒に山に行く人が少なくなったこともあるが、一人で山に行くことが増えた。知人たちは、「一人で寂しくないの、怖くないの」と心配して声をかけてくれる。確かに一人で行くと、何かあった時のリスクは大きいし、寂しく怖いのである。

でも、しばらく誰ともしゃべらないような山に入っていると、自分の斜め後ろ辺りに誰かが現われてくるのだ。実在はしないはずだけれど、私の意識の中では確かに誰かいるのである。それは、もう一人の自分の分身のようだ。そして、道中、彼との会話が始まる。それは仕事のことであったり、下界での人間関係のことであったり、たわいのない会話が続くことが多い。

ただ、何かピンチが訪れた時には、彼との会話が大きな意味を持つようになる。「相当疲れているみたいだけど、まだ進む気。そろそろビバークを考えたら」、「雪が不安定だから、もう今回は諦めて戻ろう」、「もうすぐ日が暮れるけど、ヘッドランプをつけてラッセルしていたら、19時頃には安定したところに着くよ」、「このまま突っ込んだら、落ちるよ。意地張らずにもう帰っておいしいものでも食べよう」など。危険な状況でストレスを感じて感情的衝動的になる自分を、もう一人の自分が冷静に見つめて適切なアドバイスをしてくれるのである。もう一人の自分が現れるようになってからは、多少のリスクに出くわしても焦ることなく平常心を保ち、安全に向けての最適な選択肢を選ぶことができているように思う。

故雨宮先輩が、山嶽寮の67号に「単独行 転落 極限行を考える」と題して、ソロと幻視体験について触れられている。そこには、「奇跡の生還へ導く人」ジョン・カイガー著の内容が紹介されていて、メスナーをはじめとして多くの極限に挑む登山家や探検家が、同じように「サードマン現象＝姿なき同伴者」の存在を経験していることが描かれている。それは、心理学でいう「自我の外化」という現象とのこと。

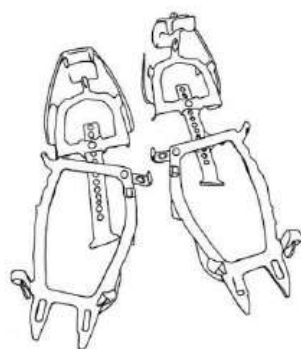
※抜粋「社会から隔絶された場所に独り身をおいていると、自我から分離した第二の自我が生まれ、ソレが外へ出て行ってむこうから自分に語ってくる。そのうち普遍化した、この第二の自我によって自分が取り込まれるという経過をたどる」

彼らの超人的創造的な活動に比べると、私の山登りなど凡庸で超安全な趣味の一つでしかない。彼らと比較するのは失礼と感じつつも、私にもちゃんと「サードマン」が現れるのである。

さらには、身の回りのいろいろな物たちが人格を持ち始めて、しゃべりだす。彼らとの会話が始まる。ハイマツと「アイゼンで踏まないでよ」「ゴメン、ゴメン、頼むからそんなに押し返さないでよ」、浮石と「私に触れたら、落ちますので」「わかりました。気を付けます」、キノコが「ここにいるよ」「そんな木の陰に居ったんかいな」、イワナと「その毛鉤には騙されないよ」「では、これではどうかな」、スズメバチが「この線から入ったら、ダメダメ」「了解、迂回します」、森の木々の枝が「ここだよ、通り道は」「教えてくれて、ありがとう」、空が「そろそろ雷を落としますので」「あと、10分待って」など。一人で行くと、山の中は案外騒がしく忙しいのである。

もちろん、客観的に考えると、これらはすべて私の頭の中の妄想の産物であることに違いない。脳の老化とともに、妄想が出やすくなってきているのかもしれない。あるいは、体力の低下によって、山の普通の場面でも思っている以上に体が悲鳴を上げているのかもしれない。しかし、理屈はともあれ、楽しいのである。もう一人の自分との会話で気付く自分の知らなかった一面に、木々や石ころなど神羅万象とのかかわりに、新鮮な驚きと発見が隠されている。そんな山登りを覚えてから、ますます自然の中に入り込むことが楽しくてしょうがないのである。

最近のアウトドアブームとSNSを通じた情報量の豊富さから有名な山は人だらけで、もう一人の自分が現れる時間をなかなか作らせてもらえない。今年は、甲南山岳会創部百周年ということである。百年前の創部当時、山の中は本当に原始溢れる世界で、諸先輩方は現在の我々より深く自然の中に浸りこむことが出来たのではないだろうか。部歌にうたわれているような世界を、憧れつつも羨ましく思う今日この頃なのである。



結婚を機に山登りを辞めてと妻に約束させられて以来、六甲山ハイクくらいしか山に登っていないので山行ネタがありません。そこで、随分前に雪崩に遭った時の話をさせていただきます。1995年1月16日、当時の勤務先だった東急ハンズでの年末年始の祭りのような喧騒から逃れ、とにかく一人静かに過ごしたくなった私は、久しぶりに連休を取りました。

ふとした思い付きでろくに下調べもせず近場で積雪が見込める場所である氷ノ山へスバルに乗って出かけました。

3年ぶりの氷ノ山は無風の高曇りで、駐車場には1台も車を停まっておらず、雪もたっぷり積もっていて、静けさを求めている私にとって最高の状態でした。

大学卒業以来の雪山に胸を躍らせながら準備を整え、氷ノ越登山口から入山。

昨夜積もった新雪を手に入れたばかりのスノーシューで踏みしめながら歩くと上司の小言やクレマー客のストレスが頭の中からポロポロとこぼれ落ちてどんどん気分が澄んでゆくのが実感できます。

昼過ぎには順調に氷ノ越避難小屋付近に到着し、コンロでラーメンを作り、ウィスキーをなめながらゆっくり過ごしましたが、依然として誰も登ってはきません。

下山する時間は十分にありましたがどうしても雪の中でテン泊したかったのでそこでテントを設営。

本当に静かな一晚を過ごした翌朝、のんびりとテントを畳み、目に染みる朝日が照らす新雪の上を、リフレッシュした穏やかな気分で三の丸へのなだらかな斜面をスノーシューで下っていました。

先のスキー場を下りればおしまいと思いながら急斜面を下山していた午前8時頃のことです。

背後に異様な気配を感じ振り返ったところ、10mほど後方で雪崩が発生。

とっさに樹林帯へ移動するも、思った以上に雪崩のスピードは速く、あっという間に流れに飲み込まれ転倒、周りの風景が白く、そして激しく揺れ動く映像に変わってしまいました。

しばらくして天地もわからず完全に埋まった状態で我に返ると、パニックになりそうな心を抑え、ゆっくり体を動かしてみました。

幸運にも痛む箇所はなく、手は動かすことができます。

顔の周りの雪を掻くとサングラスは無くグローブも片手のみ、しかし思いのほか軽い力で掘ることができたので、呼吸を乱さぬ様にゆっくりと足を動かしながら、狭いながらも全身の自由が確保できたところで脱出を試みました。

ところが体勢を整えようと動き始めた矢先、頭から後ろ向きに2mほど落下。

両足の間から木の枝と青空がちらりと覗いています。

少しの間状況が呑み込めず放心状態でしたが、どうやら大きな木のツリーホールに沿って落ち込んだのだと判り、安堵からそのままの体勢でしばらくの間ゲラゲラと笑いが止まりませんでした。

その後、木登りの要領で無事雪面に戻り下山したのですが、異常にテンションが上がりその後の車で走り出すまでの記憶がほとんどありません。

正直なところ氷ノ山はハイキングくらいの場所と心の中で完全に侮っていました。

家族や友人にも行き先を伝えず、思い付きで入山届も出さずに入山したので、運が悪ければそのまま春まで埋まっていたかも？と思うと今でも背筋が凍ります。

全くもって甘い考えで雪山に行った自分が悪いのですが...

その後ハイテンションのまま車で自宅に帰着するも、着の身着のまま気を失うように床で眠り込んでいたところ、明け方に激しい揺れが発生。

大地震に襲われた築100年以上の日本家屋だった自宅はものの見事に倒壊、家族全員が瓦と土壁の下敷きになり生き埋め状態に。

しかし、前日まで使用していたカジタのピッケルやコフラックの山靴が直ぐそばにあったお陰で家族全員を無事救出することが出来ました。

更に山岳部で得たロープワークやケガの応急処置術、ストックしていた燃料やアルファ米、職場のハンズの不良在庫を買い取ったエンジンチェーンソーなどが非常に役立ち、近隣の倒壊家屋から住民を多数救出できた事を付け加えておきます。



甲南山岳会以外の交流を振り返って

阿部康彦（大 H6 法）

はじめに

100 周年に当り、旧制高校にて山岳部の開闢から始まり、バトンタッチを繰り返しながら存続に努力された関係者皆様に畏敬の念を抱く限りです。

様々な時代、社会情勢の中にあって、それぞれの体験は異なるものの、山を通じて心湧き躍る青春を謳歌すると言う点は同じなのだと思います。

今後とも未来ある若者のために甲南にこのような素晴らしい場、機会があり続ける事を切に希むものであります。

今回、山岳部での出来事を回想する中で、甲南山岳会以外の山男達と交わる機会も多かった事、それが私の時代の部活動に影響を与えて居た事、そして今まで余り語った事も無かったと思いますので、この場を借りて少し話そうと思います。

入部間もない頃、蓬莱峡で関西学生山岳連盟 (AAVK) 主催の大規模な新人歓迎交流会が開催され京都、大阪、神戸周辺大学が集結しました。ボロボロのスニーカーと私服で初登攀した私は、ホールドに上手く乗れず高度感の恐怖で岩壁中ほどで動けなくなりました。

横を登っていた関学の谷先輩が、*ゴボウで上げてもらいなさいと声をかけてくれましたが、ゴボウの意味が分からず、ゴボウで上げて下さいと蓬莱峡中に響く大声で何度もビレイヤーに叫び、他大学の前で大恥をかいて以来、クライミングが苦手になりました。

以後、人の居ない廃岩場ばかりを西濱先輩に提案していましたが。ある日、不動岩に連れて行ってもらった折に偶然 VW 部 OB の川崎厚夫氏（横山先輩に 11 月のチンネに連れて行って頂いたご縁から、山岳部に対しとても好意的な方です）練習に誘って頂きました。そこから登攀三昧の日々が始まりました。また氏を通じて多くの社会人クライマーと触れ合う機会もありました。岩場で出会う社会人クライマーは私よりモチベーションが高く、仕事しながら山への年を取っても情熱を維持しているのは凄い方々だなあと感心させられました。



VW 部 OB の川崎厚夫氏と烏帽子岩にて

*ゴボウ＝ロープを使って登る事/編集注



平成2年夏合宿源治郎尾根を登る

さて話を学生に戻しますが、多くの大学と交流がある中でも関学、立命館、佛大、京都教育大とはテン場が同じになる機会も多く交流が多い方だったと思います。また日々のランニングついでに関学や神戸大まで走り、部室訪問して交流を持つことも行いました。

同年代の山屋と話をするのは楽しくもあり、大所帯の大学を羨ましく思ったり、少人数の大学と慰めあったり、他大学のモチベーションの高さに気後れしたり、山行レベルの高さ低さを比べてみたり、まあ、様々な心情がありましたが、余所は余所、ウチはウチと割り切っておりました。しかし、何と言っても同じ山域に知り合いが居るのは本当に心強い事でした。

夏の剣で立命館が事故を起こした時に協力した事があり、一斗缶丸々の豪勢な食料を譲り受けたり、逆に針ノ木沢でテント火事を起こした時、立命館が貴重な食料からツナ入りマッシュポテトサラダを沢山差し入れてくれ、山男の友情に感動しました（関東で就職後も立命館の吉本君と暫く一緒に山を登りました）。

冬の八ヶ岳で佛大1パーティが吹雪で壁から戻らず、テン場で佛大から遭難救助隊の結成の要請がありました。真っ暗で豪雪の早朝、小屋の主人が止めるのも聞かず出発。と同時にヘッドランプで凍傷を負いながらパーティが自力下山。皆で大いに喜び合いました。（またその後、佛大の米谷君とはアフリカ遠征に行く事になりました。）

5月釧沢早朝。ラジオで京大の八峰から滑落のニュース。AAVKで顔見知りでしたので富山県警からのボランティア募集に応え、西濱さんと私は救助に向かいました。県警と西濱さんが1番、20分以上遅れで私が2番、その他大勢は更に遅い三ノ窓出会い到着でした。

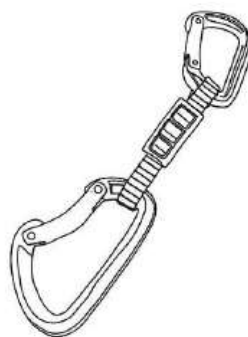
遺体の回収かと思っていたら、重傷で生存。その上、顔見知りでした。レスキューボードを引っ張って急斜面を釧沢まで引き上げるのはかなりキツイ作業でしたが命がかかっているので頑張りました。（県警本部に呼ばれ西濱さんは隊員にスカウトされました。）



9月の奥鐘山西壁、脱水と出血で中々のピンチな登攀でした。へろへろになりながら上部岸壁のプッシュ登攀の末、山頂と思しき場所に辿り着いた時、京都府大の色褪せた赤布に鶴飼先輩の名前を発見しました。「嗚呼、鶴飼さん達、厳冬期にここまで来たんだ」と尊敬の念と共に、知り合いに会えた気がして励まされ、元気をもらい無事生還しました。

奥鐘山西壁平成4年9月下部岸壁終了近く

他にも色々なエピソードがありましたが、振り返ると、4年間、学内は言うまでも無く、学外の方々との様々な交流を通じ、多くの事を学び、助け合いながら、充実した山男生活を送らせて頂きました。改めてこの場を借りて感謝の意を示したいと思います。



甲南バットレス再整備/リボルト作業報告

阿部康彦（大 H6 法）/川口 豊（大 S54 経）

かつて甲南山岳部員が、登攀の練習場として技術を磨いたホームゲレンデの甲南バットレス。今は草が生え、苔むし、蔦や木々がフェイスを覆って自然に還って行く途上にありました。山岳部の休部の時と共に訪れる者も無くなり、希に SNS 等にその様子を上げる人がある程度で古い支点を使用して不用意に取り付くと事故を起こすような危険もありました。

<再整備への動き/現地確認>

ようやく再開した山岳部ではありますが、部室もまだ無く、授業の合間に登攀練習の出来る場所が校内（ボルダリング壁以外）近辺にありません。ならばロープワーク等が出来る甲南バットレスの再整備を行うことが適当と思われました。

そこで川口、要で令和 6 年 11 月に現地を掃除がてら確認に出向きました。

その後も令和 7 年 5 月の総会后、阿部も現地を確認。6 月には宮崎・阿部が現地を再訪問確認しました。

フェイスは草が生え、苔むし、木立が覆い被さり、明らかに忘れ去られた岩場の残念な様相を呈していました。錆びたハーケンやリング、RCC ボルト、スチール、ステンレスハンガーなど



もかつての若き山岳部員達の汗と努力を伝える記念館の様相です。

しかし、周辺の清掃、除去をしたところでこのままの支点構成ではテンション負荷が前提の今のクライミングは出来そうもありません。また覆いかぶさる木立からの落葉がフェイスに積り重なり、腐葉土と化しているので岩場全体の清掃、苔除去と陽光を取り戻す必要があると判断しました。

<再整備への動き/バットレス清掃開始>

令和 7 年 6 月 11 日 参加者 阿部 （灌木の間伐と落葉かき）

同 6 月 21 日 参加者 西村、田中、阿部、川口（壁周囲の枝払い、間伐、壁の苔落とし、草引き）

※足場の悪い中、泥、埃、蚊、ダニ、ムカデなどとの懸垂しながらの格闘作業、大変お疲れ様でした。



泥や落ち葉、草付きをブラシや鎌で
除去作業をやって壁面が綺麗になりました。
田中さんに丁寧に作業をしていただきました。

東側の大ハング上部の
樹木も手を入れました。
明るい壁に変貌しました。



上部の枝類も伐採。
壁面に落葉を積もらせて
いた樹木です。



<再整備への動き/リボルトと清掃>

7/6 にベツルのハンガー30本あまりをリボルト。

ハンマードリルはゲテさんの協力でお借り出来ました。苔除去作業も継続して行いました。

(歴代の打ったハーケン、ボルトはそのまま温存しました)

- 参加者 OB：川口 阿部 現役：松田 出口 谷
- フェイス左、中央にハンガーラインを設置（各終了点もハンガー設置）。
- 右大ハングはハンガー足りず、下穴を空けまで実施。
- 大ハング横の小フェイスにビレー練習用のショートルート新設

今後は整備を継続しながらも、現役のみならず OB 諸氏が登攀する事で更に苔や泥が自然と落とせるので、皆様振るって久々の甲南バットレス登攀を清掃合わせてお楽しみください。リハビリ登攀にピッタリですよ！

後はひたすら登るのみ



私の百周年—山岳部再建の記録—

松田優作（大学2年文）

思えば生まれた時から自然がすぐそばにある生活をしていた。住まいは兵庫の片田舎で、授業中に窓の外を見ればいつでも能勢や箕面の山々が大空に背伸びをして手招きをしていた。小学校から岩根山に入り浸るようになり、家の倉庫を漁り倒してはスコップやナイフを持ち出して秘密基地づくりに精を出したものだ。中学生にもなるとガスバーナーや鉋といったものも持ち出せるようになり、自転車で行ってはお飯を作って遊んだり、岩壁や木によじ登ったりしていた。

高校生になると皆自分の将来を見据えるようになり、教育内容もそのように変わっていった。そんな中共に山へ行くようになったのが、もう一人の山岳部現役部員である出口だった。彼との初めての山行は丸山湿原にある東大岩ヶ岳。標高400mに満たない小さな山だが、巨岩を鎧った頂上は11月の寒空の下強い北風で我々を迎えてくれた。それからというもの私は勉強もそこそこに出口との山行やキャンプを繰り返すようになった。2月の初めごろに甲南大学を受験し、その後合格通知が来たときは飛び上がって喜んだものだ。しかし、甲南大学へ入学してまさか一年目で甲南大学山岳部の再建に携わることになるとは思ってもみなかった。

山岳部の存在を知ったのは入学してから半月ほどが経ったところで、出口とともにこれまで我々がやってきたような事をやっているサークルや部活動がないかを探していた時だった。大学HPにある課外活動一覧表の片隅に「山岳部 休部中」と書かれているのを見つけ、興味を持った。「入部に興味のある方は大学生活支援センターにお越しください」と書かれていたのを頼りに行ってみると、まさかの「わからない」と返答され驚いた。他の方法はないかとインターネットで調べていたところ、甲南山岳会のHPにたどり着き、そこに書かれていたメールアドレス宛に入部希望の旨を送信した。その後返信が届き大学で会うことになったのが、山岳部再建に尽力して下さった渋谷会長である。アイコモンズ二階の広場で合流し、少しお話。しばらくすると現ロッククライミングコーチの一人である川口先輩もお越しになった。近くの飲食店で夕飯をご一緒させていただき、簡単な身の上話と今後の方針について話し合った。

事が大きく動いたのは木々もすっかり色づいた10月の終り頃だった。山岳部復活に際して体育会から返答があり「体育会の主将達の集まる会議において、プレゼンを行い過半数の賛成票を得ることが出来れば復活が承認される」とのこと。こうして我々は山岳部復活の第一歩を踏み出したのである。プレゼンの作成にあたり、渋谷会長並びに西村先輩や川口先輩との打ち合わせと練り込みを繰り返し、大学では山岳寮を読み漁った。

年の瀬も近づく12月18日、とうとうプレゼンの本番を迎えた私は、「松田君の肩にすべてがかかっている」との訓示を渋谷会長から受け、一矢入魂の想いで各部主将等の眼前に立った。最初の内は緊張でおかしくなりそうだったが、いつの間にか緊張は解け、無為自然の心の

ままに山岳部の輝かしい功績や歴史、今後の方針等を話すことが出来た。結果は全会一致の賛成。山岳部復活を支持する真っ直ぐ伸びた手を見たとき、私は言いようのない達成感に包まれた。発表が終わってすぐ、帰り道で渋谷会長に山岳部復活の吉報を電話越しに伝えた。「よくやった」とのねぎらいの言葉。いやはや自分には勿体無い。その後は種々の書類手続きや申請書の提出、方々への連絡に追われたものの何とかすべて完了し、2025年を迎えた。

4月から正式に部として認められるということで、年明けからは来る新人勧誘に向けて渋谷会長たちと打ち合わせ。他方で部則の草案作成や今後の予定を考えながら、山積みになった書類整理を行う。その合間合間に出口と山へ行ったり、先輩方と山へご一緒させていただくこともあった。

4月1日、爽やかな春風と万朶の桜が咲き誇る甲南大学正門右にブースを構えた我々は、西村先輩に印刷していただいたチラシと山道具を手に入部員の勧誘を行った。本日持参分のチラシも少なくなってきた頃、背広姿の新入生の合間から一人の青年が我らが山岳部のブースにやってきた。どうやらしょっぱなから入部希望のようで山に興味があるとのこと、素晴らしい。連絡先を交換してその日は別れたものの、後日に入部希望のメールが届いた。山岳部復活最初の勧誘でいきなり新入部員ゲットとなった、重畳重畳！

かくして復活を遂げた甲南大学山岳部。最初の合宿は雷鳥沢ベースの立山登山と相成った。5月の立山は美しい雪を纏い、砕岩を鎧った姿で我々を迎えた。一日目は立山駅からケーブルカーとバスで室堂駅へ、その後雷鳥沢まで下ったものの悪天候のため予定していた雪練を中止。二日目、朝六時ごろに出発し快晴の空の下一ノ越へ。西からの強風を受けながら岩場の斜面を立山山頂に向けて登る。天高く昇った朝日は時折の雪風をきらきらと輝かせ、登頂への思いを益々熱くさせる。八時半雄山の頂に立つ。山頂の神社に参拝し、達成感を胸に眼前にそびえる大汝山、ついで富士ノ折立を目指す。富士ノ折立から夏道をたどり真砂からベースキャンプのある雷鳥沢へ。次第に気温も上がり額に汗がつたうも自然に笑みがこぼれる。漂う火山ガスの不快な刺激臭でさえ懐かしい。十一時二十分に雷鳥沢着。休憩の後十三時から十五時まで雪練。夕方ごろから天気が崩れ、投石のような霰と強風のなか就寝。翌朝になっても悪天候が続いたため、予定を繰り上げて下山した。

思い返せば半年という短い時間で様々なことが起きていた。当の本人である私にとって、甲南大学山岳部の復活に尽力し貢献できたことは大変に光栄なことである。大学に入って一年も経たぬ間に部の復活を志し、OBOGの方々と協力し、山岳部100年の節目をその目で見たことのある大学生などそうそういまい。私は今、うぬぼれとはわかっていながら自身のやってきたことを誇ろうと思う。そして今後とも甲南大学山岳部の輝かしい歴史を後世に繋いでいけるよう尽力したい。OBOGの諸兄姉の皆様にもご協力とご声援を賜りたい。いつまでも山岳部が栄え希望を胸に、憧憬の念をもって山の頂に立てるように

ベルクハイル！

現役活動報告書

出口維吹（大学2年文）

2025年2月15日 加西アルプス

【概要】

今回の登山は現役二人とOBの先輩方と一緒に登った。我々のほかにも山登りに来ている人が多く、道もそこまで険しくなかったため、現役二人は体力に余裕をもって登ることが出来た。しかし、普段山登りは現役の二人だけで登っていたが先輩方と登ることでいつも以上にたくさんの思い出を作ることが出来、ただただ楽しかった。

【経路】

善防山本丸登山口→善防山→笠松山→善防山→大手門登山口



（橋の上での集合写真）



（善防山頂上）

2025年2月22～23日 東山

今回は現役二人とOBの先輩の三人での雪山での初めてのテント泊として、何にもわからない状態の中で、雪が積もった雪原の中からテントを張れそうな場所を探し、雪の中でのテントの張り方や風をよけるための雪の積み上げ方等を教えてもらった。アイゼンやワカンの初の実戦投入としてぎこちないところがありつつも登りながら学んでいき、歩いている途中にワカンやアイゼンの紐が緩んで止まって結びなおすことも多々あり、最初は結ぶのにかなりの時間がかかったが、何度も繰り返すにつれて徐々にそのコツや歩き方を知ることによって、雪山の登山の厳しさと同時にその苦難に対しての楽しみ方を知り、次の雪山の登山が待ち遠しいという気持ちでいっぱいになった。

【経路】

一日目 東山尾根コース登山口→上東山→東山

二日目 東山→上東山→東山谷コース登山



(東山山頂)



(山頂付近の展望台)

2025年3月15～16日 武奈ヶ岳

今回は現役二人とOBの先輩の三人で登った。前回の東山での登山の経験を経て、テントの張り方やアイゼンの履き方等はかなりスムーズにでき、雨が降っていたが装備が濡れないように工夫を知ることが出来た。雪が半分解けている状態であったため足を進めるたびに落とし穴のように足が何度もはまっていき、体力をかなり消耗しつつけがもなくかえってくることができた。道中で雪崩の跡があり、少々危険と判断したため一人ずつ進んでいく箇所があったが、ほとんど雪山を上った経験がない現役二人にとっては改めて雪山の危険性を知る良い機会となった。

【経路】

一日目 武奈ヶ岳イン谷口駐車場→金糞峠→コヤマノ岳→武奈ヶ岳→コヤマノ岳周辺

二日目 コヤマノ岳周辺→金糞峠→武奈ヶ岳イン谷口駐車場



(武奈ヶ岳頂上)



(雪上の野営)

2025 年 5 月 2～4 日 立山

今回は現役二人と OB の先輩と三人で登った。初めての雪山での二泊ということで食料やその他の荷物が重すぎたことにより持っていく必要があるものとならないものをはっきりと判断し、少しでも軽いものを選ぶ必要があることを身をもって知ることが出来た。天候の変化によりテントに籠る日もあったが非常に良い経験になった。

【経路】

- 一日目 室堂登山口→みくりが池温泉→らいちょう温泉雷鳥荘→雷鳥沢野営場
- 二日目 雷鳥沢野営場→一ノ越山荘→立山(雄山)→大汝休憩場→立山(富士ノ折立)→
雷鳥沢野営場
- 三日目 雷鳥沢野営場→らいちょう温泉雷鳥荘→みくりが池温泉→室堂登山口



(雄山頂上)



(道中での記念撮影)

2025 年 6 月 14～15 日 氷ノ山

今回は現役三人と OB の先輩と四人で登った。一日目は普通の登山だったが二日目は初めての沢登りであり、ずぶ濡れになりながらもコケの生えた石など滑りやすい場所に気を付けながら登ることが出来た。初めてのことで期待と不安など様々な感情があったが登り切った後はただただ楽しく沢登りという新たな山の楽しみ方を知った。

【経路】

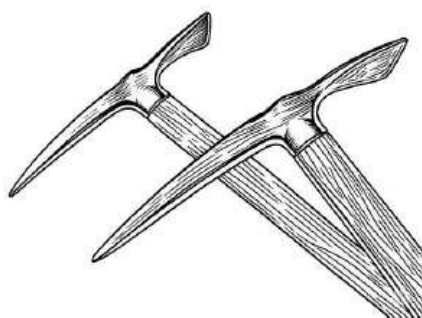
- 一日目 大段ヶ平登山口→神大ヒュッテ→氷ノ山(須加ノ山)→神大ヒュッテ→大段ヶ平登山口
- 二日目 黒滝の沢→氷ノ山林道橋付近



(沢登り道中の記念撮影)



(氷ノ山山頂)



－追悼－

松山弘和さんを偲ぶ

西名俊英（大 S61 理）

2023 年 10 月の山嶽寮を何気なく読んでみると、松山の総会・慰霊祭出欠連絡の記事の下に「令和 5 年 6 月逝去されました」とあり、愕然となりました。彼とは同期で入部して 4 年間を山岳部で共に過ごしました。

彼と最後にあったのは 1995 年阪神大震災のとき。岐阜からボランティアに駆けつけてくれました。当時私の住んでいた中央区での活動後の夜に甲南大に立ち寄り、被災した学舎を二人して茫然と見上げました。数日後、再度ボラに行きたいと連絡をくれたのですが、私が受け入れることができず、断り方も言葉が足りず気分を害してしまったのではと思います。それっきり。

訃報の後、何もできないまま、もやもやとした感が続くのに耐えられなくなりました。翌 2024 年 5 月に帰阪の用を作り、彼のことを偲び、ひとり追悼登山（芦有～荒地山、レリーフ～横池～風吹岩～バットレス）しました。岩、歩荷、アイゼンワークなど思い出す。40 年振りで木々が随分と高く、バットレス下の堰堤は草ボウボウ。

彼は水泳部出身だったけど、先輩の勧誘がよかったので山岳部入部。山より人が好きだったのかもと、今にして思う。3 回生になったときに AAVK で私が委員長校を引き受けてしまいました。最初は 3～4 校しか出席していなかったのですが、彼が各大学の参加を上手に促し、毎回十数校出席となりました。平井一正先生に講演いただく機会も彼が作り、大盛会でした。また、OB の昔話をきっかけに、神戸大、商船大、関学、甲南が集ってのサッカー大会、試合後の飲み会も良い思い出です。あの頃、山の連中とは、街中より山で出くわすことが多かったですね。あの頃の山仲間とまた呑み語り合いたいですね。でもあなたがいないと、それも叶わぬことでしょうか。惜しいです。

宮崎 哲（大 H3 理）

松山さんの忘れられないエピソード。1 回生の春山、笠ヶ岳～槍ヶ岳でのこと。抜戸岳から主稜線に出た後、杓子平あたりでの出来事だったかと記憶している。合宿のメンバーは 4 回生が西名さんと松山さん、2 回生が長島さん、1 回生は田中一也と僕という構

成だった。

その日はぼんやりと明るい曇り空で、偵察山行でデポしてあった赤布竹竿の束をルート上に発見した僕たちは、その回収を松山さんに頼み、残りの4人はそのまま先に進んだ。ところがすぐに追いついてくるはずの松山さんが、いつまでたっても現れないのだ。デポ地点まで引き返しても姿が見つからない。稜線上なのでルートを外した可能性は低く、雪庇を踏み抜いたか何かの理由で遭難したに違いないということになって、西名さんと長島さんで搜索を開始した。松山さんが消えた赤布デポ地点から転落の痕跡が無いか搜索するが、結局日没までに手掛かりはつかめなかった。

テントポールは松山さんが持ってたので、搜索の間に1回生2人で横穴の雪洞を掘り、全員がそこで一晩を過ごす。松山さんが消えた状況があまりにも不可解な為、搜索の方針も定まらない。翌朝…当てのない気持ちで続きの搜索準備をしている所へ、「オーイー!!」という明るい声とともに 元気よく手を振って、ピークの向こうから松山さんが現れた。その時の姿は、ヒーロー登場の様であった。

聞くところによると、デポした赤布が地面から抜けず、何とかしようとグルグル竹竿を中心に回っているうち、ふと顔を上げると方向が分からなくなっていた、という話。その日は風を避けて小さな穴を掘り、その中にしゃがんで1人でビバークしたという事であった。

ぼんやりとした天気で足跡も判然としなかったため、180度逆方向に歩きはじめてしまったというのが真相のようで、深く考えず笑い話としたい。

松山さんは、礼儀や社会的なマナーを守らない行いに対してはキッチリ叱る人だった。周りの人に対する面倒見がよく、気遣いのいき届いた方でもあった。もう一度あのサバサバした口ぶりをお聞きしたかったのに、それも叶わぬことになってしまった。

田中一也（大 S63 経）

年末のポストに喪中はがきが届き松山さんの訃報を知った。その後 HP の掲示板に書かれていた事で詳細を知り愕然としてしまった。ここ数十年は年賀状のみの繋がり、短文のやり取りだったのでそこ迄悪いとは思ってもいなかったからだ。

松山さんとの思い出は最後の3月合宿(笠ヶ岳～槍)に凝縮される。私のプラブーツのイ

ンナーが一向に乾かず稜線に出た後、凍ってしまうと怖がっていた私をインナーとアウターの間にビニール袋で包む方法を丁寧に教えて下さり暖かく助かったのは良い思い出だ。プラブーツタコの小ネタも沢山受け継いだ。双六の避難小屋で数日過ごし沢山の事を語り合った。色々な事件もあった合宿ではあったが、最後に気持ち良く晴れた槍の穂先に登頂出来たのは山での一番の思い出だ。

山への情熱は衰えず、卒業後4年を経ても岳沢での5月合宿に参加し、季節外れの風雪に見舞われ雪庇と雪崩が多発する最悪のコンディションながら明神主稜を当時2年の西濱とビバークしてまで明神岳、前穂高を完登されている。社会人になり忙しい中で短期間の参加ながらやっぱり強い松山さんを見せてもらって嬉しくなった。

話好きな方だった。3年違いの後輩に対して通常なら指示命令で終わりになるもの。真剣に問答してくれる方とは中々出合う事はまれだ。

山の話の時は何故か最終的にヒートアップして当時のフリークライミングの話になり、お決まりの様に話は決別して終わる。しかし別の何でも無い話題など多岐に渡り譲り受けた話や教えについては山の後輩だけでなく職場でも後輩に対し同じ様に話している自分が居る。生意気な後輩達を何時も真剣に論してくれる真面目で心優しい先輩はもういない。本当に残念でならない。



1988年12月抜戸南尾根にて



2022年10月 駒王集会にて

<会員短信>

～2024 年秋の集会案内の出欠に併せて～

福井 亨 (旧 24 理)

去る 7 月 11 日死亡いたしました。お世話になりました。ありがとうございました。

義妹 太田ひろ子

麻島 重彦 (大 33 経)

本人が認知症になり無理になりました。ハガキを頂いてきましたが今後は不要に願います。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

鈴木 頼正 (大 33 経)

小生は今のところ、口だけは達者です。腰と動作がうまく機能できません。是非参加したい。JR 名古屋経由で木曾まで JR、帰りは松本、長野、米原経由で京都を考えています。家族の反対を押し切って参加予定です。10 月に入ったら最終返事をします。

牧野 宏 (大 36 経)

元町駅から少し南東のホテルの静かなバーが気に入りまして、六甲山を眺めながらよく冷えたシャンパンとチーズと週 2 回昼過ぎから夕方まで幸福の長居。酷暑の神戸なんとか過ごしました。つまり、窓際族をしていました。

越田 和男 (大 36 理)

不整脈、肺疾患、腰痛のトリプルパンチです。遠出が出来ないのは何ともさびしいです

ね。盛會を祈ります。

田中 孜 (大 36 経)

体調不良につき欠席します。

飯田 進 (大 38 経)

足、腰、身体、自由がききません。皆様によろしく。

二谷 和成 (大 38 経)

今年の猛暑には参りました。外出は病院通い

のみです。来年は是非とも出席したいと思います。

岡田 英暉 (大 38 営)

どうにかこうにか元気です。

カンロクも 夢見る夏の 槍穂高 英暉

福田 信三 (大 39 理)

甲南大学リカレント聴講生 (世界、経済、心理学) の前期終了。試験やレポート作成の緊迫感を久し振りに感じました。孫位の学生との授業や昼食は緊張するものの新鮮で面白いです。図書館の充実には驚きです。日常生活には大変化無く毎日包丁を持って何か調理、オバサマ達に振る舞っています。時々、神戸大生 15 人位にカレーライス、ポテサラなどもごちそうしています。ということで暇無く動いています。皆様によろしくお伝え下さい。

武田 雄三 (大 39 経)

出席致しますのでよろしくお願い申し上げます。

村上 与利一 (大 39 営)

出席も今年で最後になるかな、よろしく。

伊丹 徳行 (大 40 法)

欠席いたします。

竹中 統一 (大 40 経)

欠席させていただきます。

安井 正 (大 40 経)

お陰様で元気に暮らしています。

柏 敏明 (大 41 経)

この 17 日 (9 月) まで入院していました。4

月に長崎で急性胆管炎となり、救急車で原爆病院に搬送され、小西さん、浪川さんに変な面倒を掛けてしまいました。今回の手術で胆のうを取りましたので、安心して何処へでも行けます。10月には久しぶりに上京する予定です。

井上 徹（大41 営）

大学に入学し山岳部の5月合宿で先輩方のタバコの火付けを命じられたのがきっかけで最終的にはヘビースモーカーになりました。それが祟り、今では重度の肺気腫になり、毎日喘いでいます。30歩ぐらいしか連続歩行出来ない状態です。それでもゴルフと年2回のクルーズ旅を楽しんでいます。ゴルフは週一を目標にしています。

森岡 宏光（大43 理）

令和6年度甲南山岳会総会に初めて参加させていただきました。56年ぶりです。当日、私が大学3年の春山合宿に高校生で参加された南里章二さんにお会いしました。「以前、奥大日岳でお会いしましたね？」とまだ一度しかお会いしたことがないのに挨拶され、凄い記憶力に感心しました。

頼富 信輔（大43 法）

残念ですが既に、他に予定がありますので欠席させていただきます。皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

赤田 正和（大44 理）

両日予定があり欠席です。盛況を祈念します。狂暑（？）の夏、社有林も最近行けず、運動不足です。先般（9/13～14）有馬温泉→宝塚歌劇と社員旅行実施、総勢230名。無事

終えてホッとしているところです。

南里 章二（大45 理）

土日は講座予定が入ることが多く、残念ながら欠席させていただきます。8月後半久しぶりに中国旅行の予定でしたが台風で欠航、体調も思わしくなかったので断念しました。皆様方どうか宜しくお伝えください。

矢吹 操（大45 理）

元気です。健康維持の為、また、ジョギングを復活するつもりです。（ジョギングで健康維持が出来るか不明ですが、そういう気持ちで走ります。）

伊藤 辰之（大45 営）

令和6年8月6日永眠いたしました。生前は大変お世話になりました。故人に代わり心より御礼申し上げます

ご長男 浩之様より

井上 知三（大48 文）

葉書を発送する側から受け取り返信する立場になりました。大森さんから事務を受け継いで22年余り会員の皆様を支えられて、これまで何とか務めることができました。感謝・感謝です。今は次の世話役の方に無事引き継ぎホッとしています。近年、訃報の知らせが多く寄せられて寂しい思いです。秋の集会で皆様にお会いできるのを楽しみにしています。

平井 幹男（大50 文）

私事ですが7月末に母が103歳で亡くなり葬儀の各資格停止手続き、相続手続きと日々走り回っております。年末までには終わると思

いますが今回の秋の集会は残念ですが欠席させていただきます。盛会を願っています。

村田 信一（大50経）

皆様お元気でしょうか？私は昨年歩行困難な程身体が固くなり、ヨガやバレエなどで回復してきたところです。登山はすっかりご無沙汰していますが信州のあちこち訪ねて山を眺め過ごしています。この夏は信越五山を訪ねて中でも戸隠山が印象に残っています。ご盛況お祈りしています。

中澤 章治（大50文）

毎朝境内の落葉掃きに精を出しています。時々飲みにも行っています。気の向いた方はお誘い下さい。

高橋 けい子（大50文）

“秋の集会”のご盛会をお祈りしております。

西村 清（大51経）

今年の5月から井上先輩より事務を引き継ぎました。今まで他人事でしたがこれから大変です。引き継ぐ若手がないのが悩みの種です。

渋谷 一正（大51営）

昨年後半からはゲテ（西村君）、ポチ（大柳香代子さん）、西村夫人（綾子さん）、陽子ちゃん（村岸陽子さん）、チョー助（川口豊君）に連れられて六甲山や箕面の山歩きを楽しみました。気分は学生時代よりもっと楽しんでいきます。その後、5月には自宅階段でスリップ、右足捻挫で2か月苦しみました。その後も次々と災いに会い、厄払いせんとあかんかなと考えるこの頃です。

大柳 香代子（大51法）

登山を再開し、約20年になります。この間、北アルプス憧れの稜線を小屋泊まりで沢山歩きました。岩稜地帯や鎖場もこなすことができたのは山岳部の経験があつてこそです。古希を迎え目標をもって、まだまだ山を楽しみたいのです。

松本 好博（大52法）

元気です。クラシック山歩き再開しています。

大森 雅宏（大53文）

振り返ると1974年の入部以来50年が経ちました。50年を区切りに山岳会を卒業することにいたしました。こののち、各種案内や会報のご送付には及びませんのでお知らせいたします。末筆ながら皆様のご健康と貴会のご隆盛をお祈りいたします。

要 裕晶（大55営）

5月の総会で山本恵昭さんから会計担当を引き継ぎました。微力ではございますが頑張りますので宜しく願いいたします。
7月に白内障の手術をしました。透明感のある視界と乱視がほぼ無くなり、とても満足しています。

川口 豊（大55経）

元気にしております。暑い日が続きますが皆様ご自愛ください。

川野 幸彦（大56理）

元気で過ごしております。7月は立山に登りました。年を追うごとに体力が低下し辛いです。身体のアちこちもガタがきております。

元気なうちは山登りを続けたいと存じます。皆様によりしくお伝えください。盛会となりますよう祈念いたしております。

山本 恵昭（大56理）

この夏は台風に翻弄されて思っていたように山に行けません「来年行けるかな」でした。山は逃げないと言われるけれど、歳をとるとチャンスは逃げて行きます。

西岡 進（大57理）

ご案内いただきありがとうございます。当日は老人ホームにて仕事です。同期の青木、大勝とは定期的に元町で会食しています。

八木 健（大58経）

9月に右足、年明け1月に人工膝関節手術を予定しております。これで少しでも山歩きが出来ればと思っています。盛会を祈念申し上げます。

藤井 琢也（大H6経）

お世話をかけます。会の運営ありがとうございます。

宮崎 哲（大H3理）

ご無沙汰いたしております。当年で60歳となり、勤めていた会社を定年退職しました。かと言って遊んで暮らす訳にもいかず、暫くは職探しの毎日です。

松成 健（大H8文）

北海道に赴任して3年目となりました。何時何処に転勤するか分からないので、今のうちに楽しみます。昨年からのアキレス腱骨化

症は体外衝撃波（ESWL）によってかなり改善しました。ただ、何時再発するか分からないので登山は控えております。なので今はススキノのパフェ、カレー、ラーメンを楽しんでいます。

米山 悦朗（新高29）

今回は欠席です。

北方 龍一（新高30）

88歳になりました。変わらず、六甲山の水力発電で苦勞しています。皆さんに宜しくお伝えください。

竹原 佑爾（新高33）

最近コロナに罹り二ヶ月近く後遺症に悩みました。漸く元気を取り戻しつつあります。

川村 静治（新高S40）

7月に五島列島の福江島と中通島へ行ってきました。

佐藤 昌弘（新高S40）

先回も退会の手続きを依頼しております。当方年齢的に活動が無理ですので再度退会の手続きをお願いいたします。

福田 裕久（新高S45）

年々体力の低下を感じております。元気に活動されている皆様に尊敬するしかありません。

白川 浩平（新高H2）

妻と犬を連れてハイエースでの温泉巡りをしています。4月に大分～熊本～長崎、5月には東北へ行きました。山の中に湧き出ている露天風呂に入るのは良いものです。

<会員短信>

～2025 年定例総会と

慰霊祭の出欠に併せて～

鈴木敬吾（特別会員）

当日予定があり欠席します。盛会をお祈りします。

鈴木頼正（大 33 経）

昨年 11 月に 91 歳になりました。ゆっくりと歩いています。足腰が悪くなりました。山岳会総会には出席の予定ですが万一天候が悪くなれば、欠席するかも知れません。

牧野宏（大 36 経）

近所の文化教室の写真クラブに在籍しています。講師の計らいで各地の名所に撮影の旅が楽しい。私が最高齢の様子。若手（とは言え高齢者の集団）メンバーに迷惑を掛けてはいけないと、さっさと歩くなど努力している。名刹にはメンバーより一足先に到着。境内をうろつき住職の後について正門に差し掛かると、メンバーの皆さんが門の向こうにズラーとカメラを住職に向けている。私は住職の一番弟子のようにピタリとくっついている。老害をやってしまった。トホホの撮影会。長く生きていると色々な経験ができます。

越田和男（大 36 理）

祝 創部 100 年！山岳部復活！
体調不良 残念ながら欠席します。

田中孜（大 36 経）

体調不良につき欠席します。

伊藤久三郎（大 36 経）

毎日、統合失調症で病院通いをしています。皆様によりしくお伝えください。

二谷和成（大 38 経）

今冬の外出は病院通いのみでした。暖くなれば散歩でもと思っています。

福田信三（大 39 理）

体育会山岳部復活おめでとうございます。2024 年 4 月よりリカレント履修生として岡本キャンパスへ通いました。学生達との同室の授業では 60 年の時差を感じ、驚いたりアキレたりの連続でした。2025 年度は 1～2 科目の聴講を予定しています。ところで部員は？再度、山岳部復活、ウレシイです。

井上徹（大 41 営）

相変わらずゴルフと病院通いの高原暮らしの日々です。山岳部の時代に覚えたタバコ（ピー缶）吸い過ぎが祟り肺気腫を患い激しい歩行は困難な状態です。ゴルフ仲間に 94 歳の方がおられ、彼に励まされ月 6 ラウンドを目標にやっています。

伊丹徳行（大 40 法）

去年 12 月心臓にリードレスメーカーを装着し、身体障害者 3 級になってしまいました。以前は息切れしていた階段も問題なく上ることができるようになりました。しかし健康が第一です。頑張りましょう。

赤田正和（大 44 理）

宜しく願います。

矢吹操（大 45 理）

リハビリに通っています。持病は高血圧症のみ。歳相応に生活しています。

井上知三（大 48 文）

新世話役の皆様ご連絡ありがとうございます。

新人部員も入部して重ねてご苦労様で

す。後期高齢者が、もうすぐそこまできています。何もお力をお貸しできませんが総会・慰霊祭・その他行事には出来るだけ参加しようと思っています。新人さん、会員の皆様にお会いできることを楽しみにしています」。

村田信一（大 50 経）

4 月 6 日に次男が新築した家に引っ越ししました。今までマンションの隣の棟に住んでいて行き来が楽でしたが 3 km 程離れた小学校の前です。翌日、孫がそこで入学式を無事済ませてファミリーの新生活を構築中です。甲南山岳部見守っています。

平井幹男（大 50 文）

晴耕雨読の年金生活者。山岳部復活のニュースを肴に酒を飲む毎日です。総会での再会を楽しみにしています。

中澤章浩（大 50 文）

お陰様で元気に過ごしています。結構多忙で近くの山にも行けていません。伊藤、森先輩が亡くなられたことはショックです。森先輩とはもう一度お会いしたかった……。今年は極力出席するように努めます。山岳部復活誠に嬉しく思います。微力ながらバックアップするつもりです。

高橋けい子（大 50 文）

いつもお世話になっております。まさかの山岳部復活!! 夢のように驚きました。

ここに至るまでの皆様のご努力に感謝申し上げます。松田君、出口君ガンバレー!!

西村 清（大 51 経）

3 年ほど前から、今の内、と各所へ足を伸ばしていますが、悲しいかな現役の時の様にはいかず、もっぱらホテル、旅館を併用しながらの 2 日程度の山行です。昨年からは現役生の活動を補助できるように心掛けています。

松本好博（大 52 法）

まだまだ元気です。定例総会、創部 100 年集会、皆様とお会いするのを楽しみにしています。

鳥井陽子（大 54 文）

両日とも別の予定が入っており、残念ですが出席できません。ご盛会をお祈りします。

川口豊（大 55 経）

退職後、近郊の日帰り山歩きを数日おき位で続けています。特にどこの山と決めている訳でもなく思い付きやネットの記録などを見て気まぐれに行ってみるという事を繰り返しています。低山ばかりですが四季折々の山中の気配に触れることで癒されています。

泉清司（大 56 営）

酒も段々弱くなりました。

川野幸彦（大 56 理）

皆様お変わりございませんか。私は元気に過ごしております。定年後、毎日好きなこと

をしております。現在、四国遍路でお寺を巡っております。残り 63 ヶ寺で年内には結願の予定です。総会には参加の予定です。

八木健（大 58 経）

山岳部復活大変嬉しく思います。又、先輩方皆様のご支援には、頭の下がる思いです。

当方体調悪く、今回参加出来ませんが復調出来れば、是非ご支援したいと思っています。

皆様のご活躍を祈念申し上げます。

西名俊英（大 60 理）

昨年 10 月末に一旦退職。11 月に実母、12 月に義母が亡くなり、なかなか落ち着かない日々です。ご盛会をお祈りします。

松成健（大 H8 文）

北海道生活 4 年目になりました。道内を各所巡って楽しんでおります。海の幸、山の幸を食べてススキノの酒屋を巡り中です。登山の方は昨秋に大雪に行ったきりですが、雪が無くなったら、もう少し山行を増やして見ます。

北方龍一（新高 30）

年齢相応の健康状態です。相変わらず NPO 法人のボランティアで頑張っています。

神戸市、兵庫県、環境大臣より表彰状を受けました。

竹原佑爾（新高 33）

山岳部の復活おめでとうございます。安全第一で今後のご活躍を祈念いたします。

川村 静治（新高 40）

昨年中にホームページに山嶽寮のページを作

り時報、山嶽寮の手に入るものを掲載しました。未掲載の冊子をお持ちの方がおられましたらご連絡ください。

福田裕久（新高 45）

大学山岳部復活おめでとうございます。

小生は体力低下も甚だしく犬の散歩にも息切れするような今日この頃です。

松下弘幸（新高 54）

皆様によりしくお伝えください。

大野 彰夫（大 H9 経）

iPhone から送信

遅くなり大変申し訳ございません。

H9 年卒の大野です。

この度の創部 100 周年お祝い申し上げます。

私は現在はクライミングや登山はしていません。アウトドアと言えば、せいぜい家族で釣りに行くかピクニックする程度です。

ただ、真砂沢 BC か二股あたりで飲んだ雪渓の水が美味しかったことが忘れられません。



<HP 掲示版よりダイジェスト>



牧野宏さんの「富士」富士山麓の一周ウォークです。総距離 153 km、累積標高差 1000 m、実働 4 日間、1 日平均 35 km？チャレンジ精神を見習いたいです。

富士山麓一周ウォーキング

牧野宏大（大 S36 経）2025/06/08 No.691

甲南山岳会総会も終わり 5 月 14 日富士一、富士山山麓浅間神社（せんげん）へ向かった。

昨年 7 月淡一（淡路島徒歩一周）の最終日、舞子への帰路、次は富士山麓を歩こうと決めていた。

14 日朝、第一歩スタート。

★ 1 日目 5 月 14 日（水） 晴

富士宮市に前泊。この旅に娘と孫が同行する。

★ 2 日目 5 月 15 日（木） 曇

富士宮市 9：00—白糸の滝 16：00～17：00—時間が遅いので休暇村までタクシー

移動—滝沢村—本栖湖—富士緑の休暇村 18：00 河口湖からの手前のそば屋・承知庵は美味い。本栖湖からの富士山は旧 1000 円札の裏面。

★ 3 日目 5 月 16 日（金） 曇

緑の休暇村 9：00—河口湖—山中湖 16：00

残雪の多い北側からの富士を眺めながらの移動の一日。

★ 4 日目 5 月 17 日（土） 大雨、強風

山中湖 8：00—富士浅間神社—須走—沼津市 20：00

悪天候は苦しい。やっと沼津市。駿河湾の魚は美味。

★ 5 日目 5 月 18 日（日） 曇、強風

沼津市 9：00—田子の浦—出発地・富士宮市 16：00

沼津で老婦人からエール。

見えなくなる迄、手を振ってくれた。

16：00 ゴールイン

距離 153km 標高差約 1000m

風、雨にあったが良い旅だった。

ゆっくり湯に入り身体を労わる。

やたら酒が旨い。

★6 日目 5 月 19 日（月） 曇

富士宮より一路神戸へ

強風雨に会ったり道草も多く大幅に時間を食ったことが澁のように心に残る。

帰神後、娘や孫から「同じコースをもう一度今度は全部歩きたい」との申しであり、「よっしゃー」と回答。完歩しよう。





山本さんは、我が山岳会のエースです。

釣りはもちろんのこと、春は山菜、秋はキノコ狩り、小鮎すくい、と遊びの天才。神戸大学山岳会の氷ノ山や雷鳥沢例会にも毎回参加されています。山行はごく一部のみの抜粋です。

今年 7 月には薬師岳→立山室堂へと縦走。アップダウンのある体力が必要なコースですね
山本恵昭さんの「アルプスがいっぱい」

奥穂高（涸沢岳西尾根）

山本恵昭（大 S56 理）2023/04/01 No.147

春うらら、その雪。

2 泊 3 日で、涸沢岳西尾根から、奥穂高岳を往復。

3 月 28 日新穂高 7 時発、白出沢出合を過ぎて、西尾根に取り付く。雪は少なく、先日の雨が凍ってガリガリ。

2360m 地点に 12 時半。整地して、テント設営。

29 日 5 時半発。蒲田富士手前の雪壁もその上のナイフリッジも、雪が安定していて難なく通過。涸沢岳までの長い登り。アイゼンが雪に隠れた岩に引っ掛かり歩きにくい。朝日に輝く笠ヶ岳を眺めたり雪庇の隙間から滝谷を覗き込んだりして、息を整え気持ちを落ち着かせる。

雪に埋まった穂高岳山荘周辺は広々として、ホッとする。

鉄梯子の上の雪壁がちょっと怖い。バイルも使ってダブルアックスで慎重に。

奥穂高岳山頂に 10 時 50 分着。快晴。360 度、どっちを向いても絶景。

涸沢岳に登り返し、さっさと下りたいところだが、異常な暖かさでアイゼンが直ぐに雪団子。スリップしたら、命とり。数歩ごとに、ピッケルで叩き落とさなければならぬ。蒲田富士のナイフリッジも雪が緩み、崩れそうで怖い。

テントに 15 時半。結構疲れた。

30 日朝ゆっくり準備して、6 時半発。ガリガリ急斜面を下って、白出沢出合で日向ぼっこ。フキノトウを少々。もう春の気配。

11 時過ぎ、新穂高の県警に下山届を提出。駐車場で濡れ物を干しながら、行動食で昼食。

定例の荒神の湯。清掃協力金が、200 円から 300 円に値上がっていたけど、この解放感は捨てがたし。

初めて雪の穂高に登ったのは、社会人になって数年経った年末だった。体力も技術も充実していたその頃、何の問題もなく、奥穂高岳から西穂高岳へ駆け抜けた。今は亡き藪内さんのリクエストだった。

藪内さんが何故そこに行きたかったのか。それは、職場の同僚だった宝塚山の会の人々が涸沢岳西尾根経由で奥穂高岳に来ていたから。

大学山岳部では、多くの者が卒業したら山を引退し、思い出話(それも悪くはないが)に花を咲かせ、他人の登山の評論家になっていた。

藪内さんにとって、社会人になっても山への情熱を持ち続け、日々トレーニングを重ねている宝塚山の会の人々が、眩しく輝いて見えたのだろう。

涸沢岳西尾根を登る途中、下山して来るその人と出会った。「ちょっと西穂まで」と自慢気に話しかける藪内さんの笑顔が輝いていた。その眼のキラキラは、少し恋愛感情も有ったのではないだろうか。

その後、藪内さんは宝塚山の会に入り、正月の鹿島槍ヶ岳で遭難した。メンバー 4 人の遺体が黒部側の谷底で見つかったのは、8 月だった。それから 40 年近くの時間が経った。何度意味のない「たら、れば」を繰り返しただろう。そして、今も。

藪内さんが生きていたら、今回の山行も一緒に

行っていただろうか。「いつまでそんなことやってんや、アホちゃうか」と笑われたかも。



南アルプスの女王 仙丈ヶ岳

山本恵昭（大 S56 理）2024/02/12 No.272

松峰小屋に1泊して、快晴の仙丈ヶ岳へ。

2月10日柏木登山口の駐車場へ上がる道に積雪有り。四駆スタッドレスなのでなんとか登り、除雪して駐車スペース作る。スタックした後続車の救援等、なんだかんだで出遅れて8時半に



出発。

13時、テントも持ってきているが尾根から100mほど下って松峰小屋へ。先客2名。後から4名増えて、今夜は7名が利用。隙間風と埃っぽいのが欠点。尾

根までの登り降りを考えると、もう少し標高の高いところまで登って、テント泊した方が良かったかも。

11日ヘッドランプを点けて、4時半発。結構な急斜面が出てくるが、トレースがしっかりあるので楽勝。そして、無風快晴。

山頂に10時。どちらを向いても、絶景。No.1 富

士山と No.2 北岳が背比べ。甲斐駒ヶ岳の向こうに八ヶ岳。中央アルプスも快晴。北アルプスには雲がかかっている。

松峰小屋に14時。もう1泊の用意はあるが、今日のうちに下ってしまおう。スープなど作って休憩し、14時半発。

なんとか明るいうちにと思っていたけれど、結局はヘッドランプのお世話になって駐車場に18時半到着。

14時間行動。自分で思っている以上に、歩くペースが遅過ぎ。年寄りアルアル。

12月1月とあまり山に行けなかった影響か、体力不足を実感。



白山大白水谷沢登りと白山

山本恵昭（大 S56 理）2024/09/30 No.384

また、天気不安定な週末。ましそうなところを求めて、白山登山と大白水谷沢登り。

沢泊りのつもりだったけど、天気が怪しいので予報を見ながら、それぞれ日帰り。

9月28日8時40分大白水谷沢駐車場を出発。すぐ

に、大白水谷に入り、沢装束に。

転法輪谷出合いを過ぎると、連瀑帯が始まる。次々と現れる滝を、登ったり高巻いたり。しっかり掴めるホールドが多いけど、独りなので慎重に慎重に。

沢の水に、火山成分が溶け込んでいるらしい。上流に行くほど、滝に析出。岩は白く水が青い。不思議な光景。

やがて、谷が開けて二股へ。左へ左へとつめていくと、ほとんど藪を漕がずに大倉山避難小屋近くの登山道に出た。ドドッと下って、駐車場に15時半。

大白川露天風呂へ。白水湖と対岸の山を眺めながら、のんびりゆったり。

真っ暗な駐車場で、車中泊。沢泊り用の軽量化食料しかない。夕食は、カレー飯とイリコ、ビーナッツ。そして、アルコール類は無し。ちょっとわびしい。

29日4時に起きて、天気予報を確認。何とか午前中はもちそう。日帰りで白山往復へ行こう。急いで、チキンラーメンを生嚙り。4時45分ヘッドランプを点けて出発。

しばらくして、雨がパラリと。「あれ、こんなはずでは」と思っていると、急に明るくなって雲海からの日の出。標高を上げると、遠くに北アルプスが見える。でも、日本海側からどんどん雲が押し寄せて、三方崩山に雲の滝。

室堂まで来ると人がいっぱい。

8時半、御前峰山頂はガスの中。風があって、半袖では寒い。一瞬、ガスが晴れてお池巡りコースが、「こっちへおいでよ」と誘うけれど、天気も体力も気になるのでパス。

室堂ビジターセンター前のベンチで休憩。トイレは、なんと水洗ウォシュレット。

あとはひたすら下って、駐車場に12時半。何とか、雨に降られずに下山できた。

再び、露天風呂で汗を流して、神戸へ。

そろそろ、山登りの終活。頭の中の「死ぬまでに行ってみたい山リスト〇選」から、また1つ実現できた。まだまだ、リストには沢山のプランがある。しかし、今なら実行可能なプランも、来年では体力的気力的にもう無理かもしれない。山は逃げないというけれど、身体は壊れていく。年寄りアルアル。

そして、このリストはいつの間にか、また少しずつ増えていったりもする。

たぶん、一生かけても全リストを達成することは出来ないんだろうな。だから、面白いのかもしれない。



甲斐駒ヶ岳 黒戸尾根より

山本恵昭（大 S56 理） 2025/03/10 No.550

黒戸尾根から甲斐駒ヶ岳。

なが〜い。そして、危険地帯がいっぱい。

3月8日尾白川溪谷駐車場を7時50分発。ジグザグとひたすら登る。途中、なにか気配を感じてふと見上げると、カモシカがこちらを見ていた。

花谷さんのガイドツアーと抜きつ抜かれつ、雑談。

やがて、急な鎖場や梯子が次々と登場。

七丈小屋に15時半。少し上がったテント場は、積雪のために傾斜地。表面が凍りついてバリバリ。ピッケルを振り回し、1時間ほどかけて整地。やっとテント設営。

9日、夜半に降雪があり、凍ったモナカ雪の上に新雪が30cmほど。いやらしい雪の状態。

暗いうちに出発する予定だったが、不安があるので5時45分、薄明るくなってから出発。

少し登ると風もきつい。

八合目から見るルートは迫力十分。岩を巻いたり、ルンゼを登ったり。甲斐駒さんは、なかなか手厳しい。

7時45分甲斐駒ヶ岳山頂に到着。風もおさまり、快晴のもと360度の展望。仙丈ヶ岳、北岳と間ノ岳、地藏岳、そして、富士山。遠くには、八ヶ岳、北アルプス、中央アルプス。

行きはヨイヨイ、帰りは怖い。急な所はバックステップで。モナカ雪は強く蹴り過ぎると、割れて中はサクサク。割れたブロックが足に絡んでくる。何度も自分に言い聞かす。慎重に、慎重に。

テントに9時半。

撤収していると、花谷ガイド達も下りてきたので、ご挨拶。こんなところにお客さんを安全に連れて上がるなんて、やっぱりプロガイドは凄

い。

ひたすら下って、駐車場に15時40分。疲れたけど、充実感がじわりじわりとこみ上げてくる。

この2日間で、事故2件に遭遇。

8日テントを設営していると、すぐ上の樹林帯に県警ヘリが何度もホバリング。救助されたもよう。

救援に駆けつけた花谷ガイドが下りてきて「やはり、滑落でした。表面が硬いモナカ雪で注意が必要です」と。

9日核心部のルンゼを下山中、20mほど先を下っていた男性が滑落。ステップが崩れてそのまま崩れた雪に乗った状態で滑り、視界から消えた。体をひねったように見えたので止まったかと思い、声をかけるが返事はない。下っていくと、同行者ともうひとパーティーがいて、さらに下の急斜面を落ちていったそう。すでに、救助要請済とのこと。何度か県警ヘリが飛んでいたが、厳しいだろう。

下山後、ニュースで「県警ヘリが意識不明の男性を発見。雪崩の危険性が高いので、いったん救助を断念。500m滑落か」との報道。

一刻も早く救助搬出されることを祈ります。

ここ数年の異常気象。寒暖差の激しい天候の繰り返しによる不安定な雪の状態。今までの経験だけに頼るだけでは、安全を担保できない状況にあることを理解しなければいけない。そんなことを痛感した。





水晶岳

山本恵昭（大 S56 理） 2025/04/30 No.620
新穂高から奥黒部の雄、水晶岳へ。

4月25日8時新穂高発。

左俣谷林道を歩き始めてしばらくすると、対岸からの大きなデブリが道を塞ぐ。まるで製材所の如く大木が積み重なっている。

一方、いつもならデブリランドの小池新道にはほとんどデブリがなく、歩きやすい。なんだか変な積雪状態。

大ノマ乗越から弓折岳を越えて行くが、雪がゆるんで踏み抜き多発。そして、頻繁に落とし穴に腰まではまる。体力気力を消耗。

トレースがあると思って近づくと、真新しいクマの足跡。いままで見たなかでは、一番大きな足跡。

18時40分、なんとか暗くなる寸前に双六小屋に到着。雲が赤く焼ける。

26日、昨日のペースでは、とうてい水晶岳には届かないと、朝から諦めモード。5時15分発、とりあえず、三俣山荘まで行ってみよう。

快晴、絶景。三俣蓮華岳まで来ると、水晶岳がぐっと近い。

天が味方をした。寒気が入り、雪は硬くしまったまま。この状態なら、鷲羽岳に登らず、黒部

源流経由で、水晶岳に届くかも。

風が強いので、三俣山荘の風裏にテントを張らせてもらう。

9時発、アタック装備で出来るだけ標高を下げるようにトラバース。10時岩苔乗越までアイゼン歩行。さらに少しトラバースを続けると、あとは夏道で水晶小屋に11時15分。

水晶岳間近のところで、先行4人パーティーが引き返してくる。その先の雪壁で断念したそう。10mほどの雪壁を慎重にキックステップで越えると、あとはまた夏道となる。

水晶岳山頂に12時20分。

目の前に、祖父岳と雲ノ平。その奥に、黒部五郎岳から薬師岳とたおやかな山並みが重なる。赤牛岳の遥か向こうに立山連峰。東沢谷を隔てて、裏銀座の山々。振り返れば、鷲羽岳の奥に槍ヶ岳。

一生、目に焼き付くであろう絶景だ。

来た道を戻り、最後はワカンを履いて登り返し。16時三俣山荘に戻る。

風はさらに強くなり、雲が出て気温も低い。靴が凍る。

夜には風が止み、満天の星空。

27日、6時発。三俣蓮華岳から丸山への間、何度も振り返る。水晶岳、鷲羽岳、薬師岳、黒部五郎岳、雪を纏った黒部源流の山々が見送ってくれているかのようだ。また、逢う日はあるのかな。

双六小屋8時30分。弓折岳手前で、雷鳥に遭遇。トレースの横にいてぜんぜん逃げないなと思っていたら、カップルだった。雄は夏羽へ入れ替わり中のようなのだが、雌はまだ冬羽のまま。大ノマ乗越からの下りは、雪が緩み、踵に体重を乗せてザクザクと快適。

新穂高に15時。天候に恵まれて、なんとか、水晶岳にたどり着けた。

最初は、6 年前に雨で敗退した赤牛岳へリベンジするつもりでいた。山頂には届かなかったが、高天ヶ原温泉の河原露天風呂、獣の楽園温泉沢、スキー三昧の楽しい山行だった。

今回の水晶岳で、体力の限界か。この歳では、もう雪の赤牛岳に立つことが叶うことはないだろう。



若手 OB さんたち、よろしく！

阿部康彦さん(大 H6 法)のご尽力で、若手 OB に連絡をとっていただき、連絡先を確認することができています。感謝です。

阿部さんは、道場の烏帽子岩でクライミングの早朝トレを毎週続けておられ、現役のクライミングもサポートいただいております。

還暦をお迎えの横浜在住の宮崎哲さん(大 H3 理)は、来阪の折に阿部さんと岡本バットレスを見学に。田中一也さん(大 S63 経)は、AAVK の OB と仁川でクライミング！

中西誠司さん(大 H4 経)は慰霊祭に高校生の娘さんと参加していただきました。

三田市在住にて作業療法士として医療現場にてご活躍中です。

西濱昌典さん(大 H4 理)は、ネパールに 10 年、マレーシアに 6 年、現在福岡市に 5 年、とのことです。

広島赴任中の松井修平さん(大 H9 法)は、低山ハイク、沢登りをお仲間と再開中と！

北海道札幌に赴任中の松成健さん(大 H8 文)は、冬季は毎朝ラッセルらしいです。

久々の還暦厄払い剣岳

田中一也 (大 S63 経) 0025/07/29 No.742

7/22～24 で還暦の厄払いにソロで早月尾根から剣岳行って来ました。甲南最後の部員だった池内君現役の時ちょくちょく近畿の山には一緒に参加させてもらってましたが、3000m 級のそれもテン泊は 27 年振りです。車で馬場島へ 1 日目～伝蔵小屋、2 日目剣岳ピークハント、元気なら下山、3 日目予備日下山の予定。

ここ 10 年は単身赴任で全くハイキングさえやってませんので初日から重荷と急登には参ったです。翌日のアタックも疲労の残る老体にムチ打って動きたかったが、ピーク到達後に軽い脱水。(担いだ水を初日に結構消費してしまった) 下り途中に雪溪から水を頂きながらのゆっくりペースで降りたのでその日に馬場島へは向かえず結局 3 日掛かりました。

クサリはわりと最近整備されており安全面には配慮されてる様に見えましたが、そこはやはり早月尾根なんで、長年にわたって積もりに積もった垢を落としてくれるには十分な汗をかかせてもらいました。

アルプスでしか感じられない山の涼しさ、冷たさ、ガス、カミナリ、雨、雪溪、圧倒的な紫外線の量、カモシカ、雷鳥、高山植物、汗の臭い、その内気にならなくなるアブや羽虫等々を久々に

体験させて貰いました。

早月尾根の入口に石碑があります。

『試練と憧れ』って書いてます。その憧れを現役諸君と共有出来ればまた楽しみが増えるかな？



旭岳登山

松成健(大H8文)2024/09/23 No.377

持病のアキレス腱骨化症のリハビリと紅葉狩りを兼ねて大雪山（旭岳）に行ってきました。AM4:30 自宅発、AM7:30 ロープウェイ姿見駅到着。この時点でかなり寒く、温度計が1℃でした。そこから周遊コースを歩く。途中、紅葉が既に見ごろでチングルマが赤くなっていました。しばらく水平でのんびり歩いていると、足が大丈夫な感じなので、思い切って頂上を目指してみました。前日に雪が降ったせいか、頂上付近が白く見え、高度を上げるにつれ植物に雪が残っていました。AM11:49 間宮岳山頂、PM1:09 旭岳山頂。間宮岳手前から天気が怪しくなり、山頂は雲の中でした。ここからひたすら下りでPM3:30 姿見駅着。思ったより寒くて汗をあまりかかずに登山出来ました。足は大丈夫そうなので登山再開を目指そうかなと考えています。



雪彦山地蔵岳東陵

阿部康彦(大H6法) 2025/07/19 No.737

東大台ヶ原の予定が雪彦に変更。35年ぶりに東陵登りました。涼しい天気での6ピッチ。易しい割に高度感もあり久々のマルチには丁度良いクライミングでした。登山道に時折、ビョコビョコ蠢く山ビルが恐ろしかった。



甲南山岳会秋の集会報告 2024

2024 年 10 月 26 日土曜日、27 日日曜日一泊二
と長野県木曽郡日義村木曽駒高原木曽文化公園
内「駒王」で甲南山岳会秋の集会を行いました。
た。



甲南山岳会総会及び慰霊祭報告 2025

2025 年 5 月 10 日と 11 日にわたって甲南山岳
会の総会と慰霊祭行われました。



妻たちのつぶやき

行きたいと
思った事ない
登り坂

真夏日の
毎日お見舞い
骨折れる

川柳ふたつ



編集 大柳香代子

山嶽寮 総目録

～57号より78号までの目次頁を抜粋



WEB PDF データはこちらです。

<https://konan1923.sakura.ne.jp/sangakuryoarch.html>

山嶽寮 甲南山岳会通信57号
2002年9月

会長就任のご挨拶	武田雄三	…1
随 想		
六甲山麓からの便り	鷲尾 顕	… 2
最後の冬山	茂木光隆	4
日本アルプスの発見		
－その虚像と実像－	雨宮宏光	… 6
女の腕まくり	鶴木 洋	12
大杉谷から大台ヶ原	福田信三	… 13
紀行 2000年～2001年 歩きから		
	雨宮宏光	17
シムシャルトレッキング		
	鈴木頼正	22
チベット紀行	雨宮宏光	30
徳本峠紀行	廣瀬健三	31
還暦登山	安井 正	32
ヒンズーラジトレッキングとルパルピーク登頂	米山悦朗	34
会員短信 総会・慰霊祭へ		
の出欠はがきから		42
追悼 小林大二郎君の御霊に捧げる		
	小川守正	49

故高倉達雄君を偲んで		
	津田昌男	51
追 悼 — 高倉達雄氏 —		
	朝山 崇	52
ふるいつつあんの思い出		
	芦田匡平	53
倉藤考次君を偲ぶ		
	廣瀬健三	54
クラさん	飯田 進	55
神前正博君を偲ぶ		
	柏 敏明	56
神前正博君のこと		
	井本 洋	58
神前正博君の思い出		
	奥山正紀	60
報告 定時総会		
	山本真博	62
会計報告	山本恵昭	63
75周年記念事業収支報告		
	村上與利一	… 64
行事報告 慰霊祭／木曾福島報告		
	大森雅宏	65
山嶽寮 書評		67
ホームページから 垂直と水平の旅人		
	南里章二	68
パキスタン余話		
	飯田 進	70
甲南中学山岳部 2001年夏山報告	神戸謙司	73
大台ヶ原 東の川 中の滝登攀記		
	池内友宏 他	… 76
鈴ガ沢東股遡行記		
	森本全彦 他	… 78
表紙 題字		
香月慶太名誉会長 カット	柏 秀樹	

山嶽寮 甲南山岳会通信 58号

2003 年 10 月

香月慶太さんを偲ぶ 鷲尾 顕
随想 思いつく尽に 佐野源一
紀行

2002 年～2003 年 歩 き か ら

雨宮宏光
チベットの秘境 可可西里 雨宮宏光
ニュージーランド山見遊山 越田和男
ブラジル 紀行 福田信三
2002 年 地 中 海ヨット航海記
柏敏明

会員短信

総会・慰霊祭への出欠はがきから

追悼

香月さんを偲ぶ会 鈴木功
横山洋君を偲ぶ 井上徹
洋君との思い出 井上知三
横山 洋 先輩とカレーライス

ホームページに寄せられたメッセージ

報告

定時総会 山本真博

会計報告 山本恵昭

秋の集会

ホームページから

会員の著作・翻訳のご紹介

平井吉夫会員「殺戮のタンゴ」他

中井久夫会員「清 陰 星 雨」他

南里章二会員「全 世 界 紀 行」

掲示板書き込みダイジェスト

山 行 と つ ど い

2002年度 甲南高校山岳部 年間活動報

山嶽寮 甲南山岳会通信 59号

2004年10月

六甲山麓からの便り 鷲尾 顕
故福田泰次氏のヒマラヤ研究

越田和男

先輩、伊藤愿氏を偲ぶ 山岡静三郎

伊藤愿氏山の履歴書 越田和男

紀行 ワハーン回廊 2004 米山悦朗

ブータン紀行 2003 年 10 月

越田和男

“ノアの箱舟”伝説の山、アララットへ

南里章二

随 想

驢 馬

飯田 進

会員短信

総会・慰霊祭への出欠はがきから

物故会員

ご遺族からのお便り

報告 定時総会

会計報告

故福田泰次氏ご遺族からの寄贈図書目録

越田和男

行事報告

秋の集会 木曾福島

// 慰霊祭

ホームページから

黒部五郎スキーツアー 山本恵昭

掲示板書き込み

ダイジェスト

山行とつどい

// フクデンさんの訃報に寄せて

// 残しておきたい書き込みあれこれ

現役だより大学山岳部部員紹介

2003 年度高校山岳部活動報告

山嶽寮 甲南山岳会通信60号 2005年10月

六甲山麓からの便り 鷲尾 顕
創 8 周年記念講演 旧制甲南高校山岳部と三
つの事件 小川守正
ヒマラヤ きた みなみ ゴーキョピーク登頂
福田信三
聖地カイラス山を巡る 南里章二
シャングリラに魅せられて 西濱昌典
紀行 劔二股を訪ねて 柏 敏明
追憶 石渡均先生の思い出 平井吉夫
随想
スイスを愛した日本人と幻の終戦工作
廣瀬健三
追悼 山田隆雄君 山本恵昭
会員短信
総会・慰霊祭への出欠はがきから
報告 定時総会
絵画寄贈について
会計報告
行事報告
秋の集会 木曾福島
慰霊祭
ホームページから 屋久島 塩崎将美
甲南山岳会員の著作・翻訳出版の紹介
越田和男
掲示板書き込みダイジェスト
山行とつどい
私の履歴書
甲南高校学校展
映画のページ
ネパール西濱

ホームページに部歌が流れます
甲南高校山岳部夏山合宿報告
他誌に見るKAC 香月慶太氏
「山岳」/ 会報ノート「岳人」
現役だより大 学 / 高 校

山嶽寮 甲南山岳会通信61号 2006 年 10 月

随想 記録の無い山行き - 昭和 11 年の鹿島
槍東尾根 - 伊藤文三
AACK人物抄 伊藤 愿 (イトウ ゲン)
(1908 - 1956) 平井一正
カブール報告 米山悦朗
嗚呼 あれはおもろかった 芦田匡平
福永隆一さん五十回忌の慰霊集会 平井吉夫
故郷 (ふるさと) もどき 廣瀬健三
若 き 日 飯田 進
紀行
MYANMAR Kaw Nu Symm Peak
(3,056m)トレッキング 北方龍一
タスマニアの贅沢山旅 越田和男
チロル、急げ者トレッキング (2006/08/03
~08/16) 福田信三
ジヨムソンからのダウンヒル 西濱昌典
追悼
山口雅也さんを偲ぶ 鷲尾 顕
乾隆也(卯兵衛)君を偲んで 水野正人
乾先輩を思う 西濱昌典
読書案内
田口二郎 著「山の生涯」川見博美
会員短信 秋の集会 / 総会・慰霊祭への出欠
はがきから
報告 定時総会
秋の集会 木曾福島
慰霊祭

ホームページから
掲示板書き込みダイジェスト
山行とつどい
ハインリッヒ・ハラー
これに残したい書き込み
森本寛之君の世界放浪旅行記
甲南山岳会会員名簿

山嶽寮 甲南山岳会通信 62号
2007年10月

随想

思い出 一甲南と早稲田の山岳部一
佐野源一
敗戦直後の山岳部北アルプス行き
中井久夫

紀行

タトラの山旅 大橋晋
四国の山 廣瀬健三
雲南省の自然を訪ねて 福田信三
チベットヒッチハイク横断紀行
森本寛之

論考

第二次大戦前後の山に関する「エピソード」
雨宮宏光
読書案内 エヴェレスト・1935年
越田和男

追悼 茂木光隆先輩のこと

越田和男

追悼 福永健治兄 廣瀬健三
会員短信

秋の集会 総会・慰霊祭への出欠はがきから
報告 秋の集会 木曾福島

定時総会

慰霊祭

ホームページから

ダウラギリトレッキング 柏敏明
ネパールトレッキング事情 塩崎将美
雪見会 御世話になりました

小西啓右

バテバテの鹿島槍ヶ岳

川野幸彦

薬師岳 薬師沢右俣黒部川山スキー

山本恵昭

山行とつどい

現役の書き込み

現役部員のヒマラヤ登山

山嶽寮 甲南山岳会通信 63号
2008年10月

2007年現役海外遠征支援金

募集結果のご報告 武田雄三

クビ・カンリ初登頂までの軌跡 谷勇輝

随想

ジョギングで健康維持 矢吹操

関東で一人ぼっちの健康維持 大勝規弘

山の男の歌 中澤章浩

紀行

“風の大地・パタゴニア”紀行 福田信三

いい年をして、いやはや 柏敏明

チベットトレッキング行動記録 浪川純吉

論考

プロ登山家の誕生 雨宮宏光

追悼

ニコリ・ニンマリ・ニヤリ・ニタリ

平井幹男

図書紹介

「妻におくった九十九枚の絵葉書・伊藤愿の滞
欧日録」 越田和男

会員短信

秋の集会 総会・慰霊祭への出欠はがきから

報告

秋の集会 木曾福島

定時総会

慰霊祭

ホームページから

わたしの夏休み56年ぶりの慰霊アルプス行

松方恭子

山行とつどい

現役の書き込み

山嶽寮 甲南山岳会通信 第64号

2009年10月

紀行

パキスタン辺境の峠 雨宮宏光

カムチャッカ紀行(アパチャ山登頂)

広瀬健三

論考

日本の山登り 雨宮宏光

報道から山を語る五章 雨宮宏光

随想

パタゴニアの雲丹 越田和男・

ヘギソバとイゴと安曇節 飯田進

権兵衛峠と伊奈節のこと 鈴木頼正

部員不足問題に関連して 広瀬健三

30年ぶりに山へ行ったら 大柳香代子

山行-報告

神戸大学カンリガルポ学術登山隊

剣北方稜線トレーニング合宿記録

山本恵照

(ホームページ掲示板書き込みから)

08夏・報告書(夏山個人山行-穂高にて)

谷勇輝

文登研(登攀)-剣岳周辺にて 谷勇輝

甲南山岳会・山岳部の歴史

会員短信・

報告

秋の集会 木曾福島

定時総会

慰霊祭

表紙題字カット:故香月慶太氏 故柏秀樹氏

山嶽寮 甲南山岳会通信 第65号

2010年10月

訃報

佐野源一氏(1日10)ご逝去(5月20日)

追悼 奥山先輩とのかかわり 伊藤文三

山行

5月連休登山(小窓尾根~剣岳~早月尾根)

川野幸彦

紀行 ユリアン・アルプス短訪記

越田和男 9

懲りもせず、再びヒマラヤへ

柏敏明

新線、在来線、廃線乗車の旅

伊丹徳行

論考 山を語る二篇 雨宮宏光

・雪崩学の危険

・山をめぐる七章

随想 相模野海軍航空隊 山岳部記

小川守正

この年でスキーなんぞやりだして

安井正

カンリガルポ学術登山隊に参加して

山本恵昭

山岳部に思うこと 松下弘幸

会員短信

その1-秋の集会・出はがきから

その2-総会・慰霊祭・出欠はがきから

ホームページ掲示板より
カンリガルポ遠征・出発から帰国まで
山行・散策

思いで多い小窓尾根
思いでの一枚
荒地山は今？
書籍などの文化関連

報告

甲南高校 山岳部 5 月山

秋の集会 木曾福島

定時総会

慰霊祭

表紙題字：故香月慶太氏

表紙カット：故柏秀樹氏

山嶽寮 甲南山岳会通信第66号
2011年10月

追悼

佐野ゲン時代の早稲田と甲南山岳部

伊藤文三

高校時代から長い付き合いだった「山本先生
の思い出」

田邊潤

山本三郎先生との出会いと思い出

廣瀬健二

論考

本と山のあれこれ

雨宮宏光

ダージリン・シッキム・シムラを訪ねて

越田和男

ヒマラヤの青い空、白く輝く秀峰群に魅せられて
佐野方則

随想

共に訪ねた思い出の山々

赤松恵美子

図書紹介/平井一正著『わが登山人生』私家版

(2010年)

越田和男

『裸の山—ナンガ・バルバート』ラインホルト・メ
スナー著平井吉夫訳

越田和男

会員短信

*秋の集会への出欠はがきから

*総会・慰霊祭への出欠はがきから

ホームページ(掲示板から)

*訃報

*山行・旅行

*文化、書籍

報告

*甲南高校

*秋の集会木曾福島

*春の総会

*慰霊祭

山嶽寮 甲南山岳会通信第67号
2012年10月

○追悼

伊藤文三君の霊に捧ぐ

福井實

文三先輩を偲んで

廣瀬健三

故伊藤文三氏の寄稿目録

柏木宏文様の思い出集

藤安賢一・平井吉夫・廣瀬健三

牧野宏・安井正・森本全彦

柏木宏文様追悼文「国鉄(JR)西組」村上與利
一

随想と美田さんへの追悼「二侯と二つの山」
芦田匡平

○山行

光岳・リンチョウ沢

山本恵昭

マレーシアの旅 キナバル登山

山本恵昭

赤石沢から赤石岳

山本恵昭

○山行(掲示板から)

富士山 山本恵昭・大森雅宏
大猫山～猫又山 山本恵昭
恵那山 山行き 井上知三.
富士麓の山ふたつ
一烏帽子岳 長者ヶ岳越田和男
コルチナ・ダンパッツオ 田辺潤・飯田進
西上州の山ふたつ
一物語山三ツ岩岳 越田和男
扇の山 山スキー 山本恵昭
奥三方岳 山本恵昭
久しぶりの山一大雪山 福田信三
上信国境・浅間隠山 越田和男
ポンポン山 塩崎将美
氷ノ山横行溪谷源流 山本恵昭
東丹沢の低山ふたつ 越田和男
京山、西山
(JAC ゆるやか山行) 廣瀬健三
○紀行
パキスタン北部フンザ溪谷に出現した
アッタバード湖について 佐野方則
エチオピア再訪 南里章二
山岳鉄道乗車の記 越田和男
2012 年度 九州クルージング 柏敏明
○論考
単独行転落 極限行を考える 雨宮宏光
○随想
趣味は何時までも変わりなし 鈴木頼政
フリークライミング運動の始祖
パウル・プロイス 平井吉夫
三方崩山 脱線記 大森雅宏
○会員短信
秋の総会 出欠はがきの近況欄
春の総会 出欠はがきの近況欄
○報告
*秋の集会 木曾福島

*春の総会

*慰霊祭

○編集後記

山嶽寮 甲南山岳会通信第68 号 2013 年 10 月

甲南山岳会会長就任にあたって 平井幹男
随想

カンとツキ 平井一正

秘湯 飯田進

紀行・山行

バイクで岬を巡る旅 安井正

海谷高地から阿弥陀山 山本恵昭

海外だより

近況報告 バリ島から 住友健時

山岳部から海外へ 西濱昌典

エッセイ

8000 メートルをめぐる話 雨宮宏光

追悼

訃報・塩野良之助様 越田和男

訃報・熊谷治様 井上知三

会員短信

平成 24 年秋

平成 25 年春

報告

秋の集会

山岳会総会

ホームページから

山行と集い 掲示板ダイジェスト

残しておきたいき込みあれこれ

山嶽寮 甲南山会通信 第 69 号 2014
年 10 月

山岳会の現状報告 平井幹男
中井久夫氏が文化功労者に選ばれました
山岳部と私 中井久夫
紀行・山行
ロシア・シベリア鉄道の旅 水渡清夫
モンゴル一人旅 塩崎将美
バイクで峠を巡る旅 東北編 安井正
信濃俣河内沢登り 山本恵昭
アイスクライミングアソート 谷勇輝
随想
ヤルカンド 飯田進
孫を訪ねて 2000 里 塩路晃二郎
高校 2 年生の大学山岳部「仮入部」の思い出
白川浩平
消防署員の一泊(仕事編) 谷 勇輝
エッセイ
山の資料箱から 雨宮宏光
訃報
訃報・関集三様
訃報・芦田匡平様
会員短信
秋の集会総会・慰霊祭への出欠はがきから
報告
秋の集会
定時総会 / 慰霊祭
ホームページから
山行とつどい
残しておきたい書き込みあれこれ
部室の明け渡し
編集後記

山嶽寮 甲南山会通信 第 70 号 2015
年 10 月

追悼 思い出の記 大関のこと 牧野宏
大関の思い出 越田和男
大関さんが逝ってしまった 飯田進
随想 この一葉に寄せて
鷲尾頭／福田泰次／南里章二／松本好博／高
橋けい子／大柳香代子／ 納富清司 / 大森雅宏
／鳥井陽子／川野幸彦／山本恵昭／八木健／阿
部康彦／西名俊英／松成健(既刊山嶽寮・個人
蔵アルバムからの再録を含みます)
山行
鹿島槍東尾根三題
平成 27 年 5 月鹿島槍ヶ岳東尾根川野幸彦
昭和 13 年春 鹿島槍東尾根登攀 福田泰次
昭和 11 年 5 月 鹿島東尾 福田泰次
紀行 散々な旅 素晴らしき旅 雨宮宏光
論考 日本アルプスの発見 その実像と虚像
雨宮宏光
翻訳
もうひとつの登山ソビエト・アルピニズム
文化と歴史 平井吉夫
訳者のあとがき「田口二郎さんからの宿題」
平井吉夫
会員短信
総会・慰霊祭への出欠はがきから
報告
行事報告 秋の集会
定時総会
慰霊祭
ホームページから
掲示板書き込みダイジェスト 山行とつどい
甲南山岳部・山岳会の歩み
90 年通史概説 越田和男
山嶽寮第 70 号 付録 DVD 目録

山 嶽 寮 甲南山岳会通信71号
2016年10月

甲南山岳部創部90周年記念式典を終えて 甲

南山岳会会長 平井幹男

甲南山岳部創部90周年記念式典

事務局 井上知三

次第/出席者/報告アルバム

山行・紀行

皆既日食 川野幸彦

笠谷から笠が岳 山本恵昭

随 想

上高地での三日間

雨宮宏光

東沢再訪

大森雅宏

追 悼

小原耕治先輩を偲んで 砂川彰雄

木全美さんを偲ぶ 平井吉夫

追悼 今井啓介君 川野幸彦

今井啓介君を悼む 大森雅宏

会員短信

90周年式典/総会・慰霊祭への出欠ハガキか

ら 事 事務局 井上知三

報 告 定時総会事務局 井上知三

慰 霊 祭 慰霊祭担当 松下哲夫

ホームページから

山行と集い

スイス写真日記

編集後記

山 嶽 寮 甲南山岳会通信72号
2017年10月

随 想 中高山岳部時代の山行 川村静治

山登りの人生 葉田順治

山行・紀行

タンザニア 物見遊山 2016 山本恵昭

2017年5月 立山 雄山 川野幸彦

追 悼

追悼 田邊潤君を偲んで 砂川彰雄

賀茶さん ありがとうございました 牧野 宏

田邊潤さんを偲ぶ 平井吉夫

田邊潤(ガチャ)さん略歴 越田和男

田邊潤(ガチャ)さんとの思い出の写真

越田和男

ガチャさん 有難うございました 柏 敏明

会員短信

総会・慰霊祭への出欠はがきから

(構成) 井上知三

報 告 秋の集会 渋谷一正

定時総会 井上知三

慰霊祭 松下哲夫

ホームページから(構成) 大森雅宏

山行と集い

海外写真日記

残しておきたい書き込みあれこれ

編集後記 塩崎将美

山 嶽 寮 甲南山岳会通信73号
2018年10月

山行

ニュージーランドの山旅 ルートバート

ラック

山本恵昭

紀行

ウズベキスタンの片田舎 ヌラタ山脈北

麓の村々を訪ねて 越田和男

論考

東ヨーロッパ再訪(2018 夏)

南里章二

随想
 思い出 飯田進
 1963 年の山日記 柏敏明
 追悼
 福井グリーンさんのこと 越田和男
 会員短信
 総会・慰霊祭への出はがきから
 (構成)井上知三
 報告
 秋の集会 井上知三
 定時総会 井上知三
 慰霊祭 松下哲夫
 ホームページから
 (構成)大森雅宏
 山行と集い
 その他もまとめて一挙掲載
 塩崎編集長の海外写真日記
 編集後記 塩鯉将美

山 嶽 寮 甲南山岳会通信74 号 2019 年10月

山行・紀行
 アイスランドの山旅
 2018 年 8 月 13～23 日ロイガヴェーグ
 山本恵昭
 5 月の立山三山巡り 川野幸彦
 定年退職記念登山 山スキー山行 2 つ
 山本恵昭

随想
 甲南学園の大学生活を思い出して
 鈴木頼正
 八幡梅仙寺基地にて 泉済司

御山谷沢登りに思う身体機能の衰え
 大森雅宏
 追悼
 小川守正先輩のこと 鈴木頼正
 追悼 武田雄三
 小川守正さんを偲ぶ会に思う
 大森雅宏
 山岳雑誌「山小屋」小川さんの寄稿文
 訃報追憶伊藤五介さんのこと
 越田和男
 平井吉夫の思い出
 廣瀬健三
 会員短信
 総会・慰金糸への出欠はがきから
 (構成)井上知三

報告
 秋の集会 渋谷一正
 定時総会 井上知三
 慰霊祭 松下哲夫
 ホームページから
 掲示板書き込みダイジェスト
 (構成)大森雅宏
 山行と集いその他もまとめて一挙掲載
 編集後記 塩鯉将美

山 嶽 寮 甲南山岳会通信75 号 2020 年10月

山行・紀行 シャモニとツエルマットの山旅
 2019 年 7 月～8 月 山本恵昭
 沖縄クルージング(2016.4.2～5.21)
 水渡清夫
 寄 稿 赤松恵美子様からののお便り

ホームページから
 掲示板ダイジェスト
 牧野さんの「神戸にしひがし・兵庫みなみきた」
 シゲアキさんの「北アルプスまとめて 8 題」
 南里さんの近著「世界史を歩く―新全世界紀行―」
 山行と集いをメインに (構成)大森雅宏
 編集後記に代えて
 寄稿のお願い 塩崎将美

山 嶽 寮 甲南山岳会通信78 号 2023 年10月

紀行・山行
 ザンスカール回想行
 (46 年ぶりのザンスカール) 南里章二
 大峰山上多古川本谷遡行
 負傷後自力下山顛末記 川口豊
 涸沢岳西尾根から奥穂高峯往復
 2023.3.28~30 山本恵昭
 南アルプス、上河内岳久しぶりに娘との登山
 山本恵昭
 四国遍路 2023 年 7 月 24 日~27 日
 川野幸彦

京都一周トレイル 7 月 3 日/8 月 21 日
 川野幸彦
 続・四国遍路 2023 年 8 月 29 日~30 日
 川野幸彦

随想
 山岳部諸先輩・同輩から教わった俗話
 その 2 牧野 宏
 中井久夫さんの「穂高・涸沢行」の周辺

越田和男
 OB 会の思い出 飯田進
 高遠山荘でのシェーン 柏敏明
 寄稿
 山登りの写真を見て、絵を描いています
 森本美子様
 追悼
 阿部公義さんのこと 米山悦朗
 住友健時さんを偲んで 山本恵昭
 会員短信
 総会・慰霊祭 出欠はがきから
 (構成) 井上知三

報告
 秋の集会 井上知三
 総会 井上知三
 慰霊祭 井上知三
 ホームページから
 掲示板書き込みダイジェスト/訃報関連
 /中井久夫さん関係の書き込み
 (構成) 大森雅宏
 編集後記 塩崎将美

.....
 編集注:2024年10月は休刊しています



編集後記

『山嶽寮』第79号をお届けいたします。

甲南山岳部・甲南山岳会は、これまで30周年・40周年の節目に記念誌『時報』特別号を発刊し、あわせて甲南山岳会の機関誌として『山嶽寮（さんがくりょう）』を継続的に発行してまいりました。中でも、創部75周年の際に編纂された記念号は、これまでの『時報』や『山嶽寮』の内容を総まとめした、非常に貴重な資料となっております。

そして、この2025年には創部100周年を迎え、その歩みと伝統を今に伝える証として、第79号を発行し、当会の歴史に新たな1ページを刻みます。

山嶽寮編集長 渋谷一正

事務局〒662-
TEL.0798-

兵庫県西宮市
FAX. 0798-



甲南山岳会では、これらの『時報』および『山嶽寮』のバックナンバーを、甲南山岳会公式ホームページに掲載しており、どなたでもご覧いただけるようになっております。

甲南山岳会：<https://konan1923.sakura.ne.jp/>

山嶽寮アーカイブ頁：<https://konan1923.sakura.ne.jp/sangakuryoarch.html>



「山の歌」

伊藤愿 作詞（旧4文）

橋本国彦作曲

一、黎明の御空に聳ゆる峯は
 瓔珞纏う久遠の姿
連なる山脈渺茫として
 紺青の空玲瓏に照り
 栄と希望に心は躍る
これこそ我等が憧れの山

二、嗚呼永劫の時の歩みに
 変らで立てる沈黙の峯よ
 嵐は去りて白日の下
陽炎燃えて頂上に舞う
我等が叫び虚空に響き
 厳かに立つ山岳の霊

三、静かに夕陽落ち行く辺り
 あかがね輝う山端の梢
 黄昏漂う谷間の木陰
 星の光の漏るる岩窟
自然を己が揺籃として
彷徨う我等が憩いの褥
彷徨う我等が憩いの褥

ベルグ ハイル

山岳部部歌【甲南高等学校山岳部 部歌】



画：故 柏 秀樹氏

山嶽寮 第 79 号

甲南山岳会

兵庫県西宮市

2025 年（令和 7 年）10 月

印刷 スピード冊子印刷